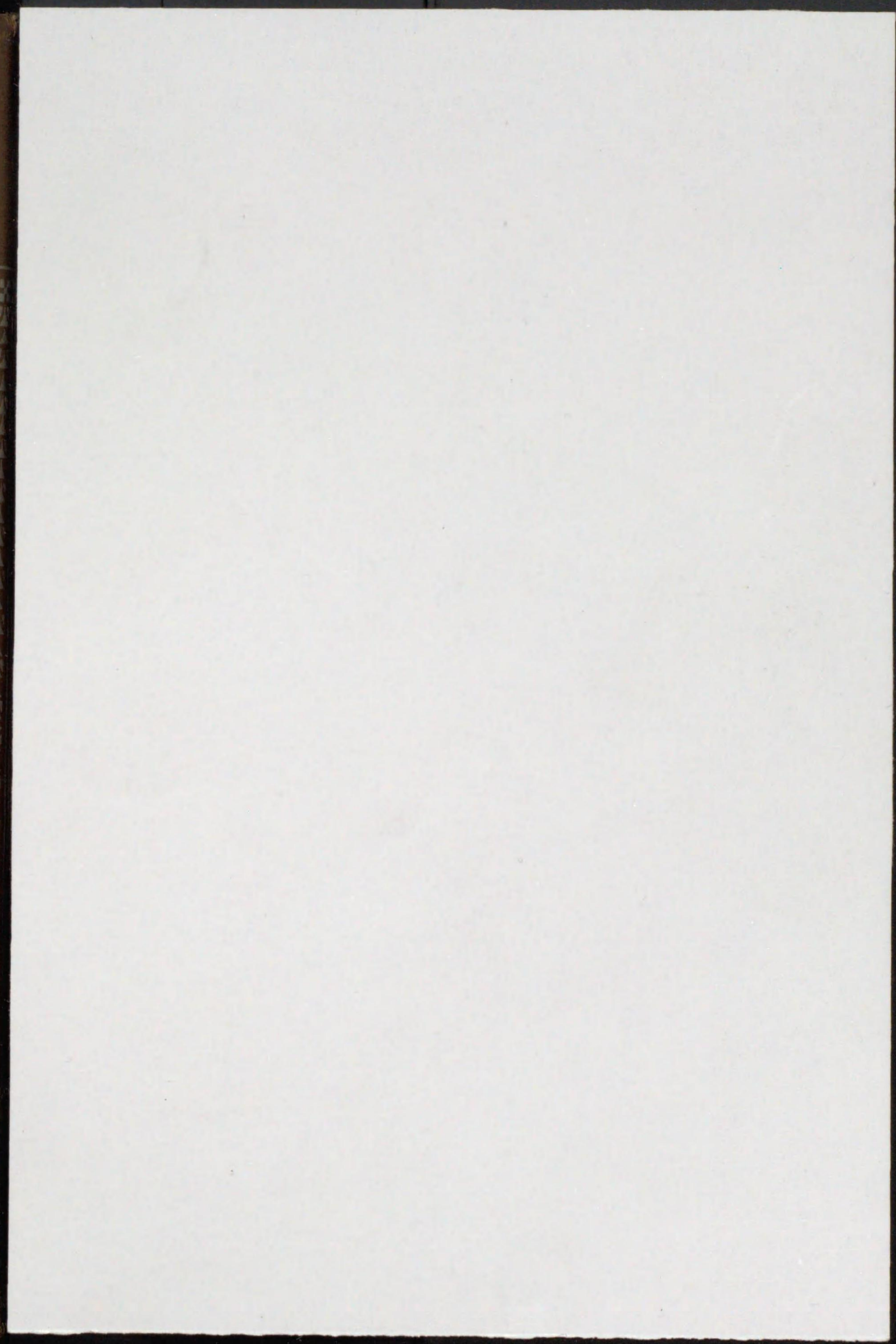


570-194

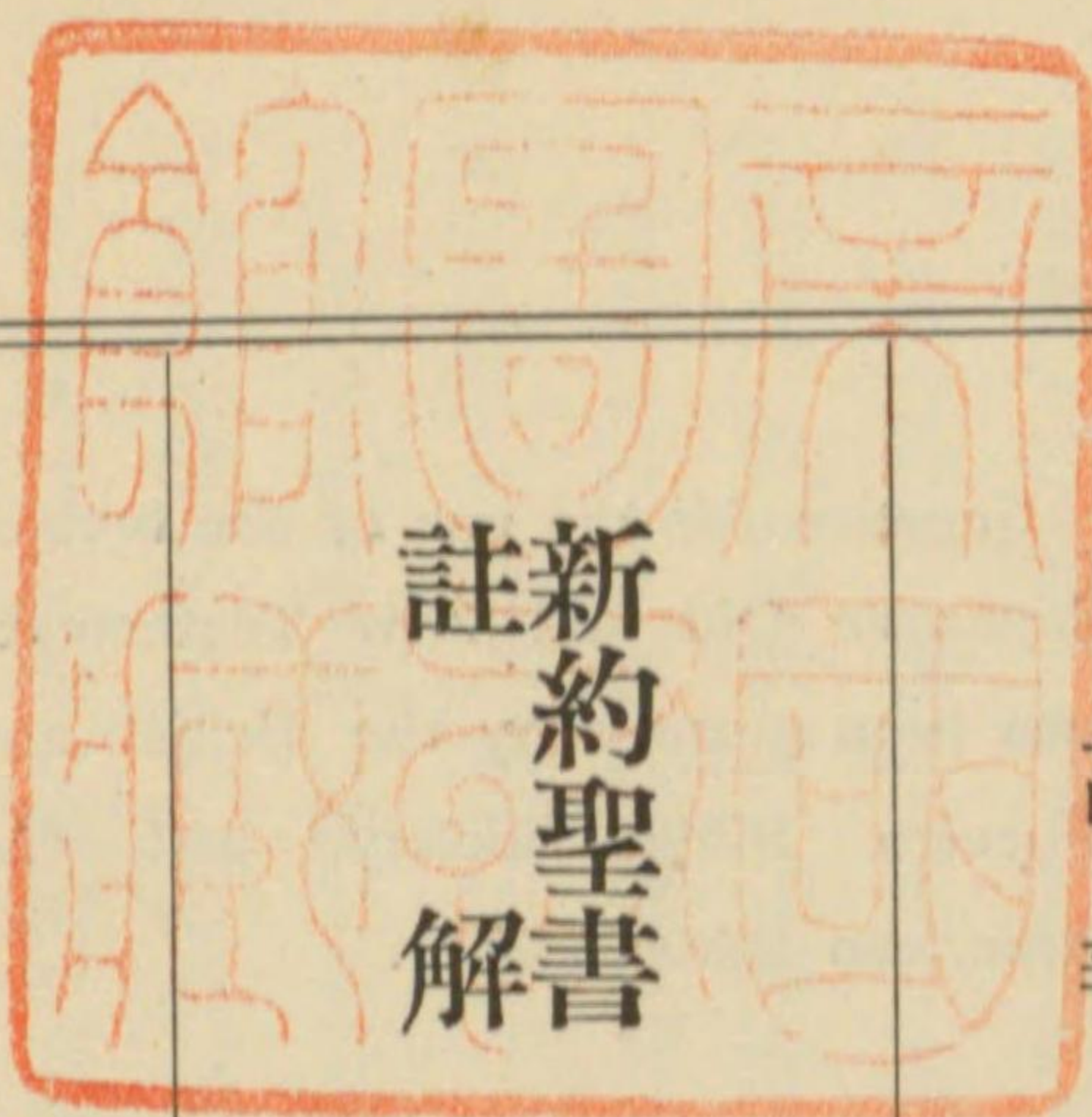


1200501518202

70
94



494



新約聖書
註解

日高善一著

コリント前後書

日曜世界社版



Sanction for the use of the text of
Japanese Old and New Testaments
has been granted by the British and
Foreign Bible Society, and the
American Bible Society.

英國及び米國兩聖書協會は本書に邦譯舊新約聖書
本文使用を承認せらる

新約聖書註解に序す

570-194

基督教の研究、體驗の上に最も大切な指導は勿論聖書である。然るに我が國プロテスタント開教以來既に六十年、各部門に於ける有力な著作、翻譯が盛んに試みらるゝに拘らず、聖書の註解書は、其一部分に關するもの、外、全卷統一したものに至つては日本人自らの手に成るものは、皆無である。我が國教會の不幸はより甚だしきはない。

講者は二十年直接傳道の間、尠からざる不便を其所に感じてゐる。故に自ら不敏を省みず、此の大業に當ることゝなつた。

本講は斯る要求に應ずる目的なるを以て、信仰を養ふ參考として、聖書の眞意を闡明するに中心の努力が注がれてゐることは言ふを俟たぬ。然しながら古來批評家に由つて論争せられたる個所、問題に就いては其の歸結の安堵すべき成績を傳ふると共に其の經過の大要をも紹介するに意を用ひた。史上既に衰滅した批評が、初心の人々には耳新しき所論として往々迷惑を醸すことの珍しからざる事實を見聞するからである。

冀くは此の不完全なる事業が、我が國基督教會の、當今焦眉の急に應ずる幾分の援けとなり、更

に學界の巨手を促して完全有力なる好著の世に現るゝ刺戟ともならば講者の祈願は既に遂げらるゝ所以である。

尙ほ講者の爲屢實義に應答せらるゝのみならず、常に懇切なる獎勵を與へられたる聖書改譯委員の一人、現青山日本基督教會牧師川添萬壽得氏、我が基督教文學のため採算を外にして本講の出版に當られたる日曜世界社主西阪保治氏に對して特に卷頭に録して深厚なる感謝の意を表す。

千九百二十七年八月下旬

京都室町丸太町の寓居に於て

日 高 善 一 識

コリント前後書 凡例

本講中『前譯』と註したのは明治初年版、日本譯新約全書の意味である。改譯に對して『舊譯』と言はないのは『舊約』と音の紛れるのを慮れてである。

註解中肉^{フチツク}太文字は講義せんとする節號及び本文である。

著者又は提說者の名前は末尾の括弧中に掲げて其の出所を明かにした。重引用の場合は引用の書目をも附加してある。括弧中『フキンド』とあるのは『ジイ・ジイ・フキンドレイ』の略、『バアン』とあるのは『バアナアド』の略である。尙ほブラムマアとブラムプタアを取違へないやうに願ひたい。

參 考 書

- 一、ゼ・センチュリイ・バイブル 兩書之部
一、ゼ・ケムブリツヂ・バイブル 同上

第三章……………(八九)

コリント人の肉の品性と黨派心—礎石と其の上の建築の責任—神の宮を傷ふ禍—争鬪者に對する警告

第四章……………(九)

主のみ其の僕の唯一の審判者—彼らの自負とパウロ及び其の伴侶の謙讓—信仰の父としての訓誨

第五章……………(一〇)

不倫な教會員の處置—罪ある會員との絶交

第六章……………(一七)

異教徒の裁判に訴ふる不法—基督者の自由と放縱

第七章……………(一七)

獨身生活と結婚生活—結婚生活の心得—處女と寡婦並に一般基督者へ

第八章……………(一八)

偶像の供物について

第九章……………(一五)

パウロ自身の實例

第十章……………(一六)

昔のイスラエルを鑑として—偶像の宴席に列なる危険—基督者の自由と其の限界

第十一章……………(一七)

婦人の問題—聖餐

第十一章……………(一九)

一つの聖靈の各種の分裂—四肢五體と教會の各員

第十三章……………(二〇)

愛の卓越性

第十四章……………(二〇)

預言の卓越性—實際上の指揮

第十五章.....(三二)

主の復活の實證—基督の復活と人間の復活—基督の復活と其の影響—基督者の自己犠牲及び忍耐と復活—復活と復活體—肉體の變化と終末の榮光

第十六章.....(三四)

事務と個人の問題及び挨拶

コリント後書講義.....

第一章.....(三五)

挨拶—パウロ自身に就いての感謝—計畫變更の辯明—訪問延期の理由

第二章.....(二六)

パウロの失望と歡喜

第三章.....(二七)

基督の肉碑—新約の福音、恩寵の契約—律法に超越する御靈の役者—モーセの面帕と耶穌の御顔

第四章.....(二七)

パウロの使命の主張—榮譽と苦難—榮光の希望

第五章.....(二八)

榮光の體の待望—基督こそ最善—パウロの公明無私の實證

第六章.....(二九)

恩寵に由る生活—慈愛の表現—不信者との混交を避けよ

第七章.....(三〇)

パウロの愛情と報告に對する歡喜

第八章.....(三一)

贖金に就いての訓誨—テトス及び無名の聖徒を推薦

第九章.....(三二)

パウロの往訪と集金の準備—義捐に對する祝福

第十章.....(三三)

臆病、卑怯との謗に對する駁撃

第十章

(三五)

パウロに對する攻撃の辯明—パウロの勞作と苦難

第十一章

(三四六)

パウロの見たる幻と其の誇—コリント教會員に對する戒飭—審問の回避

第十二章

(三五七)

建徳のための審判—最後の訓誨と挨拶

目

次(終)

次目繪挿

コリントとその附近の地圖(凸版).....	五頁
コリントに於けるアポロ神殿の廢墟(網目版).....	一七一頁
コリントの新運河(網目版).....	三二三頁

コリント前書講義

緒

論

其の著者

此の兩書翰は第十九世紀の特徴とも言ふべき新約全書の歴史的批評上に劃時代の貢献者であつたパウロがパウロの著作であると主張して後、合理的又歴史的の批評を以て之に反對するものを見ない。批評家中ブルノウ・パウエルのみが、歴史家中のグランツと偕に此の既に確定した斷案に反對した。然しパウエルは後に基督教はギリシヤ・ロマ哲學やフキロ、セネカ及びマルカス・アウレリウスに至る各皇帝に由つて築かれたものであるとして、其の所論と基督教の歴史や文學を調和することに努めた結果は聖書批評の部門に於て『最も甚だしい愚劣な專斷』の代表者と言ふ折紙を附けられたに過ぎない。彼の跡を踐んでアムステルダムのピアソンから起つたオランダ派があつて、彼らは新約全書中の凡ての他の經典に行ふ如く、此の兩書翰の基礎工事を掘り出すことに努力した。例令へばロマンは新約の耶穌基督に就いての描寫が非歴史的であつて、第二世紀の爭論の結果が此

の兩書翰に求められると言ふので、其の證據を兩書翰中から擧げて此の著書の問題を供提した。一方基督教の創立者として耶穌を固執しながらもベルンのステックは使徒行傳が聊かもこの書翰に就いて言はず、小アジアの教會がジャスチン・マアタアの時代まで全く沈黙してゐると言ふので此の兩書翰を疑ふ點でロマンに加擔してゐる。斯くの如き歴史に通じない非常識的な議論は深く注意するに足らない。今日までパウロの著作たるを否定する議論は全く失敗であつて、其の反駁は之を搖がすを得ない。第三世紀の前半の人物で、アレキサンドリヤ、カイザリヤ、アンテオケ、ロマ其の他多くの地方の事情に通じてゐたオリゲンは、コリント前書が純正なものであることを疑ふやう議論を曾て聞かないことを確證してゐる。アレキサンドリヤのクレメントは第二世紀と第三世紀の境の人物であるが、パウロの『コリント人に贈れる前の書翰』に『兄弟よ、心にて幼兒たる勿れ』と言ふ句があると名指してゐる。第二紀の前半にスミルナの監督であつたポリカアブは『汝ら知らぬか、聖徒は世を審くべき者なるをとパウロの教ふる如く』と引用してゐる。ロマのクレメントは第一世紀の末に自らコリントに書を贈り『祝福すべき使徒パウロの書翰を緝け』其のうちに『彼は彼自身とケバとアポロに就いて汝らに書を贈れり、是れ當時既に汝らは黨を組めるを以てなり』と云つてゐる。

後書に對する證據はそれほど完全ではないけれども尙ほ正確たるを失はない。アレキサンドリヤのクレメントが前叙のやうに『前の書翰』と言つてゐるのは後の書翰が存在した事を示してゐる。イレニウス（第二世紀に東ではスミルナ、西ではリオンに居たことのある）も亦『前書』と名指してゐるのは後書を知つてゐた證據で又（『異端を駁す』と言ふ彼の著作のラテン譯中に）彼は實際『コリント人に贈る後書』中にパウロが言ふ通り『此の世の神』又『基督の香しき馨』と其の句を引用してゐる。本書翰は其の内的證據即ち前書との明白な關係、其の特質等に由つて論斷が出来るのである。其の文體に漲る斯くの如き鋭利な譴責は僞作者の到底描き得ざる所で、教會の内情をこれほど暴露したものを其の名乗る通りの著者が手づから書いたものとしての尊敬がなかつたならば、誰がこれを保存するものがあらう。此の推論は後書ほどの力はなくとも尙ほ前書にも適用せられる。最後に若し苟もパウロ自身に就いて又其の書風に就いて聊かでも知識を有する者は兩書翰がパウロを表現するもので、其の文體は其の人格を暴露してゐる。『其の熱烈な人格、燃えるやうな感情、歡喜、愛情、仁慈、過激の憤怒、自己證明、神の奧義に就いての根本的知識』は悉く（殊に後書に於て）使徒行傳やガラテヤ書が示してゐる人物を思ひ起さしめる。『挿話や脇へ外れる事や、數限りなき比喩の引用や』柔和から急に皮肉へのぶつきら棒な轉向や、愛情から激烈な譴責に移り

マケドニヤ、アカヤに區切つたうちの南方)であつて、總督の駐劄地であつたけれどもギリシヤ人占住の都市ではなかつた。然しギリシヤの雰圍氣、ギリシヤの傳統、ギリシヤの特色が潜在の勢力を有した。地峽の競技は復興し、美術は開拓せられ、往年の知識は愛好せられ、各派の哲學、修辭學は隆盛であつた。従つて紀元第二世紀にパブリウス、アエリウス、アリストアイデスは、コリントの街頭何所にも『賢人』に出逢ふと記録してゐる。ギリシヤ天才の模倣と共にギリシヤの浮薄な風、神秘に對する好奇心、言語上の論争、修辭學派甲乙の徒黨等要するにギリシヤ廢頽時代に亂調子となつたギリシヤ民主主義精神からの不徳は悉く侵入して來た。營にそれに止まらなかつた。苟もギリシヤ人の放蕩無賴又極端に走らうとした傾向は其の數倍の勢でコリント人に現れた。ローマ人特有の劍闘競技と共に羅馬の暴飲暴食が輸入せられ、東方からは宗教と相結んだ淫猥な氣風がオロンテスの急流に沿つて(羅馬の諷刺家が口を極めて罵倒する)注入せられた。ギリシヤのアプロダイトの禮拜はホネシヤのアスタト(『シドン人のアシタロテ』列王紀下二十三の十三)の禮拜よりも一層放逸で墮落した形を取つた。而して數千人の高級賣春婦と共に其の司祭たちは此の都と其の道德とに感化を與へ、遂に『コリントシアゼスサイ』(コリント人のやうな生活をする)と言ふ語が羅馬にも『コリントヤス・ヴキヴエア』(同意義)として輸入せられて再び新に起るに至つた。斯くし

てアリストフアネスが賣淫窟と同意義に用ひたコリンシアゼサイと、プラトウの中では春賣婦と言ふ意味に用ひられるコリンシア・コリイなる語とが事實の裏書に由つて更に昔の内容を宿すことゝなつた。コリントの地理的位置は其の腫物であり、禍であつた。

解放奴隸二十萬、奴隸四十萬（若し其の數に誇張がなければ）此の各國民の聚團へ、パウロは（紀元五十年の秋らしいが）『ロマ帝國の端まで』との其の素志を追ひ、世界の市民と言ふロマ人の思想から、基督教帝國主義者としてロマ世界の宗教を基督教たらしめんとして訪れて來た。彼はアテネに於て彼らの新奇を追ふ浮薄に對して眞摯な心を注入しやうと努力して失敗しながらも尙ほ其の市民の宗教的傾向の横溢し又偶像の夥しいことに驚いたが、コリントに於て感じたものはロマへの書翰の第一章の終りに『異教主義の道德的過程と、爲すまじき事を邪曲なる心のまゝにするに任せ給ふた』と書いてゐる事實に認めることが出来るであらう。

教會の創立。使徒行傳十八の一—十八に描かれたコリント教會創立の記事は、甚だ貧弱なものに過ぎず、パウロが當面した問題に少しも觸れてはゐない。一ヶ年半の定任中の出來事として次の物語が傳へられるに過ぎない。即ち（一）ロマ領ポントに生れたユダヤ人にして彼と等しく天幕の製造業者であつたアクラと其の妻プリスキラ（前書十六の十九にはプリスカ）に『遇ふ』て彼らの同勞

者となり、其の家に宿泊した。彼は其の始めロマに移住したがクロオデオの凡てのユダヤ人を放逐する命令に従つて近く此の市に來たのであつた。此の原因は『クレスタス』と稱するものゝ行動から起つた騷擾で、それはユダヤ人と基督者との間の葛藤（ユダヤ人と基督者とは一般の人々にも官憲にもまだ區別が認められてゐなかつた）で、其の記事には『クレスタス』と往々誤記されてゐる。クレルタス（即ち『善』の意味）はまだ其の頃親しまれなかつたクリスタスの訛つたもので、尙ほ其のとき生きてゐる人物で指導者の名だと考へられてゐた。ロマには尙ほ夥しいユダヤ人が住居してゐたのであつて（デキオン・カシウスに由れば）クロオデオの此の勅令はアクラ、プリスキラのやうな二三の連中が服従したのみで其の効はなかつた。（二）パウロは安息日毎に會堂に於てユダヤ人及びギリシヤ人（改宗者）と討論したとある。マケドニヤからシラスやテモテが訪れて來たのに力を得たパウロは其の説教に更に二倍の精力を注いだ。『パウロ専ら御言を宣ぶることに力め、耶穌の基督たることをユダヤ人に證せり』と。（三）彼らユダヤ人が挑戦的で暴言罵詈を逞しうするに會つて『パウロは衣を拂ひ』其の責任を負ふ能はざることを宣言し、彼らを去つて、會堂の近隣なるテテオ・ユストと言ふロマ市民か或はラテンの殖民と思はれる改宗者の家に移つた。此の家主を通じて彼はユダヤ移民ならざる市の上流階級に迎へられた。彼の異邦人への移轉と會堂へ

の接近とがユダヤ人の反感を醸し、更に會堂の司及び其の家族又多數のコリント市民の回心とで、油は愈焔に注がれた。(四)彼の安全を保證し、其の勞苦に夥しい收穫が與へられるとの幻を或夜授けられたのに感激した彼は十八ヶ月間此所に定住するに至つた。(五)最後に總督の法廷に於てパウロに對して深い暗示を與へた劇的場面がある。ユダヤ人は今や狂氣に驅られ、帝國政府が彼らの律法に従つて彼らの神を禮拜する事を承認するを根據として彼を陥れやうと試みた。『此の人は律法に適はぬ仕方にて神を拜むことを人に勸む』即ち『彼はロマ法律に由つて保護せられたユダヤ教の方針を破壊する教義を唱へ、メシヤとして耶穌を宣傳し、又ユダヤ人にも異邦人にも同様に之を説く』との訴を起した。然し恐らく其の兄弟セネカの宗教に寛大な意見に賛同してゐる總督ガリオは、直覺的にロマ法律が宗教的迫害に利用せられてゐることを嫌惡して、其の對決審問に由り訴訟の實相を原告から暴露せしめ、唯だ言語や名目の事に關し、行爲や事實の問題として、若くは公法の認定する不法行爲乃至犯罪に非ず『汝らの律法』上の事で、ロマ法律は干與せず、彼の實施する訴訟の審問外だと宣告し、ロマがコリントのユダヤ人團體に與へてゐる自治權に由つて自ら處分せよと彼らを手荒く放逐した。其の自治權なるものは確實に知るを得ないが、然しユダヤ人團體が有してゐた自己の民族に對する所罰權なるものは(會堂からの除名以上に)嚴刑を公然課し得る程

度のものとは受取れない。また此の際の輿論に就いては『人々皆』會堂司クリスボの後繼者たる『會堂司ソステネを捕へ』、『審判の座の前にて打ち扑』き、一方ガリオは其の民衆の爲すがまゝに任ねて、暴行を冷然と見てゐたとある文に多くの暗示を見る。

パウロの爾後の行動を此の事件が實質上組織する機縁となつたことは言ふまでもない。總督の果斷な信仰自由の態度はパウロに取つては帝國政策の指針と受取られたに相違はない。而して帝國の社會の大動脈に基督教を傳へ、それを帝國權勢の中心に附植せんと欲する彼の思志を透徹せしめる援となつた。彼は帝都を想望するのに既にアクラ、ブリスキラの助言を要しないこと、なつたけれども尚ほ彼ら職工として又傳道者として共に勞作する間の會話に由つて、其の彼を待つ問題の解決に指針を得ると同時に『ロマを見ざる可らず』との決心を堅めるに至つたことを疑ふ餘地はあまりない。

使徒行傳が傳へてゐる程度を見ても興味がある所から、コリントへパウロが『入りしさま』(テサロニケ前書一の九)の如何と其の困難を充分に知りたい望に驅られる。而して其の主要點として輕佻にして放縱な社會から脱出して集つた教會の生活を示す兩書翰は『教會史上稀に見る斷片資料』から出來てゐる。然り斷片であるが同時にギリシヤ・ロマ文化を以て粉飾した異教徒世界の道德的

状態の明白な瞥見を供給するのである。

先づ第一に兩書翰は使徒行傳の記事を保證する。兩書翰はコリントに於ける第一回の傳道中の同勞者としてテモテとシラス（後書一の十九、兩書翰ではシルワノ）、コリント教會の古い會員として又彼らがコリントにゐるとき同様エペソでの家主（前書十六の十九）アクラとブリスキラ（或はプリスカ）、パウロに由つて同心した使徒行傳中の會堂司クリスポ（十八の八）も彼が授洗した兩三名中の一名（前書一の十四）であることも書翰に由つて明白である。のみならず其の挨拶に加へられてゐるソステネはギリシヤ人に毆られた會堂の司で、今は基督者になつたものと思はれる。兩書翰はアポロの巡回して行つたこと、其の努力の價值とをも保證してゐる（前書三の六）。

同程度に使徒行傳の著者が兩書翰を讀んでゐるものと察せられる著しい一致と確證とがある外、コリント傳道當初に於ける新たな資料を與へられる。即ち彼はコリントに於ては自ら『弱く、且つ懼れ、甚く戦いて』（前書二の三）ゐたと言ふが、それは其の機會を捉へる程度となるのに戦く不安と、斯くの如き社會の中心に立つ彼の事業の極端に敏感を要すること、其の困難を想到してゐたものに相違はない。彼は市民の頑迷にして空論に夢中となり、廻りくどい饒舌の癖を發見し、外形にのみ注目して實相が發見せられずに終る虞あることを忌み、アテネに於ける經驗から哲學者との半

端な論争に失望し、それを無益と考へ、恐らくギリシヤ人と會談するに當つてはコリントの修辭學者や哲學者との競争を避けて、一外訪者として應對することが最も賢い方法と考へたやうである。彼が前書の第十五章に細説する所や前書二の二に『耶穌基督及びその十字架に釘けられ給ひし事の外は何をも知るまじ』と決心したと言ふ（後書一の九にも）點から推論して以上のやうに判斷するのが當然と信ぜられる。其の聽衆は肉慾の専門家で、頭腦も靈性も隠匿せられた乳兒の如く、所謂『サルキノイ』（肉に屬するもの）どもで、止むなく彼は堅き食物を控へて乳を與へた。即ち深奥な福音の秘義を授けても其の本質を取り逃がすに過ぎなかつた。『智慧』（前書二の六）は成人のため之を保存するより外はなかつた。彼は『御靈と力の指示』即ち神の精力に由つて眞理を深く打ちこむために自己の精神を糞土の如く蹂躪して御靈に依頼んで其の傳道に當つた。彼の當初の説教の内容はコリント教會が『知つてゐる』通りであると彼の言ふ點から蒐集される。例令へば内住の御靈（前書三の十六）、神殿としての肉體（前書六の十五、十九）、聖徒に授けらるべき審判の權威（前書六の二）、神の國の世嗣として免れ得ざる道徳（前書六の九）、偶像の絶對に世に存在しない事（前書八の四）等に見られる。

教會を組織した人たち。斯くの如き傳道法に由つてパウロはコリント教會の『父』（前書四の十五）

となり、又主として異邦人（前書十二の二）から成り少數のユダヤ人も含んでゐた（前書七の十八）と思はれるアカヤ諸教會（後書一の一）の父ともなつた。教會の會員は大多數は社會的地位のない人々で、若し加はつてゐたとすれば唯だ僅かの哲學者や政府の官吏や貴族（前書一の二十六―二十八）があつた。

必ずとは言へないが奴隸も多少あり、他も最下層階級のもので『其の解放賠償金を稼ぎ』得た敏腕にして精力漲り、金儲けの上手な商人たる解放奴隸（ラムゼイ）の如き連中であつた。又或る者は何れの方面に不行跡の人々であつた（前書六の十一）。勿論彼らは悉くが貧しいものではなく、中には『饑ゑた』ものもあつたが、又一方に『酔ひ飽ける者』（前書十一の二十一）があつた。パウロはエルサレムの貧しき聖徒を扶助する集金を希望しそれを實行するためには旅行をも喜んでなし、後書の第八章にはコリントの夥しい集金とマケドニアの収入の乏しいのとを對照してゐる（後書八の十四、九の六）。尙ほ又『コリントの基督者が（靈的に）富んで、敏活で勢力があると皮肉な調子で讃嘆してゐるのが（前書第四章）若し貧しく事を缺く卑賤な人々のみの集會に宛てたものとすれば何等の効もなくなるのである』（ラムゼイ）。

コリント教會の集會場。コリント教會が當時の宗教團體の如き共同の禮拜所を有してゐるか或は個

人の家に集合したかは確實ではない。教會はアクラ、ブリスキラの家から起つたことは疑ひなく兩人はエペソに於ては『其の家に教會を』置いた（前書十六の十九）。恐らくステパナの家に教會が置かれたもので（前書十六の十五）あつたらう。然し第十一章（十八、二十、二十二節）に由れば當時の宗教團體同様『共に』會食すべき共同集會所もあつた。

教會組織。兩書翰全體を通じて、其の教會に權威者があつた形跡は聊かもない。若し何らかの權威者があつたとすれば、集會にパウロが記録してゐるやうな不秩序（前書十四の二十六―三十）が現れて來つたことが解せられなくなる。勿論神から擧げられた職務（前書十二の二十八）のうち『治むる者』と言ふのがあるけれども此れは『補助をなす者』と並ぶべきもの（コリント教會に當りては）で教會の集會の席上で或る有力にして奉仕の出来るものが其の整理や事務に當つたと言ふ以上の意味はない。兎も角、牧師、監督、執事、長老等のなかつたこと（前書十二の二十八の表中に）はコリント教會の政治が當時純然たる民主主義であつたことを物語つてゐる。色々な議論は行はれるがパウロは基督教會の本質的觀念に決定を與へるやうな事實を此所では示してゐないのである。

(所謂)コリント前書著作の當時

此の書翰は教會創立後、間もなく少くも其の一部に勃發した事件のために贈られた。出来るだけ此れを明かにした所で、其の事件とはどんな種類のものであつたらうか。

アポロと其の説教。先づ第一にパウロが此所を去るや否やアポロはエペソの兄弟たちの推薦状を持つて同市から訪れて來た(使徒行傳十八の二十四以下)。ベザン寫本は確實と思はれる追加を與へてゐる。即ち『エペソに滞在したるコリント人たち、彼の教を聽き、彼らの國へ共に渡らんことを彼に勧めたり』とある。使徒行傳は彼に特別の魅力があつたことを傳へてゐる。彼はアレキサンドリアの産れ(ユダヤ人)で博學(或は雄辯)で、聖書に『通達した』人物であつた。其の聖書に通達したと言ふのはアレキサンドリヤ派によつて引喩や型を聖書に適用し、聖書からメシヤ的意味を摘出して、ヘブル思想とアレキサンドリヤ派哲學の關係を明かにすることが出來た意味に相違ない。彼は主(耶穌)の道に就いて教へられる所あり、其の精神熱烈で(自己の知れる限りに於て)ヨハネのバプテスマを知るに過ぎなかつたが尙ほ耶穌に關して正鵠を得て語り又教へた。此れは尙ほヨハネの弟子であつた或る人物が、アレキサンドリヤか或は他の地に於て耶穌の品性に就いて彼に傳

へ、熱情の溢るゝまゝに彼は、ヨハネの教義の範圍で、尙ほ耶穌の地上の生活に就いての問題では使徒の教義よりも不完全ではあつたが、正確に説いてゐた。彼の立場は確的に言へないけれども、次の章(使徒行傳第十九章)に『聖靈のあることすら聞か』なかつた弟子たちの立場と殆ど同様であつたらう。彼らもアポロも共に彼の主がそれに就いて教へられたが(マタイ三の十一)故に聖靈の特別の降臨のあることは知つてゐたであらう。アポロは預言者の精神を宿し、來るべき者を待てと其の弟子に教へたヨハネの事業を繼續してゐた。福音書殊に第四福音に由ればバプテスマのヨハネは耶穌を『來るべき者』であると認めてゐたが遂に彼すら疑惑を抱くときが來た(マタイ第十一章)。且つ彼の弟子が一團となつて耶穌に従つたとの證據はない。アレキサンドリヤ及びエペソにゐるのも其の類と思はれるが、ヨハネの弟子の或る者は耶穌がメシヤであるとの思想に達せず、遠方にあつた爲か、其の消息に通じなかつた爲か或は其の他の理由で、耶穌を以て神の國は近し(ヨハネ一の二十一、七の四十、四十一)との中心的預言の徴と認めるに止り、尙ほ之を待つ状態にあつて、懸命に、更に堂々たる『他に』降臨すべき者を待望した(マタイ十一の三)。従つて彼らは聖靈が授けられるとの預言が既に遂げられたかどうかを知らなかつた。

プリスキラとアクラ(六回中四回までは名が此の順序となつて記される)はアポロの熱情に動か

され、其の努力の功を認め、『之を迎へ入れ』、『尙ほも詳細に』耶穌の絶對的メシヤ權に(まだ他に何事があつたとしても)加へて神の道を解き明した。此れがアポロの説教に新たな中心となつた。恰かも彼がエペソを去つてコリントに移つた後にエペソでパウロが発見した弟子の不完全な教に新たな中心を印象せしめた通りであつた(使徒行傳十九の四)。使徒行傳もパウロも共に證明するやうに果してアポロは即時に有力な傳道者たる實を現した。パウロの植ゑたものに彼は水を灑いだ(前書三の六)。使徒行傳の著者は『既に恩恵(彼に與へられた)によりて信じたる者に多くの益を與ふ、即ち聖書に基き耶穌の基督たることを示して激甚く且つ公然にユダヤ人を言ひ伏せたり』と云つてゐる。ユダヤ人に對する彼の手法の權威のあつたことは知るに難くない。同時にヘレニツクの頭腦殊に昔から確定してゐる引喩的哲學を『ギリシヤ人の聖書』たるホオマアに適用する事に慣れてゐるやうな頭腦に對しても彼は魅力を失はなかつたであらう。従つてコリントの基督者中にパウロをパウロにすら勝つてゐると思ふものゝ生じたのは怪しむに足らない。

黨派。(一)パウロ黨とアポロ黨。其の秩序に次いで注意すべきは教會に於ける黨派である。此の事實はギリシヤの雰圍氣内にあつては珍しい現象ではなかつた。ギリシヤの都市には各人氣を集めた辯論家があつて最負客の一團を有してゐた。コリント教會に於ても亦アポロ黨と自ら名乗る彼

に附隨する一團があつた。其の結果、教會の創立者で其の父たるパウロに感謝と忠順との念を有し、彼を至高權威と心得た人々は、或は少くも其の幾部分はアポロが何かに附けて自分を引き事にするのを悲しんで、パウロの弟子との矜を持つに至つた。此れは其の實際の教義上に於ける意見の相違の爲に黨派が出来たと言ふよりも、其の説教の方法、所作が自分の氣に入つたと言ふので相別れたものと思はれる。民主主義の特徴の一つは必ずしも活氣があり、健全だと言ふ譯ではなく、病的で熱に浮され、原則よりも人間を重んずる弊を生ずるにある。此の傾向の特別に明白なものはパウロとアポロの兩黨派である。今日遺された證據に由れば彼らの間には原則上に何らの區別も認められない。アポロはブリスキラとアクラ(マツシイはパウロに由る回心者と言ふ。講者は思想上パウロの弟子とも認むべきも、回心はもつと前だと信ずる)に由つてパウロの基督教に捕へられた。従つて彼とパウロの教理が衝突したものは考へられない。パウロ自身『我は種ゑ、アポロは水灌けり』前書一の三以下又二十二)と言つたのは斯くの如き區別に少しも心を留めなかつたことを示し、又彼がアポロにコリントに行くやうに勧めた(前書十六の十二)點でも明かである。尙ほパウロが前書に於て罪として排斥する所は教義の區別ではなく、單なる徒黨と論争で、彼は自己の名の黨派とアポロの黨派とを其の調査上の代表的目的とし、其の推論の根據としてゐる(前書三の四)

九、四の六)。彼は自己と教義の上で異つたものとは疑さへも持たなかつた兩派を攻撃したとすればそれが明かに黨派心のないだけ一層安全に強く其の黨派心を攻撃し得ると考へた。此の方面に進んで彼は自己及び自己の教義を侮蔑することは黨派心であると認める言ひ掛りを防ぐことが出来た。其の兩派が教義的に區別がなかつたのは更に深く研究すれば愈明かとなる。全體に亘つてのパウロの目的は凡ての教師が基督と教會の僕であると言ふことを示すにある。『アポロは何者ぞ、パウロは何者ぞ……汝らをして信ぜしめたる役者に過ぎざるなり』(前書三の五)と言ひ又『さらば誰も人を誇とすな。萬の物は汝らの物なればなり、或はパウロ、或はアポロ、或はケバ……皆汝らの有なり』(前書三の二十一、二十二)と。次に『我は基督に』(前書一の十二)もケバ、アポロ、パウロにと言ふのと教理上に相違のあつたものとは思はれない。後年のユダヤ教的傾向がケバと基督の黨派に關係があつたやうな節は本書翰の中には聊かも認めることが出来ない。本書には斯くの如きユダヤ教的傾向に對する論争は少しも含まれず、又ユダヤ教的傾向があつたとしてもその意義は輕い不完全なもので數も僅かに限られてゐた。

然し若しそれが同様の福音であつたものならばパウロは何故に此の『黨派』に就いて四章に亘つて論じてゐるのかとの問題が生じやう。それは一部は人間を尊重することは争闘と自惚とを産み、實質から陰影へ迷ひ出る無益にして有害な所業と考へたからである。又一部はそれが始めは各個人の主として趣味の問題ではあるが其の相違が互の間の溝を廣めることを憂ひたからである。パウロが其の教會の創立者である故に最高の權威者と考へられるのでなく、單に一黨の棟梁とせられた事實は既に彼の敵に彼の使徒としての地位を揺がすに足るものとして逆に利用せられてゐたものであらう。第九章の主要の趣旨は勿論『弱き者』のために『強き者』が其の自由を犠牲にする一例として自己の使徒たる權利を犠牲するにあるけれども、附隨的に使徒としての彼の主張に反對せんとする潜行的叛逆をも暴露した、『我他の人には使徒ならずとも汝らには使徒なり』(前書九の二)と。『兩黨派』が教理に於ける相違はないとの推論は第三及び第四の黨派に就いての概念にも影響を及ぼして來る。

(二)ケバ黨。此の黨の性質如何。第一にそれはペテロの直接の弟子で、恰かもパウロ黨、アポロ黨が各其の始めの個人的關係から起つたのと同様に生じたものであつたらう。此れを根據にペテロがコリントに赴いたとの説を爲す人々がある。勿論それはあり得ない事ではない。然し兩書翰中他に斯くの如き痕跡は認められず、ユウセビウスの教會史に引用されてゐるコリントのダイオニシウス(紀元百七十年頃)までは何處にもそんな記事は見えない。其の教會史の二十五に更にペ

テロを以て教會の共同創立者であるとの疑はしい叙述があるが、斯くの如き場合に於てパウロが其の事業にペテロの勞力を認めない(後書一の十九、パウロ、シルワノ、テモテとあるを参照)等は斷じてないからである。必ずやペテロの同心者が弟子が職業上からコリントに來たか、或はコリント教會員中の恐らくユダヤ人基督者がエルサレムか何處かでペテロに會つて其の寛宏な性質に強い愛着を覚え、又彼の教訓と實行とに深い感激を受けたものであらう。此の黨派はそれほど多數であつたと思へない。主要の黨派はパウロ黨とアポロ黨とであつた。此の人々がペテロに愛着した原因は矯激なユダヤ主義であつた筈はない。それは第一にコルネリオやエルサレム會議に又アンテオケに於てすら見えるペテロの態度はさうでなかつたからで、尤もアンテオケで『ヤコブから來た』人々に遠慮して其の決斷を誤つたがそれは一時的のことで臆病のためであつた(ガラテヤ二の十二)。第二に本書翰中にはペテロとパウロの意見や目的に相違點があつたものとの形跡は聊かも認められない。それを根據にしてバイシユラハは次のやうな重要な説を立て、ゐる。曰く『コリントにケパ黨の存在したことはパウロに對するユダヤ教的基督者の反對とは特に相違してゐる』後書中にあるものに對して『且つパウロが自己に對する實質的な反對ではないと明かに考へてゐる點が明白に初代使徒たちはパウロに對して敵意を有しなかつたことを示してゐる』と。然しペテロを仰いだ此ら

の人々は、其の實踐上にも傾向にも幾分ユダヤ教的基督者に心を寄せたものに相違なく、それは割禮の有無に拘らずユダヤ會堂に屬した改宗者やユダヤ人に取つてはそれは寧ろ當然であつた。而して同時に又偏狭な異邦人で割禮を受けるかどうか、或は市場に出る前に偶像に獻けたらしい肉を食ふことを遠慮すべきかどうか(前書八の七、十一十三)を疑つてゐる種類の人々も加つてゐたであらう。此れがユダヤ教的傾向として明白に認められるべき最も甚だしい部類であつた。然し全體から見てペテロの魅力は其の勢力範圍に近い人々が熱情的に誇張した好意を彼に寄せるに至つたものと認めて大過はないであらう。

(三) 基督黨。此れを合理的に解するためには彼らの兎も角其の中心となつてゐたものは耶穌直屬の弟子であつたことは推定しなければならぬ。故に先づ『我は基督に屬す』との叫は前三黨派に對するパウロ自己の標語であつたとするクリソストムの説は此れを暫く他に措かねばならない。此の説は前書三の二十二以下に『或はパウロ、或はアポロ、或はケパ』と言つてゐるが『或は基督』と言はないで、凡ての基督者は基督の有もと言つてゐる點から起つた想像と思はれる。然しパウロが『萬の物』の同地位に基督を並べることが如何に本能的に慎んだかは容易に知られるのであつて、『汝らは基督の有』と言ふ雰圍氣は『我は基督に』と言ふ雰圍氣と全く異つてゐる。前書一の十二

に『我は基督に』と言ふのは其の前の三つの黨派と同等の意味である。又基督の黨とはパウロが加擔してゐる中心的黨派であるとの説をも覆し得る。其の黨派は諸教師の教師に屬すとして凡ての教師たちの指導者を以て任じ、基督に屬する者に對する取扱の不公平を訴へ、特殊な獨特な基督の黨派であると主張したものと思はれる。此の説に對しては其の根拠となるべき史料もなく書翰にも形跡がない。故に先づ第一の議論に返つて此の黨派は其の根拠となつたものが直屬の弟子であつて、中心は基督と直接の關係があつた意味で基督から起つたと主張したらしい。パウロは此の黨派の性質を研究するのに史的の方面から手を下した最初の人物で、彼は前書一の十二と後書十の七との『我は基督の有』と言ふ誇と、『自ら基督に屬する者と信じ』た誇とを綜合して論斷してゐる。後書にパウロはコリントのユダヤ教的反對者を嚴しく戒飭してゐるが之が基督の黨であつた。前書のうちにでも教會の中に或る方面ではパウロに敵意を有するもの、あることを知つてゐた形跡が認められるが、此の反對もそれほど著しく注意する必要のない程度のものであつたらしいのが、後書では教會の形勢は全く一變してゐる。前書では唯だ其の名を擧げる(前書一の十二)程度であつたもの、或は唯だ一二回附録(前書四の一―五、十八、九の二、十二、十四の三十八)のやうに引用してゐるだけの黨派が今は有力となつた。宣教師は恐らく基督直屬の弟子であらう推薦狀を携

へてエルサレムから來たものであらう(後書三の一、二)。此れは必ずパウロに對する逆宣傳のため組織せられた極端派に相違なく、其の推薦狀を無邪氣に書いたエルサレム教會も此の宣教師が此れほど極端な説に熱中してゐるものとは思ひ設けなかつたに相違ない。此の宣傳は決して考へられないことではない。蓋しガラテヤ書や使徒行傳に由つて明かであるやうに、熱狂的傾向がエルサレム教會内に存在し、時々使徒たちに對してさへも反抗した徒黨が内部に於て又海外に於てさへ勃發したからである(使徒行傳十五の五、二十四、ガラテヤ書二の四―九)。其の熱情が愈増したことも察すべきである。エルサレムの宣教師らは其の始めはパウロに對して深切忠實な友情を以て來たのであつたが、コリント人の間に瀰漫した不潔行爲が教會の中にも尙ほ散見するに衝動を受け、遂に恩寵の福音に對して非難を向け、其の不倫はユダヤ律法の遵奉を無視する結果であると認められたものと想像することは出来ないであらうか。基督自ら律法を遵奉せられ、又律法を棄つる爲に非ず之を完うせんがために來たと仰せられた。律法は彼らの主が遵奉せられ、主と等しく彼らは律法の責任を完うすべき『義の役者ら』(後書十一の十五)であると。基督の教訓と其の實例に悖る凡ての教師は無用である! 故に既に其の地に存在した基督の黨の援助に由つて、又恐らくケバ黨の全體はさうでなかつたとしても其の偏狹なものをも合せて、今や彼らは其の間隙のさほど遠くないバ

ウロ及びアボロの兩黨に對して聯合ユダヤ教的黨派を組織したと思はれる。兎も角後書に於てはパウロ黨とユダヤ教的反對者との兩派を認めるに過ぎない。而して後書の七、十一の二十二、二十三に由つて彼らは自ら基督黨と稱したものと結論が出来る。此の偶然起つた宣教師の指導者たちは(『人來りて』後書十一の四)ヘブル人(後書十一の二十二)基督に屬する者(後書十の七)、基督の使徒(後書十一の十三)、基督の役者(同二十三)、義の役者(同十五)と主張した。然しパウロは彼らを以て異なる耶穌を傳へ、異なる聖靈を説き、異なる福音を教ふる(後書十一の四)ものとしてガラテヤ人へ(ガラテヤ一の六一―一一)彈劾したと同様な偽教師と等しいと斷言し、ガラテヤ書では推論上『天よりの天使にもせよ』呪ふべしと言つたものを此所では己を光の御使に扮したサタンの使であると言つた(後書十一の十四)。パウロは彼らを偽使徒(後書十一の十三)と銘打つて、諷刺的に『過度の使徒』、『非凡の使徒』との特徴を與へた。即ち其の内容からガラテヤ書の『柱たる使徒』たる當初の使徒にも出来ないものであると言ふ意義の句で、ヘルゲンフェルドやホルステンすら此れに同意して、それは原始使徒には適用し得ない句だとする。斯う認めても差支へのない點はパウロを『大使徒』と比較して『言に拙く無學』(後書十一の六)と攻撃し得なかつた事、コリント教會が金錢を奪取されたのは十二使徒によつてではなく、斯くの如き俄造りの教師であつたの

に徴してある。

斯くの如き『黨派』を先づ第一に取扱つた。此れは『クロエの家の者』から聞いた所であつたと思はれる。此の人々はコリント人かエペソ人か、クロエ自身が基督者であつたかどうか詳かではない。然しパウロがコリント教會の代表者が饒舌つたとの疑を防ぐ要領に、其の報告の源を明かにしたのならば(前書十六の十七)クロエはエペソに近い所か或は何れにしても小アジアに其の家を有つてゐて其のうちの者がコリントに往つて歸つて來たものと明かに想像される。然し此の報告を受ける前、既にパウロと教會の舊交を温め、又パウロが承認した(前書十六の十八)道德上の責任者(基督に奉仕するに至當な)に服従しない人々(前書十六の十六)に其の權威を行使せんことを訴へて、代表者としてステパナ、ボルトナト、アカイコの三名が訪れて來てゐる(前書十六の十七)。此の三名も質問の書狀を持參した(前書七の一)。其の書狀に對するパウロの回答は(『クロエの家の者』が同様な問題を聞いてゐたに相違ないが)教會内に黨派争ひ以外に尙ほ誤のあつたことを示してゐる。教會が提出した特別な問題には第七章『汝らが我に書き送りし事に就きては』から其の指圖であると思はれる。第六章の終まではクロエの家の者が物語つた報告に就いて論じてゐるのに相違はない。

教會の一般状態。前書は當時に於ける教會の事情を可成正確に略叙してゐる。それは決して弱點のみの暴露ではない。多くの推賞すべきものがあつてパウロはそれを慣用の手段で賞讃激勵してゐる。彼は彼らの宗教生活が著しく進歩したこと、其の恩恵を裕かに被り、天賦を受けたことを神に感謝してゐる(前書一の四―六)。知識の外彼らは言に富み(同五)、廣く言へば彼らは其の最も賤しい人たちでも尙ほ彼らが禮拜に集つたとき、聖歌や教や黙示や預言や異言や、それを釋く能力に由つて徳を建て教育を興ふる談話が出来た。而して斯くの如き賜物は往々即席に實行された(前書十四の三十)。彼らの間にはステバナの家の者のやうに義勇的に聖徒に事へたものがあつた(前書十六の十五)。又パウロが傳へて置いた教を守つて彼の讃嘆を博したのもある(前書十一の二)。家族の間には熱心にして不斷の祈禱が行はれ、それが爲に夫婦の關係すら、祈に専心するために絶されたのもあつた(前書七の五)。而して更に生活を高めんとする慾望から男女が結婚を見合せに至つた(前書七の二五、九、二十八、三十六、三十九)。聖潔についての見解から偶像に献けた肉を食ふのに要慎した(前書第八章)。一方には其の結果如何も考へず、高い見識を無暗に高稱して偶像の宴樂に與る者もあつた(前書八の九以下)。又教會の中には、異言は最も目立つものであつたから、禮拜に於て價值は少いに拘らずそれが羨望せられ、預言以上に貴ばれた。當時の人々の考

では不躑とせれてゐるに拘らず婦人が禮拜のとき表面に現れて活動した(前書十一の三一―十六、十四の三十四以下)。徳を建つべき集會は混亂して騒動をさへ醸した(恐らくパウロが前書十四の二十三に言つてゐる所から見、又同四十の挿入に由つて斯う判断しても差支はないであらうが)。人間の智慧や靈的問題(前書三の十八、十九)に就いてそれが世界に吹聴せられることが極度に重んぜられ、知識や靈的能力を恃んで自惚れる精神、争鬭の傾向(前書十一の十六)既に引用した黨派根性等も見えた。恐らく此れは異教辨證論の感化でコリントではそれを疑ふこととなつた肉體の復活を論ずるに至つて(前書第十五章)其の論争の嗜好からもそれが起つたであらう。教會員は其の財産の問題では絶えず互に國家の裁判(前書第六章)に訴へて、ユダヤ會堂に及ばざるのみならず、異邦の宗教團體にも見ない不體裁を演じた。聖餐禮典は異教徒のクラブのよき交りではなく、その不節制に眞似て潰され、富裕な會員は『愛餐』を我儘な亂飲の機會に用ひ、貧しきものは側にあつて饑ゑながら其の貧困を耻ぢる(前書十一の十七―三十四)有様であつた。異教徒の間にさへ見ない近親相姦の不徳(前書五の一)を教會は傍觀して咎めなかつたのみならず、一面では基督者の知識と自由の例證として誇りさへもした。更に放蕩(前書六の十二―二十)、泥酔(前書十一の二十一、六の十)、詐欺(前書六の八)が行はれ、何れにしても前書六の六、十に並べてゐる罪惡が行

はれたものと思はれる。それは『汝らのうち』と言ふパウロの警告の句から判断すれば斯んな連中がまだ或る程度で、或る場合には存在したことを示す。シユミイデルが言ふやうに此の列記した事情の下にあつてパウロは尙ほ『此れは神の教會で、聖である』と稱するのである。

斯くの如き不秩序のある物は基督者の自由の曲解と無責任から生じたのである。この曲解は偶像神殿に於ける宴會や不道徳を伴ふ社交に於て異教徒の友人との交際を斷つのを拒む事となり(前書第八章、十の十四—二十二)。男女同權を主張する人妻の無法(前書十一の三、十四の三十四—三十六)、不信の夫を棄てる權利ありと主張する人妻(前書七の十三)、教會の集會に性的の區別に反對すること(前書十一の四以下)、其の從僕の境遇を恨む奴隸の基督者(前書七の二十一)、自由の名により靈的賜物と預言の實行の放縱(前書十四の二十三、二十六)等現れた。教會生活を攪亂する異教的傾向もあつた。例令へば神秘的なことを羨望し之を修養せんとする傾向(幻に接する賜物の如き)又知識を(接神術的な知識や辨證學の方面から肉體の復活を取扱ふやうな)極端に重なる風等其の分類である。同時に異教的道徳も亦或る程度に異教からの回心者に由つて基督教に輸入せられた。従つて異教徒には當然とせられユダヤ人には不都合極まるとせられ(前書六の十三—二十)てゐる男女間の自由な關係、異教徒にさへ餘り甚だしいと見られる肉慾的不倫(前書五の一)

に對する無頓着が見られた。其の無頓着は教會全體に廣まつてゐた靈的賜物によつて、自ら欺いた結果であらう。そのうちには斯くの如き極端に走り、或はその走つたものを見遁し、恐らく前の書翰に書いたのであらうパウロが授けた或る教に背いてゐた。それが彼らには實行不能と思はれたからである。例令へば教會の内外を問はず如何なる事情があつても不倫な人々と交際しないやうにと命じたものとして彼らは此を世間から出ることであると解し、又『一切のもの我に可からざるなし』(前書六の十二)との基督者の自由自在の精神を以て單に萬事に『無頓着』だとするのみならず例令へば放蕩のやうな行爲、不倫の事實をも心に留めない意味に取つた。

コリント教會からの質問に對する回答と、パウロがクロエの家の者に聞いたやうな他の原因から認められた點との間に明快な區別を試みることは困難である。教會の書翰には黨派の争を隠し(前書一の十一)、近親相姦の事實(前五の一)、聖餐の不秩序(前十一の二十以下)、第六章の訴訟好きで不倫の點、第十五章の復活に就いての異端、又『書き送りしことに就きては』の普通の緒言のないことは(前書七の一に教會の質問であることを示し、従つて七の二十五、八の一、四、十二の一、十六の一、十二も恐らく)教會の特別な質問ではなかつたと言ふ證據には必ずしもならないし、又ヴェルを纏ふか纏はないかの問題はなかつたとする(前書十一の二十一—十六)ことは出来ない。パウロが

斯くの如き問題に口頭で回答するやうに託したテモテは既に遠い方の（陸路）マケドニヤ路へ向ひコリントを指して出發した後であつた（前書四の十七、十六の十）。然るに懸念に堪えない警戒を要する報告に接し、パウロは書翰を認めて、海路から（想像だが）送る決心をした。然らずばそれがテモテより前に到着はむつかしいからであつた（前書十六の十一）。そのテモテの爲に豫め勸告して『テモテもし到らば慎みて汝らのうちに懼なく居らしめよ』と言ひ、又『誰も之を卑むることなく、安らかに送りて我が許に來らしめよ』（前書十六の十、十一）とあるのでテモテが其の始めパウロの考へたよりも困難にして面倒な役目に當ること、なつたものと明かに察せられる。

然る後パウロは一點々と譴責や助言を與へて行く。進んで彼は次から次へと移つてはるないが然し其の類別に一定の調和で、一貫する原則で纏められてゐる九つの題目を論ずる。其の内容は次の通りである。

其の内容

パウロと同伴者の挨拶及び祝禱 一の一—三
 感謝と希望 四—九
 牧會上の問題 一の一—六
 (一)教會に對する教師たちの眞の關係

(一)の十一—四

靜かに黨派心を戒む 一の一—十七
 十字架の愚 十八—二十五
 愚者弱者に對する神の手段 二十六—三十一
 宣教師たるパウロの愚さと弱さ 二の一—五
 基督を傳へる純正の智慧 六—十六
 黨派に現れたコリント人の肉の品性 三の一—九
 唯一の基礎工事それに建築す責任 十一—十五
 神の殿を損ふ災害 十六、十七
 黨派結成者と其の愛好者を嚴かに戒む 十八—二十三
 其の僕の唯一の審判者たる神 四の一—五
 自負するコリント人とパウロ及び其の敬慕者の謙遜 六—十三
 子に對する父としてパウロの譴責 十四—二十一
 (二)墮落會員に對する教會の制裁 (五)の一—十三
 不倫事件と其の處分 五の一—八

緒論—其の内容

淫行の所謂基督者との絶交 九—十三
 異教の法廷に其の争を訴へる兄弟 六の一—十一
 物に無頓着な自由思想と不倫の自由 十二—二十

コリント教會の道德問題 七—十

(一)結婚及び離婚 (七)の一—四十
 獨身と結婚との立場 七の一—七
 結婚の諸問題 八—二十四
 處女、寡婦、一般基督者 二十五—四十
 偶像に獻げた肉 (八)の一—十一の二
 偶像に獻げた肉の問題 八の一—十三
 パウロの實例、使徒權の棄却 九の一—二十七
 古へのイスラエルの失敗 十の一—十三
 偶像に獻げる祭に與かる危險 十四—二十二
 合法的自由 二十三—三十一の二
 禮拜式に就いての諸問題 十一の二—十四の四十
 (二)婦人の地位 (十一)の三—十六、十四の三十四—三十六

面帕を取る勿れ	十一の三—十六	十五の一—五十八
(二)愛	(十一)の十七—三十四	(二)基督の肉體の復活の合理性(十五)の一—十九
教會に於る宴會の戒飭	十一の十七—三十四	此の復活に就いての使徒の一致したる證明
(三)靈的の賜物	(十二)の二十一—四十四	十五の一—十一
御靈の降臨の純正な證據たる『基督の告白』	十二の一—三	(二)基督の復活と死者の復活 (十二)の十九
賜物の相違	四—十一	基督の復活と基督に在る死者への影響
教會の各員と人間の四肢五體	十二—三十一	二十—二十八
靈的賜物の唯一の要素を愛十三の一—十三	十四の一—二十五	(三)基督者の自己犠牲及び忍耐と復活
預言の賜物の優越性	二十六—三十三	(二十九)の三十四
賜物の實踐	三十四—三十六	復活と復活の肉體
婦人の一般的な預言	三十七—四十	(四)肉體の變化の當然性
結論と總轄的敘事		五十一—五十八
肉體の復活の正當なる事と其の説明		事務と個人的諸問題及び結尾の挨拶
		十六の一—二十四

コリント後書

其の不詳點

凡てのパウロの書翰集中で本書が一番明白でない。本書は全く雲霧のうちに閉されてゐる。シュ

ミイデルは前書から後書の區域に移ると恰かも風に所々濡はれながらも全體として兎も角足跡のたどられる小徑のある公園を去つて、人跡絶えた森林に入つた心地がすると言つた。

其の不思議な事情

第一に感ぜられる點は如何。先づ前書とは不意に全く新しい雰圍氣の中に伴はれる。暴風雨一過尙ほ空氣には電氣は残つてゐるが其の峠は去つて、遠雷微かに轟き、時々遙かに電火が閃いてゐる。其の形を變へるためにパウロと教會の間に及が交はされたが、今は大部分は安定して平和の徴が窺はれるけれども、尙ほ其の首尾一貫するものかと思れば、其の末尾に至つて更に戦鬪の餘韻が高く耳を打つのである。其の初の數章にさへパウロの和解を喜ぶ叫には、尙ほ悲痛と理解の錯雜した調子が混交し、憤怒すら未だ消滅してはゐない。甘露と苦汁の此の接合が本書を解する難題である。

前書を以ては不可解

其の事情も前書から起つたとしては餘りに強烈である。二の三、四にパウロは心の憂悶と懊惱か

ら生じて、苦痛に堪えやらず、涙を注ぎつゝ、嚴酷な書翰を認め、訪問の代りに贈つたものに違ひない（一の二十三）。七の八—十には今は既に其の結果が立派に收められて却つて遺憾を覺えると言ふ。前書には斯くの如き項目に相當するものなく、後書の第四章までが直接證明する經過に就いての大なる苦悶と其の事情が調和しないのである。前書にある廣汎な題目、その冷靜、其の愛に對する憧憬、其の他の特徴はパウロが記してゐる書翰とは全く異つた種類に屬するものである。サンデイは前書に就いての記事であるとの説を證明して『多くの章句殊に初めの方の各部に（前書のうちの）著者は輕くない情熱を有してゐるものと認めねばならない。……（前書四の八—十三のコロント人の自己満足に對してそれを傷けるやうな皮肉、十四—二十一の使徒としての權威を以ての譴責、第五章の近親相姦者に關する項目）等の如き章句は其の書翰を送達して後パウロの記憶に鮮やかに残つたに相違なく、彼らがそれを受けて後の行動に就いて彼が大いなる不安、焦燥さへも抱くに至つたことは決して不可能ではない』と言つてゐる。それでも尙ほ全體としてサンデイが引用する章句を以てしても其の執筆に伴ふ心の苦悶であるとしてパウロが自ら記す所には當筈り難い。パウロが言ふ書翰（『その書を以て』七の八）を前書であるとして、其れが『汝らを憂ひしめ』、或は彼が『悔い』又は悔いんとしたものが前書であつたと信ずるを得やうか。

中間に他の書翰があつたか

それは此の中間に其の結果が斯う現れるやうな更に激烈で、必ずやもつと大膽にもつと集中して問題に直接極限した書翰があつたものと認めるのが自然で、近年斯くの如き信念が徐々に確實となつて來てゐる。

其の證據と著述の時期

そんな書翰があつたとすれば、それはどんな必要から認められたか。此の第一の問題こそ後書（或はその一部）が大團圓となつてゐる劇の解決に大いなる資料となるのである。

踪失した書翰

第一にパウロは現今存在する以上にコリントへ多くの手紙を書いたと言ふことは認められる。『前の書にて』と前書五の九に言ふ言葉は前書の前に書翰がなかつたとすれば全く餘計な句で、『淫行の者と交るな』との明白な命令は前書の何所にも發見出來ないし又コリント教會の誤解の訂正も此

れに當るものは其の前に存在しないのである。更に後書に（十の十）『その書は重く、かつ強し』と言つてゐるのは複數で（日本語ならば『それらの書』と譯してないと不明となるが）あつて彼の考のうちでは其の譴責が一通の強硬な書翰のみではなかつたと断定は出来ないまでも暗示してゐると言へやう。それよりもつと直接の證據がある。即ち

仲媒テトス、既にテモテに非ず

前書には（四の十七、十六の十、十一）テモテが『我が基督にあつて行ふところ、即ち常に各地の教會に教ふる所を』彼らに思ひ出させるやうに特にコリントにパウロの使者として送られたとある。即ちパウロの書翰は彼の何れの教會でも教へた所と一貫してゐたこと、パウロが彼の代表者の歓迎せられること、其の歸還に最も焦慮してゐたことは搖がない推斷が出来る。パウロの不安とテモテの歸還とに拘らず（一の一）後書にはテモテの往訪に就いて一言も添へず、其の歸還に就いても同様で、又テモテから傳へらるべき教會の事情や、或は前書の讀まれた結果の報告に就いても全く記されてゐない。此の沈黙は、パウロの不安と、此の時恰かもコリントを往訪することを拒んだアポロの態度が、テモテの行動が無効とはならないまでも其の成功を妨げる騷擾の状態にあつたこ

とを示すものと認めるより外に至當の途がない。それは兎も角として後書の前にテトスがテモテに代つて其の通信の仲媒となつてゐる。パウロは『門』が既に彼のために『開』かれ（二の十二）其の使者とマケドニヤへの途中で逢はねばならない必要があるので、其の騷擾してゐる教會の状態に就いて報告を待つてトロアスで絶望的に氣を揉んでゐた。神は教會の熱情が其の創立者に復歸して來たとのテトス彼自身にも歡喜であり福音である慰藉と歡喜とをパウロに授けられた（七の五、七、十一、十三—十五）。出發前のテトスの不安と困惑と、彼の使命の困難な凡ての點は其の成功後に彼の英氣の恢復したのに徴しても察せられる。故に其の事情の光景は合理的に描寫が出来る。恐らくテモテは其の高潮した紛擾の報告を携へてエペソに歸つて來た。故にテトスが之に應ずる新たな指揮を受けて送られた。テモテに比べてテトスが勝れた精力や勇氣や素養や莊重さを持つてゐたかどうかはわからない。前書十六の十、十一に見えるテモテに對するパウロの危惧、テモテ後書三の十四、四の一—五にある彼に對すパウロの訓諭からテトスを勝つてゐたと論ずる人々もある。テトスはユダヤ教的陰謀者に對抗するには最も適任で、一方彼は既に異邦人討議の際エルサレム教會に於て承認せられ（ガラテヤ二の三）、其のため母教會に於けるパウロの勢力上に不可抗の證明となつてゐる人物であつたことは言ふまでもない。テトスはコリントに全く不案内であつたかどうかは判

斷出来ない。然し紹介状を要するやうな人物に此れほど重要な使命が託せられやうとは考へ難い。故に彼は既に後書十二の十八に言ふ往訪を遂けてゐたものらしく思はれるが確實ではない。若し彼は教會に面識がなかつたとすれば別に彼の人物や使命を認めたと書翰を携へて行つて、其の書翰にパウロが『教會』を『憂ひしめる』やうな激烈の譴責を與へたものと思はれる。前書の後に可成り時日の距りがあつたことは、パウロに其の悲痛を與へた或る人物或は寧ろ教會（彼が直ぐ寛大な追加をしてゐるやうに）がパウロに熱情を向けて來てから、其の騷擾者を嚴酷に處罰したが更にそれを恕し、パウロも之を恕した（二の十一）と言ふ點から信ぜられるのである。前書の當時潜行的であつたパウロへの敵意は其の後公然と又強硬となつて、彼が近親相姦者に對して教會は『誇ることをなし』『悲しま』ないのを責め、其の權威を高調したことを捉へて極度に利用したものだと思はれる。譴責警告、訓誨等に其の權威を示す人物に對して、自己満足してゐるものへ個人的敵意を抱かせるやうに拔目なく立ち廻ることは容易の仕事である。（彼らは心私かに思ふに至らう）『何者なれば我々は彼の男に服従せねばならないのか』と。斯くの如き氣分はコリント人を、パウロと其の福音とから離間するのに便利な機關としてユダヤ教的運動者に利用せられたことであらう。

中間の往訪の有無

今日多數の批評家はテトスを使として此の中間の書翰を送る前にパウロはテモテの報告を受くるや直ちに自ら教會の問題を鎮定せんがためコリントを訪れたと主張するのである。此れが彼の後に再び繰返す勇氣がないと（後書二の一）言つてゐる『憂をもて』の訪問で二回目であつたらう。而してそれが又『誇る者あり』と彼が憂ひた訪問であつたらう（前書四の十八）。斯くの如きものが二の一に『我再び憂をもて汝らに到らじと自ら定たり』と言ふのみならず尙ほ後書に『三度汝らに到らんとす』（十二の一及び十二の十四）と言ひ、過去の滞在を『二度汝らに逢ひしとき』（十三の二）と言つてゐる事實で明かとなる。サンデーは其の中間の訪問前の中間の書翰が明かな一致を有すると言ふ。曰く『彼が「多くの涙をもて」綴つた書翰と（此の訪問）を結ぶほど當然なことはあるまい。……後書十の十に「その書は重く、且つ強し、その逢ふときの容貌は弱く、言は鄙し」を見てパウロは急いでコリントに赴き、其所で持病が起つて、肉體衰弱し、其の來たときよりも凡ての問題が悪化してゐるのでそのまゝにして歸らねばならなくなつて、それから此の騷動を鎮めるために書翰を贈り、此の書翰の語調が強硬で、それを送り出してから甚だしい不安に陥り、後書との中

間にテトスが来て其の不安から免れたと想像が出来る』と言つてゐる。さう言ひながらもサンデイは此の訪問を今の前書以前とする少數批評家に賛同してゐる。此の説に對して其の書翰中にそれを示す聊かの形跡もないのみならず、前書四の十八—二十一の憂は近く訪れて悲しんだと言ふのとは適合せず、未來の訪問に一致すると言ふ點で反對出来る。然し又其の訪問を前後書の間に置くのにも困難がある。どうしてパウロはそんな事實があつたとすれば後書一の十五以下に言ふやうにコリントに往くことの『遅い』（二十三節）と言つた其の移氣を辯解することが出来たであらうか。更に中間に譴責のための訪問を行つたとすれば、重ねての訪問が企てられるやうな温い雰圍氣を作る事が出来たであらうか（一の十五）。斯くの如きもつれは事情を一層明白に知らない限りは解くことは出来ない。それらしい二つの推測が試みられ得る。即ち一つは後書一の二十三の『我がコリントに往くことの遅きは』は彼が再び來、而して若し必要ならば『宥さじ』と言つた無効の訪問（マケドニヤへ一時退いて後）の際に約束したことを遂げない意味に解せられる。斯くの如き約束の不履行は彼の誹謗者につつて好個の攻撃資料であつたらう。後書十三の二『我復た到らば決して宥さじ』が其の環境からして訓誨的訪問の後に書いた中間の過激な書翰であると言ふ説が正しいとするならば一の十五以下はマケドニヤに於てテトスの喜ばしい報告の後に書いた後の書翰の一部で

あること其の環境から認められると言ふのが可成確實となる。（二）教會の改革のための訪問は其の始からの考に至當で『靈に益する所あり』と認められることは當然で、彼はテモテの歸還後に其の謀叛の精神が激烈となつた、めに受けた此の冷酷な取扱をコリントで受けやうとは豫期しなかつた。教會の状態は一回よりも二回（一の十五）の訪問を必要とするもので、一回は即刻行はねばならないと彼には思はれた。彼が其の計畫をした時の氣分は、彼が自ら教會に行つて其の亂暴で時には全體が聲を揃へて離反したことを實見したときよりも其の氣分が幾分穩やかであつたものと見られる。サンデイの言ふやうに若し後書の十三の一以下の三回目訪問が前書十六の五—七（マケドニヤを経てコリントへ）の温かい計畫を實行したのならば、『我復た到らば決して宥さじ』は其の氣分が同様に變化した他のときのことであると認められやう。兎も角此れは曖昧のまゝに暫く措くより他に途はない。

中間書翰の存在の否定

此んなものは存在しなかつたとの説は後書七の十二の『不義を爲したる人』と『不義を受けたる人』との二人が前書の父子で、其の子が父の妻を娶つたと言はれる者、又後書二の五に『憂ひしむ

る人』は充分の制裁を受けた者の事であると言ふ推定から起るのである。此の説を支持する人は不倫の者（後書六の十四—七の一）と交はるなどの訓誨を主として此の章句は内容が急激に切斷せられてゐて、其所に入るべきものではなく、踪失した書翰の斷片が紛れ込んだもので、恐らく前書五の九を類例とすべく、又其の不義者の處分が寛大であるとの議論に、異つた緒言を附けたものと解せられるとの有力な疑問が懸念となつてゐるに相違はない。然しその議論を観察するとそれが全く異つた事情の下にあることが明かとなる。（一）子が父の妻を娶つたのが父の存命中であつたとは到底認められない。さもなければ親の権利が全く専制的であつた當時に其の『不義』をどう取扱つたものであらうか。若し父の死後ならばどうして『不義を受けたる人の爲』とパウロは言ふのであらか。（二）若し此れが近親相姦の子の事ならパウロは『不義をなしたる人の爲』に書くのでないと言ふのか。彼の書翰起草の目的は明白である（前書五の五『主耶穌の日に救はれん爲なり』）。（三）後書七の十二の句（我らに對する汝らの奮勵の神の前にて汝らに顯れん爲なり）は近親相姦の犯罪に對する動機を指すのか。同様にパウロが自ら恕すと言ふのと、更に深い罪も其の制裁を寛やかにするとの思想（後書二の五以下）は此の極悪非道の犯罪と彼の前書五の五『斯くの如き者をサタンに付さんとす』との熱烈な壓迫と何れに調和するのか。

更に或る批評家の意見では『不義を受けたる者』はパウロ自身を指し、其の中間訪問の際或る誹謗者の首魁が甚だしく彼に侮辱を加へたのに對してこれを赦して、其の罪を出来るだけ軽く取扱ふと言ふのであると主張する。然し此の説は文の構成上甚だしく無理であつて『不義を受けたる人の爲にもあらず、我らに對する汝らの奮勵の、神の前にて汝らに顯れん爲なり』と前の句に自己を隠して後句で自己を現すと言ふ道理はない。更に不義を受けた者をテモテとし、或は教會員の間の争であるとする説も唯だ臆説に過ぎず、何れにしても充分の解釋は不可能で困難を免れない。要するにパウロに對する反抗は彼の福音に對する反抗で、彼が教へた基督への叛逆はユダヤ教反動の勝利であつた。それでこそパウロの激怒したり歡喜したりする事情を理解し得るのである。

ユダヤ主義者、その正體と戰術

既に述べたやうに活動的なコリント教會に於けるユダヤ主義者の存在と事業とは後書に至つて始めて正確に取扱はれてゐるのである。同教會には、或る特別な意味で『基督に屬す』（十の七）と主張する生れながのユダヤ人（十一の二十二）がゐた。而してパウロの言ふ所に由ると彼らは異なる耶穌、異なる靈、異なる福音（十一の四）を傳へた。既に言つたやうに此らの人々は（其の黨派の中

心) 耶穌の地上の關係から彼らはパウロには使徒權のないことを主張した耶穌の直接の弟子であつた。斯くして律法に拘泥し、耶穌が自ら教へて自ら實行せられたものとして之を主張し、異邦人の不徳を其の不履行に歸した。彼らが携へてゐた推薦状なるものは一方の教會から他方へ人を紹介する普通の書狀に過ぎなかつたが、それを彼らは其の差出人の意思でもない目的に利用したのか、或はパウロの宣傳してゐる説教の報告を聞いて之を取締るために組織したユダヤ人基督者からの書狀であつたか知ることを得ない。然し若し其の委員たちが眞面目な人たちならば其のパウロに對する反對が出來合服レライノエドのやうに用意されてゐた道理はないのである。パウロの恩寵の教義から起る弊害を防ぐのにユダヤ教の律法が必要だと經驗の上から決心したのならば例の無遠慮で、或は其の熱狂的宗教心を以て、も單純な、偏狹性や狂暴に陥るべき筈ではなかつた。彼らは其の正否如何に拘らずパウロの有害な勢力を撲滅して彼の個人的聲名と其の使徒の地位とに堂々抗議すべき筈であつた。然らば彼らは熱烈にして有力な宣教師としてエルサレムに於ては深く尊敬せられ、眞理に對する黨派的仇敵、狂信的反パウロ主義者とならず、ペテロのやうにパウロと同等の地位に立たず、もつと之を妨阻する使命に奔走した筈であらう。然しパウロの斯くの如き反對者に對する攻撃を見ると、彼は此の反對者の背後に十二使徒や母教會が之を支持してゐると認めてゐた形跡は聊かだもない。

若し彼に聊かでも斯くの如き懸念があつたとすればエルサレムの聖徒のために義捐金を集め、自らその教會へ之を携へて行つたとき、又其の額を少しでも多く集めやうとするときに、あれほど冷靜に、あれほど自然にそれを語り得た筈がないのである(後書九の五と前書十六の二―五比較参照) 又(後書第八章及び九章其の他参照)。

其の攻撃。(一)パウロの人格と品性に對して。此らの人々がパウロに加へた攻撃の一般戰線は之を暴露することは困難でパウロの否定からして彼らの主張を發見し、彼の否認からして彼らの行動を發見することは往々行き過ぎる虞れがある(恐らくシユミイデルの如きは行き過ぎてゐるやう)。然し彼らはパウロの人物と其の職務上の地位を論難し、其の職務の批評も多くは其の人物から試みたものであつたことを斷言しても差支へはあるまい。彼の人物に對する侮蔑は明白である。彼らは言ふ如何に彼が書翰の著者として銳利な筆を有したとしても教師としては貧弱で印象を與へ難い人物であつた(後書十の十、十一の六)。彼は遠方からペンやインキを用ひれば大膽不敵であるが近く接すれば卑怯者に過ぎない。彼は行くに威赫しながらその實行が出來なかつた(前書四の八―十一、後書一の二十三、十三の三、四、九、十)。而して彼が行くと約束し、或は威赫したときですら、其の計畫から逃げ出るのに便利な『肉の智慧』と言ふ精神上の遠慮で差控へてゐる(後書一の十五

以下)。常に卑怯であるのみならず二枚の舌を用ひる。然らずば彼は貧弱な人間であるに拘らず、傲慢に思ひ上つて、自己を讚美し(後書三の一等)虚榮が彼の頭を轉向せしめた(五の十三)『我等若し心狂へるならば』、十一の一『我が少しの愚を忍ばんことを』同十六『少しく誇る機を我にも得させん爲に愚なる者として受容れよ』。然かも尙彼は常に彼自身の地位に聖なる信賴を缺く、或は彼は眞の使徒の如く其の同心者に自己を大膽に支へしめないのか(主要點は異なるが前書九の四—六と十一の七を比較せよ)。然し彼は其の表面無慾のやうに事實無慾なのか。否な全然それは彼の狡猾な手段で之を償つてゐる。彼はどうかして其の代理者(後書十二の十四—十八、七の二)を通じて金を集め、貧しき聖徒のための寄附金のうちから着服してゐるに相違はないと。以上のやうなものが彼に對する攻撃であつた。最後の中傷は前書十六の三に彼がエルサレムへ其の集金を一人で携へて行かないと言つてゐる所から推せられるのであつて、同時に後書八の十八—二十一に『我ら又彼と共に一人の兄弟を遣す、この人は福音をもて諸教會のうちに譽を得(全然信賴するに足る人物で)……彼を遣はすは此の大いなる贖金を掌どる人に咎めらるゝ事を避けんためなり。そは主の前のみならず、人の前にも善からんことを慮ばかりてなり』と言ふので明かである。彼の肉體の苦痛は神の呪として指彈されたものと思はれる。後書四の七以下、其の肉體の弱いの神が其の大能を

示し給ふ手段であると辯駁し、六の九に神は彼を訓練し給ふけれども死には付し給はないと言つてゐる。

(二)彼の職務上の立場に於ける攻撃。彼の人物や品性に對する攻撃は彼の使徒權を蔑視する階梯に過ぎなかつた。彼らは彼の權利は『基督に屬する』即ち基督の役者であるかどうかを疑つた。

(後書十の七、十一の二十三)。彼は地上の基督に接してゐるか、彼は接してはゐない(五の十六、

又前書九の一のヒントで)然し斯くの如き知識のみが使徒權の保證であると言つた。

(三)彼の教義に就きての攻撃。斯の如き階梯を経て彼らは遂に彼の教義を攻撃し、轉覆して彼らの教義を之に代へた。

彼らの代へた教義。ユダヤ主義者の普通の立脚地——割禮、祭日、飲食——が此の書翰の表面に見えないのは注意すべきである。恐らくコリントの反動家たちの戰術は此れを背面に隠して、表面には使徒としてパウロの正規の信用條件を缺くことを基礎としたものと思はれる。然し各方面から彼らの律法主義の跡を指摘し得られる。例令へば彼らは『義の役者』(十一の十五)と自ら氣取つた。此の義即ち律法の義務遂行は兩様の意義に用ひられた。『僞使徒』に對しては全律法に就いて言ふのであつて、コリントの基督者に對して此所ではパウロが説く基督者の自由から生ずる不倫の行爲

を防ぐべきものとして其の方面の律法のみを指したものとせられた。此の義の役者たちは今『基督の役者』(十一の二十三)、『基督に屬す』(十の七)との異名を用ひた。斯くして反パウロ主義とは基督に就いての反パウロ的思想の上に築かれたであらう。パウロは彼らが彼の説かない『異る耶穌』を傳へると主張してゐる(十一の四)。彼らの福音は『異る福音』で、パウロがガラテヤ人へ『基督の福音を變へんとする』ものだと言つたそれであつた(ガラテヤ一の七)。基督に對するパウロの意見に根本の反對は後書の他の章句にも認められるが、それは皮相の讀者には往々唯だ敬虔な表現とのみで見落され易い。一の十九に由つて此らユダヤ主義者の耶穌基督はパウロやシルワノやテモテが傳へた基督と異り、『然り』と『否』、即ち約束であつて成就したものではなかつたと推論出来る。此れは三の六—十八に其の説明が発見せられるのであつて、其所にパウロは自己の傳道と彼らの傳道とを比較し、自己の傳道は靈を與へる生活即ち服從の能力を賦與する傳道で、彼らの傳道は死に到る儀文即ち斯くの如き能力を賦與せず、唯だ罪の呪を與へる傳道であると言ふ。四の一—六に於てパウロは彼の福音に眼の盲ひたものは滅ぶるもので、基督の榮光の福音の光に對して此の世の神から盲とせられたものであると言ひ、パウロと其の伴侶たちは(彼らが攻撃するやうに)自己を宣傳してはゐない、唯だ『基督耶穌の主たる事と……耶穌のために汝らの僕たる事を』宣べる

のみであると言ふ。此の句に由つてユダヤ主義者の耶穌——パウロの口から語を拾つて彼らは之を基督と言ふが——は『神の像』でもなく『神の榮光』でもなかつた(四の六)ことが知れる。五の十二、十四—二十一に由つて我らはユダヤ主義者の福音は其の外觀の榮光を有するもので、衷心からのものではなく、即ち內的の影響なく外部の主張に過ぎず、彼が十六—十九に示すやうに彼らの基督は『肉による』基督で、神の和解と赦罪の仲媒となり人間を新たにする靈の基督ではなかつた。十三の三に於て『我にありて語り給ふ基督』を巧みに『僞使徒また詭計の勞働人にして己を基督の使徒に扮へる者』に『語る基督』(十一の十三)と比較してゐる。

斯くの如きコリントのユダヤ主義者は彼らがパウロと差別すべき地上の耶穌に親みを有したのみならず、基督の地上への顯現に極限した立場を取つた。即ち肉の律法的基督、ダビデの裔として生れ給ふたメシヤ、パウロがローマ一の三に『肉によれば』と言ふ唯だ一部にして其の基礎たるメシヤ權のみを認めてゐた。パウロの基督は十字架と陸上に由つて肉の領域を離れ、外部の儀文を棄て、人間の心に神の靈的感化を行使せんがため其の力を有する靈の領域に入つて律法以上に進み、基督を信する信仰に由る救を以て律法の救の上に達し、全世界へユダヤ人以上に及んだ靈的基督である。然しユダヤ主義者は地上の耶穌として實際の顯現に接したことを固執し、其の根柢よりしてバ

ウロに對し、其の使徒權を否定し、靈的基督に就いてのパウロの思想を彼の想像の小説で、彼が親しく見たと想像する幻から産れて養はれたものと主張したと察せられる。

彼らの傍若無人。一次びパウロを放逐する決心をしてからは、彼らは遮るものを斷じて容さなかつた。卑劣極まる陰險、巧妙ならゆる手段を用ひ（四の二、十一の三、二の十七）彼らと彼らの福音に勢力を増すことに苦心し、一時ではあつたが彼らの我儘勝手に教會を處理することに成功したも、やうに見えた（十一の四、二十）。尙ほパウロの名聲を傷ける彼らの陰謀は前項以來此所に描き來つた以上にさへ行はれたものに相違はない。パウロを傷け、彼の名同様全教會の名譽をも傷けた（二の五）。パウロを攻撃すべき何事かがあつたことは明かである。それは彼が僞使徒であると言ふ以上の問題であつたに相違はない。其の證據はないけれども充分に推論が出来る。其の攻撃中に最も深刻なのは彼の肉體の虚弱に着け込んだ言ひ掛りであつた。ゴオデエの想像する所は正にその通りであつたらう。曰く『それは彼を寸斷し、悲歎に彼の心を粉碎する痛烈な攻撃で（二の四）、教會の最も善良な會員に深く浸潤し、男女の不潔の關係さへ尙ほ冷淡に傍觀してゐた人々もパウロの肉慾の罪を戒飭、譴責する僞善（と其の敵は中傷した）には流石に憤慨して離間された』と。然し彼自身の純潔に就いて（六の六）——其の引用の句にそれほど意味があるかは疑はしい——此

の推論は唯だ臆測と言ふ外に後書に根據はないやうである。それは兎も角として彼らの不埒な言ひ分は何れにあつてもパウロはそれを漠然たる、然し意義深重な語句の陰に葬つてゐる。

本書の統一如何

此れは一時甚だ活氣のあつた問題で、獨逸に於けると同様、英米に於ても熱心に研究せられた。其の議論のあるのは主として二つの部分で（一）第十一—十三章で、恐らく最後の數節は問題とならない、（二）六の十四—七の一である。第九章も亦區別すべきものであると論ずる人々もある。今それを研究する必要があらう。先づ第九章を觀察する。

第九章。第九章が本書翰に屬するや否やの疑問は其の第一節が第八章の問題の反復に過ぎないものと認められ、従つて第八章は不必要であつたと言ふことに歸するとの根據からシムラアが考へたので起つた。貧しき聖徒に對する贖金を即時に行ふべきを主張し、比較的貧しいマケドニヤ教會の感心な實例を掲げ、偶々コリント教會が『一年前より人に先だちて行つた』ことを引用して（八の十）第二十四節（第八章）を認めて後、彼は『聖徒に施すことに就きては汝らに書き送るに及ばず、我汝らの志望あるを知らばなり、その志望につき汝らの事をマケドニヤ人に誇りて、アカヤは

既に一年前に準備をなせりと言へり。斯くて汝らの熱心は多くの人を勵したり』と進んで言ふ。一見した所で此の序文は第八章と矛盾してゐる。然し一層深くそれを觀察すれば要點が擱めるのである。パウロは第八章に於て贖金を敏速に行はねばならないこと、其の愛を諸教會の前に顯す敏速なる贖金を彼が自分より先に遣はす兄弟に託したと語つてゐる。聖徒に施す事業に對しては彼は何事も言ふべき必要なく、彼らはそれに對して以前より既に其の志あり、其の志を彼は兄弟に託して送ること、なつてゐる。パウロは前書第十六章に於て、暫くして自ら彼らを訪れ、代表者と共に其の義捐金をエルサレムに送らんことを望んで、同様に敏速な贖金の必要を勸告してゐる。然しコリントで生じたそれまでの事情では、彼の『志望』を充分に實現することが中止されてゐたものと思はれる。九の一以下を斯く説明すれば本書から第九章を除外せんとする少數の批評家には容易に同意し難いのである。

六の十四—七の一。六の十四—七の一の除外説はそれよりも遙かに有力である。『不信者と軛を同じうすな』との誠は思想の關聯上奇體な中斷である。七の二の『我らを受け容れよ』は六の十三の『汝らも心を廣くして』と密接な關係がある。パウロの『我らの口は汝らに向ひて開け』（六の十一）異邦人の罪人と親密な交際を禁ずる誠でなく、遠慮なく言へば彼らに同情のない人々には親しめない意味である。彼らを受け容れるやうに彼の『心は廣くな』つた（六の十一）。而して彼らの心も亦同情が復活して來た以上に彼らに與へたと同様更に廣くせんことを（七の二）希望するのである。今日の場所へ此の句の存在することを前後關係から立證するには到底相手を説伏する事の困難と、パウロの突飛な習慣に基づく一般的辯解も充分に行はれ難いことを告白せねばならない。全然彼が書いたものではないとの反對論は不穩當で不必要であるとして之を否定が出来るし、又推測されてゐるやうに前書五の九に言ふ紛失した書翰の一部であるとも言へる。此れの位置が間違つてゐるとのヒルゲンフキルド其の他の狭い議論は若し其の本文の歴史上挿入の何らかの證據があれば受け容れ易いのである。此れに對して其の個所はサンデイの語を藉りて曰ふと『恐らくさうではあるまい』、『そんなことは事實あり得ない』或は少くも『證明が出来ない』とならう。

第十章—第十三章（或は十三の十）。後書の後の部分は第一章—第九章以前に書かれたもので、第一章—第九章に描かれた陰謀の間、其の和解の前に教會に宛てた書翰（或は其の一部）であるとの説を千七百六十七年シムラアが主張し始めて、千八百七十年ハウラスも亦其の著書『コリント人へのパウロの四章書翰』の中で同様の意見を發表した。此の説は更に近代のドイツ、英米の批評家が主張し之に對してシュミイデルが細かに論じて辯護してゐる。其の説の強調する所は（一）若し此の流

行する意見が正當ならば——即ち第一章—第九章にパウロが和解した多數に宛て、言ひ、第十章—第十三章には尙ほ少數の陰謀者があるとすれば——彼は其の變化或は警告の聊かのヒントも與へず一點から他の點に不意に轉じてゐる。即ち後の項目中の『汝ら』は始めの『汝ら』のやうに一般的で全てを含むもので、從つて何れから見ても教會全體を指すものでなければならぬ。(二)此の項目は『我大なる患難と心の悲哀とにより多くの涙を以て汝らに書き贈』つたと二の四に言ふ書翰(或はその一部)に當るものとして其の調子が充分に強硬であると言ふことである。

第一章—第九章に於てはパウロとコリント教會とは甚だ美はしい關係にあるものと見えるが、第十章—第十三章の十では其の調和が失はれてゐることは確かに注意すべきである。前項に於てパウロは更に相互に同情の完うせられんことを望んでゐるが謀叛の考は認められない。此の有力な犯行者に對する制裁は『足れり』であつた(二の六)。然しパウロは『凡て』の人の意味で『多くの』と『一人』と對照する手法を用ひた。此の場合に於て『一人』の犯行者は『悲哀に呑み盡される』とパウロが恐れるほどに自ら甚だしく感じたものと思はれる。一方パウロは此の犯行者が『汝ら衆を憂ひしむる』と言ひ乍らも到る處にテトスが『汝らみな從順にして……を思ひ出して』(七の十五)と言つてゐる。後の部の雰圍氣と用語とは全く異つてゐる。其所には和解した多數とか和解の中途にあるとかの痕跡は少しもない。『其所に少しの保留條項もない』。それは『汝ら』(十一の八、十二の十三)に事へるためにパウロは『他の教會から奪ひ』取らしめられたとして責めるやうな教會である。パウロが若し往けば『わが望の如くならず』と虞れるのは『汝ら』であつて、『汝らの或る人々』ではない(十二の二十)。パウロが皮肉に『汝らは夙くより我ら汝らに對して辯明すと思ひしならん。されど我らは基督に在りて神の前に語る。愛する者よ、これ皆汝らの徳を建てん爲なり』(十二の十九)と言つてゐるのは『汝ら』即ち全教會に對してである。以上は前後兩部の『汝ら』が何れも全教會を指すものであることを示す夥しい中の一例に過ぎない。

第一章—第九章に第十章—第十三章を過去の事實として回顧してゐると言ふのは信する理由があつて注意を要する。(一)十三の十に於てパウロは『我れ離れ居りて此らの事を書き贈るは、汝らに逢ふとき……嚴しくせざらん爲なり』と言ふ。然るに二の三に同じく彼は言ふ『我前に此の事を書き贈りしは我が到らんとし我を喜ばすべきもの反つて我を憂ひしむる事のなからん爲』である。(二)十三の二に『前に罪を犯したる者とその他の凡ての人々とに預め告ぐ、我復いたらば決して宥さじ』と言ふ。然るに一の二十三には『我がコリントに往くことの遅きは』(或は最早往くまじと譯せられる)と言ふ。(三)十の六に『汝らの從順の全くならん時、凡ての不從順を罰せんと覺

悟せり』と言つてゐる。然るに二の九には『前に書き贈りしは凡ての事につきて汝らが従順なりや否やをも試み知らん爲なり』と言ひ又七の九に『彼(テトス)は汝ら皆従順にして……を思ひ出せり』と言ふ。(四)三の一にパウロは『我ら再び己を薦め始めんや』と言ひ、五の十二に『我らは再び己を汝らに薦むるに非ず』と言ふ。此の自己推薦を過去に行つたと彼が自ら言ふ事實は第十章—第十三の十に甚だ夥しく試みられてゐる。而してそれに『再び』の句がない。其の一例は『我も誇るべし』(十一の十八)、『我は汝らに譽めらるべかりしなり』(十二の十一)等に見る。中間の書翰に斯くの如き自己推薦は特徴であつたものであらう、パウロは前の方の部分に過去の事として『再び』と加へてそれを回顧してゐる。(五)十二の十四に又不幸に十三の二に問題の解決に即時と思はれる第三回の訪問を爲すと言つてゐるが、十二の二十、十三の十に當然少し遅れると猶豫を置いてゐる。此れは若し此の書翰に希望した効果がなければ其の處分のために往く積りであると思はれる。然るに一の二十三、二の一に訪問しない理由と其の事情とを述べてゐる。斯くの如き事情から其の最後の書翰(第一章—第九章)を以て尙ほ残留してゐる卑怯や二枚舌の言ひ掛りを一掃したものと考へる方が明快に理解が出来るのではなからうか。

最後に若し後の數章に曖昧な『汝ら』と言ふ語で現されてゐるやうな猜疑的で敵意を有する多數

が尙ほあつたならば、第八章、第九章に於てパウロがエルサレムの聖徒への贖金をあれほど信頼して遠慮なく訴へることは不自然であるとの説は尤もである。パウロのやうな人物は斯くの如き不利な形勢の下にあつて、たとひそれが自分のためではなくとも金錢を要求する道理はない筈である。本書の結論となつてゐる贖金に就いての數章に對する議論には前書の第十六章を引けば宜しい。

實際叙述の細かな點は決定し難い。寧ろ後書の二大部の一般的矛盾を明かにする。然し尙ほ之を認容せねばならない諸説、正直に言ふと到底反駁の出来ない諸説が他の方面に存在する。

(一)初代の基督者は本書の矛盾に少しも氣付かなかつたと。其の沈黙してゐるのから強硬な推論が生ずる。然し此の激烈にして和解的の書翰は特にコリント教會に限られたもので、始めには當然一般に公開したものではなかつた。その形はどうであつてもコリント教會以外に擴まつてから保存せられることゝなつたに相違はない。今日残存する以上にコリントへは多くの書翰が贈られ、其の序文が結論か、或は兩方を失つた、めに斷片が後書として編輯せられたかも知れない。何れにしても第一世紀末まで後書なるものが認められない。イレニウス前にそれを引用したものが見えないしロマのクレメントはコリントに書を贈つたが、それには前書の事を『彼の書翰』と言つてゐる。

然かもライトフウトは卒直に「クレメントの用語や思想中に後書の感化を聊かも認めない」と言つてゐる。然し以上を綜合すればイレニウスやアレキサンドリヤのクレメントが第二世紀の後半に全く知らなかつた前後兩部の不統一は始めから存在してゐたと言ふ以上に何の結果もない。

(二) サンデイは「此らの數章(十の十)に引用された唯だ一通の苦惱の書翰(後書七の八、二の四)がある。故に此れらと同一では(十の十以下)ない」と言ふ。然し其の苦惱の書翰は其の反對者が「その書は重く且つ強し」と言つたものであることは確かであらうか。其の前後の關係はパウロが此の特殊の書翰に對して反對者の言ふ所を適用したものと考へられるのである。曰く「假令我汝らを破る爲ならずして建つる爲に主が我らに賜ひたる權威につきて誇ること稍過ぐるとも耻とはならじ」(十の八以下)と言ひ、又「斯くのごとき人は思ふべし。我らが離れるときおくる書の言の如く逢ふときの行爲も亦然るを」(十の十一)と。此れは斯くの如き想像を挿む餘地がある。(或は其の反對者が種々の書翰に強い句調だと考へたものはあつたらう。前書四の十八―二十一の如き其の一例)。

(三) サンデイは更に「パウロが其の苦惱の書翰を認めたときは、彼自ら往訪する必要を避けるため(一の二十三)に之を贈つた。然し斯くの如き數章を書くに至つたのは將に往訪しやうとする場合であつた」(十二の十四、十三の一)と言ふ。其の事情を研究すればそんな事實があつたに相違はない。然し此の最も面倒な時代にパウロの心に二つの感情を有した以上の矛盾があつたとする必要があらうか。コリントへ其のとき行く代りに始めに其の苦惱の書翰を認めたとき當然な理由で、少し訪問が遅れると言つた(十三の十、十二の二十)其の訪問は(若し其の書翰が無効となつたと解れば)彼が自ら有すると感じてゐる使徒權を其の制裁に行使するにあつたと推することが出來やう。然し間もなく、彼の心を動かす反對の判斷で、教會の感情が彼に向つて來るまで其の旅行を延期する方が好いと結論に達したものと思はれる(一の二十三)。若しそれがさうだとすれば此所と言つてゐる旅行は其の愉快な書翰第一章―第九章を書いた後に行つた旅行とは其の目的も事情も異つてゐる。尤もそれは同様の地理的な順路を経てはゐるけれども。サンデイの反對は有力であるに相違はないが、一般に認められた困難から遁ける斯くの如き間道と、第一―第九章と第十章―第十三章を今日の順序で同じ書翰の中に收めて置く今も尙ほ残る更に甚だしい困難との間に、何れを選ぶかが問題である。

事件の顛末

前項に述べたやうな困難があつても、若し其の説が維持されるものならば前書贈達後の事件は次のやうに解決したものとせねばならない。

(一) テトスと其の同僚の往訪(後十二の十六—十八)は前書の贈達(ラムゼイ)と、パウロに對する不満の發見、權威に對するパウロの主張、尙ほ聖徒に對する贖金を『願つた』事(八の十)。(二) テモテがマケドニヤを経て往訪(前十六の十)し、何かの理由(テモテの方に判断の誤りか、或は力量が缺けてゐるか)で其の不満が一層甚だしくなつてテモテは其の報告を携へてパウロの所へ歸つて來た事。

(三) 其の不満はユダヤ主義者の密使が來て煽動したため公然の謀叛となつた(後十一書の四其他)其の報告がパウロに達した事。

(四) パウロは海路(第二回目)コリントに駈け着けた。(後二の一)。然し彼の努力は効なく、教會には悔恨の狀なく不埒な侮辱を加へたのでパウロは悲歎に暮れてマケドニヤに赴き、彼の往訪を宣言し、若し必要ならば之を處分すると言つた。

(五) 然しマケドニヤからはコリントに往かず(後書一の十六)エペソへ歸つた。

(六) エペソから自ら往訪する代りにテトスを使者として嚴重な書翰を送り、それに將に自ら往

かうしてゐる事、若し必要ならば處罰することを宣言した(後書十二の十四、十三の一等)。

(七) 最後に行かないことに決心し(後書一の二十三、二の一)彼の書翰とテトスの往訪の結果の報告を待ち詫びてテトスに出逢ふためとアトロスに傳道の積りで彼所に行つたが精神安からずトロアスでは途が開かれてゐるに拘らずマケドニヤに赴き、其所でテトスに遭つて其の吉報に始めて喜んだ。

(八) パウロはテトスに第一章—第九章(恐らく)及び十三の十一—十四を託してコリントに送り、其の騷擾の間(第八、九章)中止してゐた贖金の勸告を試みた。

(九) 彼は自ら遂に赴いてコリントに三ヶ月を過した(使徒行傳二十の三)。

其の時代の推定

前書とパウロの最後のコリント訪問との間には可成な時日があつたであらうか。普通の意見では前書は紀元五十七年(恐らく)の春認めたもので、後書は同年の秋に認めたと云ふ。然し此の時期の年代は甚だ不確實で、前書と後書(或は後書の後部第一—九章、十三の十一—十四)の間は半ケ年ではなく一ケ年半の距りがあるものと認めて、それを破る實際的の根據は見出されない。若しバ

ウロが其の第一回の往訪後紀元五十二年の春コリントを去り、紀元五十四年の夏の末に其の最後の訪問を試みたとすれば前に叙べた事件の顛末を収めるほどの時間は充分にあるべき筈である。而して後書八の十、九の二に『一年前』の醜金の問題をコリントでは『人に先立ちて行ひ』、『アカヤは準備せり』のパウロの記事が甚だ自然に解釋が出来る。

其の内容

- 挨拶、創立者テモテの名を加へて 一の一―二
- パウロ個人の感謝 三―十一
- パウロの至誠意と彼らの承認 十二―十四
- 往訪の計畫の變更とパウロの誠意 十五―二十二
- 彼の憂悶の書翰贈達の理 二十三―二の四
- 反抗者の制裁と其の宥恕 二の五―十一
- パウロと神の聲 十二―十七
- パウロは自ら薦めず 三の一―三
- 基督に由る神の信任 四―六
- 舊約以上の新約の使者の榮光 七―十一
- 基督のみ靈として榮耀を耀かしめ得る 十二―十八
- 赫灼たる福音の榮光 四の一―六
- 役者の榮光と其の艱苦の理由 七―十五
- パウロの肉體的虚弱と靈的活力 十六―五の五
- 死を以ても尙ほ満足 五の六―十
- 己を殺したる基督への愛 十一―二十一
- 神の恩恵のうちに生活せよ 六の一―十
- パウロの打明けた愛情の告白 十一―十三
- 異教徒との密接な關係 十四―七の一
- テトスの報告に歡喜したパウロの慰藉 二―十六
- コリントの醜金の完成 八の一―十五
- 醜金を完成せんがための使者を推薦 十六―九の五

- 最後の訓誨 六一―十五
- 卑怯と軟弱とに對する辯駁 十の一―十八
- 自ら推薦する根本の理由 十一の一―十五
- パウロと反對者との比較 十六―二十九

- 基督に由りて強し 三十一―十二の十
- コリント人の不信 十一―十八
- 神こそ唯一の審判者 十九―十三の十
- 最後の訓誨、挨拶及び祝禱 十一―十四

(以上主としてジエイ・マツシイに據る)

新約聖書
註解

コリント前後書

第壹章

挨

撈

一一三

一 神の御意により召されてイエス・キリストの使徒となれるパウロ及び兄弟ソステネ、二書を、コリントに在る神の教會、即ちいづれの處にありても、我らの主、ただに我等のみならず彼らの主なるイエス・キリストの名を呼求むる者とともに聖徒となるべき召を蒙り、キリスト・イエスに在りて潔められたる汝らに贈る。

三願くは我らの父なる神および主イエス・キリストより賜ふ恩恵と平安と汝らに在らんことを。

ガラテヤ書やロマ書と等しく此の兩書翰にもパウロは其の周到な挨拶を掲げて目下論争してゐる（九の一以下）使徒權を強調する。此所に著者はコリント教會の神聖と基督者全團體との交歡に就いて心を用ひてゐる。

一、神の御意により召されて耶穌基督の使徒となれるパウロ及び兄弟ソステネ。神の御意の特別の交渉に由つてと言ふ（九の十六以下、ガラテヤの一の一、十五以下参照）。人間の功績や選定に由つて使

徒となつたのではない。『召されたもので』ある。従つて服従の義務が生ずる。基督者各自に神の『召』を當て箝める思想は本書翰を通じての特徴である。ソステネは可成り広く用ひられてゐた名であるから確かではないが使徒行傳十八の七の會堂司であつた男かも知れない。緒論に言つたやうに若しさうであつたとすれば興味の深い物語が生ずる。別に彼はパウロの同勞者ではなかつたであらう。彼はコリントで重きをなした會員であるが、今はエペソに來てゐた。二、書をコリントに在る神の教會。コリント前後書のみに見える句。神の國と其の政治に召集せられた市民。基督の使徒からコリントの教會に最高の權威を附與するのである。我らの主……彼らの主なる耶穌基督の名を呼求むる者とともに聖徒となるべき召を蒙り。パウロ、ソステネの主であると同時に彼らも亦同じく戴く主で、凡ての基督者を含む統制ある團體である。『集合せる一地方の基督者團體は此所、彼方に存在する一個の廣大な「基督者の集會」の一部である』（フキンドレイ）『召を蒙り』は前句註參照。潔められたる汝ら。其の原則として基督耶穌との一致契合に由り神に對して罪から分離されたもの。召は即ち此の原則に築かれる。尙ほ『基督耶穌』と故更順序を轉倒したのは、基督の過去の事業は其の客觀的の基礎で、其の現に天にいます存在は神の義の發出する本源であることを示す。三、恩恵と平安。『恩恵』は『主耶穌基督』に顯現せられた自由にして活きた愛。平安は其の恩恵が神との和

解其の他の祝福を齎らすに由つて人間に及ぼす靈的結果である。

感謝と希望 四一九

四われ汝らがキリスト・イエスに在りて神より賜はりし恩恵に就きて常に神に感謝す。五汝らはキリストに在りて、諸般のこと即ち凡ての言と凡ての悟とに富みたればなり六これキリストの證なんぢらの中に堅うせられたるに因る。七斯く汝らは凡ての賜物に缺くる所なくして我らの主イエス・キリストの現れ給ふを待てり。八彼は汝らを終まで堅うして我らの主イエス・キリストの日に責むべき所なからしめ給はん。九汝らを召して其の子われらの主イエス・キリストの交際に入らしめ給ふ神は眞實なる哉。

コリント教會に授けられた賜物、殊に其の言と智慧とに優越を示したるを感謝し、彼らに基督の事業の完成すべきを基督に由りて信頼すると言ふ。

四、基督耶穌に在りて神より賜はりし恩恵。『耶穌基督を以て恩恵に充ち、それを人類に灑がれるものと考ふべきである』（オルシヤウゼン）。我らの有する凡ての賜物は我らの功績の結果ではない。神の恩恵に由るのであつて、耶穌基督に由つて與へられるのみならず、尙ほ靈魂に基督の内存在せらるるに由つて與へられると言ふにあらう。五、汝らは基督に在りて諸般のこと即ち凡ての言と凡ての悟とに

富みたればなり。彼らが其のバプテスマと同時に基督との契約的一致契合に入ることを得たときにある。マツシイはコリントの信者が未だ一般の靈的水準に達しいが、其の眞理を明かにして之を説明する能力のみは、特徴として具へるやうになつたことを、教育的に深切な寛容な態度で賞讃するのであると言ひ、リイアスは個人としては多くの靈的進歩を遂げた會員があつたが、一團體としては未だ充分でなかつたと言ふ。六、是れ基督の證、汝らの中に堅うせられたるに因る。基督に就いての證明が彼らのうちに強い確信となつて現れた事實に應じて彼らは富ましめられると。七、斯くて汝らは……耶穌基督の現れ給ふを待てり。前叙のやうな賜物に富んでゐるので、他のものを求めず、只管に其の賜物を與へ給ふた基督の顯現と面帕の除かれんことを熱心に待望すると。蓋し熱心に待望するやうに鼓吹し、奨励するのである。八、彼は汝らを終まで堅うして。汝らが待望すれば基督の方では其の待望を空しくしないやうに之を彼らのうちに堅うせられる。斯くして我らの主耶穌基督の日に責むべき所なからしめ給はん。主耶穌基督の顯現の日は即ち其の審判の日である。其の弱點や缺點がないやうにして下さると言ふのではない、公訴事實を認めないやうにして頂くと云ふ。『斯くてパウロは基督教を以て人間の選擇や嗜好上の問題として取扱ふコリント教會の人々に、基督は唯一にして無二のものであることを訓誨すべき準備を爲す』（ホフマン）。九、汝らを召して其の子我らの主耶穌基督

の交際に入らしめ給ふ神は眞實なるかな。神が我らを召して神と御子との交際のうちに我らを入らしめ給ふと。即ちパウロがコリント教會の搖がない幸福を希望として有するのは神が眞實欺かざる方であることを基礎としてであると言ふ。神には虚言はない。不實はないと。

自第壹章十節
至第六章末節 牧會上の諸問題

黨派に對する戒

十一十七

十兄弟よ、我らの主イエス・キリストの名に頼りて汝らに勸む、おのおの語るところを同じうし、分争する事なく同じ心、おなじ念にて全く一つになるべし。十一わが兄弟よ、クロエの家の者、なんぢらの中に紛争あることを我に知らせたり。十二即ち汝等おのおの『我はパウロに屬す』『われはアポロに』『我はケバに』『我はキリストに』と言ふこれなり。十三キリストは分たるる者ならんや、パウロは汝らの爲に十字架につけられしや、汝らパウロの名に頼りてバプテスマを受けしや。十四我は感謝す、クリスポとガヨスとの他には、我なんぢらの中の一人にもバプテスマを施さざりしを。十五是わが名に頼りて汝らがバプテスマを受けし人の言ふ事なからん爲なり。十六またステバナの家族にバプテスマを施しし事あり、此の他には我バプテス

マを施しし事ありや知らざるなり。十、七そはキリストの我を遣し給へるはバプテスマを施させん爲にあら
ず、福音を宣傳へしめんとなり。而して言の智慧をもつてせず、是キリストの十字架の虚しくならざらん
爲なり

差別觀念を徹廢せよ。共同せよ。或はパウロ、或はアポロ、或はケバ、又基督と其の好む教師を
擔ぎ廻るな。基督は唯だ一部の人々の基督か。パウロは其の黨派と名のる者の救主か。愚の極であ
る。パウロは少數の他にバプテスマを施さなかつたのを感謝する。斯くの如きは彼の事業ではな
かつた。彼の事業はバプテスマのために非ず、十字架を説かんがためであつたと彼は主張する。

十、我らの主耶穌基督の名に頼りて汝らに勸む。耶穌基督が内住し給ふ人々に對して言ふ。昔のヘブル
人、其の他に取つて『名』は唯だ他人と區別するためのみならず、其の品性人格を物語るものであつ
た。ペテロ、ボアネルゲ等は其の一例である。故に耶穌基督の人格と品性に由つてと言ふ。各語る所
を同じうし。其の指導者に由つて説が異なるやうに言ひ廻はるのを戒める。分争する事なく。同じ教會の
中にあつて其の意見を異にして相分れ争ふを言ふ。同じ心、同じ念にて全く一つになるべし。パウロが
此所で意見が全く絶對に統一することを必要すると言つたと想像は出来ない。そんな事は人間に在
り得べからざる事である。其の本質に於ては一致すべき筈の弟子たちが相互に相愛し、枝葉の問題

で争はないやうにと言ふ。一體同じ心、同じ念、即ち目的が一つになれば其の個々の相違が集合し
て各々自己の本分に由つて貢献すべき立場がある筈である。十一、クロエの家の者、汝らの中に紛争あ
る事。クロエの家とはクロエと言ふ婦人がエペソか或は其の近傍で廣く事業を行つて、其の店員が
コリントに行つて其の教會の實狀をパウロに報告したものであらうと言ふ（緒論参照）。『紛争』は
其の不満の感情を公然打ち出して論議するのであるが、唯だの討論より實が悪く、感情を交へて
る意味である。十二、我はアポロに。アポロの教義を祖述すると言ふのではない。彼の雄辯や博學を
推賞する所謂崇拜家である。ケバに。ギリシヤ語ならばペテロと言ふべきを、故更アラム語でケバ
と言つたのは其の徒黨がユダヤ人を主としてゐた證據であらう。我は基督に。此れも教義に於てより
も、自ら基督直屬の弟子であると主張して、特殊の權能を有するやうに振舞つた者共であつたらう。
或はパウロが直屬の弟子でないと言ふので其の使徒權を否定したのであらう。十三、基督は分たるる
者ならんや。一方の徒黨が『基督に屬す』と主張することは基督の體の一部が四肢五體から自分を
切り離して其の特殊權を主張するやうなものである。基督は一つにして又全體である。基督は一部
の專有物かと言ふのである。パウロは汝らのために十字架に：汝らパウロの名に頼りてバプテスマを。基督
以外の教師の弟子であると主張することをパウロは否定する。即ち基督の御名に頼りて信仰に加は

る者のみが、教會の唯一の頭たる基督の救に與かり得ることを此所で更に想ひ起させるのである。
 十四、クリスポとガイオス。クリスポはコリントのユダヤ會堂の司(使徒行傳十八の八)。ガイオスはロマ十六の二十三のカイオ、使徒行傳二十の四(日本譯ガイオ、十九の二十九ガイオスは何れも誤植で皆ガイオスとなるべき筈)と同名であるが皆同一ではないかも知れない。ギリシヤ語のガイオスはラテンのカイウスで羅馬人の間には普通の名であつたと言ふ。十五、是我が名に頼りて汝らがバプテスマを受けしと人の言ふ事。勿論此んな事實があつたのではないが、信仰の中心が失はれて、枝葉が主張せられる結果は、パウロの立場も其の徒黨のために反つて見失はれる虞のないやうにと心掛けるからである。パウロに同意加擔するからバプテスマを受けたと解せられる虞のないためと言ふ。基督教の傳道の間にも往々淺薄なファンが流れ込んで、運動者や其の崇拜講師に付き纏ひ其のバプテスマを要求する。此のパウロよりも思ひ上つて『乃公でなければ』と得意にバプテスマを施す傳道者も今日では見られるやうである。十六、またステパナの家族。此の書翰通達の特使、早飛脚に當つた人物と思はれる。改譯のステパノの『ノ』は『ナ』の誤植と推定する。十七、バプテスマを施させん爲に非ず、福音を宣傳へしめんとてなり。『博學ならざるものも完全なるバプテスマを施し得べし。然しながら福音を完全に傳へんとするは遙かに困難なる事業にして、遙かに稀有の資格を要す』(ア

ウガスチン)。言の智慧を以てせず。修辭學の盛大な時代である。どれほど言語上の遊戯が行はれたか知るを得ない。今日或る種の宗教學者の宗教論を聽いるると全く言語上の遊戯の心地がする。是れ基督の十字架の虚しくならざらん爲なり。『破廉耻の我らのために破廉耻の死』こそパウロの夢寐にも忘れなかつた事實で、又其の宣傳する表現であつた。哲學や修辭にそれが隠くされてはたまらぬ。往々其の修辭や美語に包んで全く福音ならざる福音を傳へてゐるものを見る。

十字架の愚

十八—二十五

十八それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど、救はるる我らには神の能力なり。十九錄して、『われ智者の智慧をほろぼし、慧き者の慧を空しうせん』とあればなり。二十智者いづこにか在る、學者いづこにか在る、この世の論者いづこにか在る、神は世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらずや。二一世は己の智慧をもて神を知らず(これ神の智慧に適へるなり)この故に神は宣敎の愚をもて、信ずる者を救ふを善しと爲給へり
 二二ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。二三されど我らは十字架に釘けられ給ひしキリストを宣傳ふ。これはユダヤ人に蹟物となり、異邦人に愚となれど、二四召されたる者にはユダヤ人にもギリシヤ人にも神の能力、また神の智慧たるキリストなり。二五神の愚は人よりも智く、神の弱は人よりも強ければ

なり

其の救の權威を経験する者に取つて十字架の教は愚かな事實ではない。預言者の語は其の眞なるを示し、神は此の世の智慧の愚かを明かにせられた。神の智慧に由れば世が神を發見するは其の智慧をもつては不可能のやうに設備せられた。徴を求めるユダヤ人、智慧を追ふギリシヤ人は十字架の基督に赴くを得ない。唯だ其の使命に應ずるものに取つては、基督は神の徴で又神の智慧である。愚かでも弱くても結構である。皆神のもので人間の能力や智慧に遙かに優れてゐると。

十八、それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど。フキンドレイはパウロが第十七節に於て主張した所を今度は經驗（十八節）と聖書（十九節）とに照して證明すると言つてゐる。愚とはアテネの市民（使徒十七の三十二）のやうに死からの復活や十字架に死んだ罪人が行ふ贖罪の如き逆説を嘲り之を承認しない意味。救はるる我らには神の能力なり。愚の反對たる『智慧』を含む能力で、其の『救』の能力、『凡て信する者に救を得さする神の力たればなり』（ローマ一の十六）。即ち我らを變質せしめる『能力』であると。十九、我智者の智慧を亡ぼし、慧者之慧を空しうせん。イザヤ二十九の十四の引用。故に『録して』と言ふ。パウロは人間の智慧と神の智慧とを比較する預言の誤のなきことを立證する。神は預言者の警告に拘らずエジプトやアツシリヤに同盟を結んだイスラエルの政治家の世

俗的智慧を無効に終らしめられたではないか。二十、智者いづこにか在る、學者いづこにかある。この世の論者いづこにか在る。智者、學者、現代（當時の）論者は皆此の活戰場から一掃せられ、凡て斯くの如き主張は消滅する。『一般の智者、ユダヤの學者、ギリシヤの論者』（アルフオールド）神は世の智慧をして愚ならしめ給へるにあらずや。基督に由る救の福音を神が宣示せられたことに由つて以上の智者、學者、論者の智慧は悉く空しくせられた。此の世と神とは互に其の智慧を愚と認められた。然るに神は此の世が妄想して智慧とした所を愚ならしめ給ふた。如何にしてそれを愚かならしめ給ふたかは二十一—二十五の問題である。二十一、世は己の智慧をもて神を知らず（これ神の智慧に適へるなり）眞實の學者の精神は小兒の如き精神である。此の世の精神は其の資格や知識に得意となつて小兒の精神を有しない。神は神の智慧に由つて此の世の精神を以ての知識的努力は神の性質を洞觀することの出来ないのを御承知である。神は小兒の精神の知識的努力、即ち信仰を以ての知識に由つて觀取することが出来る。故に神は信仰が其の基礎とならねばならないやうに準備せられた。この故に神は宣教の愚をもて、信する者を救ふを善しとし給へり。『亡ぶる者』に取つてそれが愚とせられ、此れには高い智慧の賜物は必要でなく、十字架に釘つけられ、復活し給ふた主を信す單純な信仰が必要であるが故に『宣教の愚』を用ひ給ふた。其の生れながらの權力を主張する人間から無視されることが

救の道への第一歩である。斯くして小兒の如き信仰の精神で其の能力を悉く神に屈服せしめて後、再生し變質することに由つて其の能力を返還せられると考ふべきである。二十二、ユダヤ人は徴を請ひ、ギリシヤ人は智慧を求む。ユダヤ人はメシヤに託せられて伴ふ天よりの不思議な奇蹟を求め、ギリシヤ人は彼らの不可解に苦しむ神秘を解くべき哲學に熱中する。二十三、されど我らは十字架に釘けられ給ひし基督を宣傳す。基督の教義はユダヤ人やギリシヤ人が要求する所とは全く反對であつた。地上の王位に坐するメシヤに非ず、其の敵を斃す勝利に非ず、修練を積んだ辯論に非ず、基督の宣教師は處刑せられた罪人を説き廻る。地上の王者としては何らの權能なく、哲學者としては何らの主張も有しない。基督の辯論は唯だ其の生活と死のみである。地上のメシヤを夢み、地上の特權に儂れるユダヤ人には仇敵の如く、空理空論を求めぬギリシヤ人には無意義であつた事は何の不思議もない。これユダヤ人には蹟物となり、異邦人は愚となれど。ユダヤ人のメシヤと十字架に釘き給ふたメシヤは全く矛盾で反對であつた。十字架に釘き給ふ神の權威と言ふが如きは哲學ではなく餘りに人為的であると思はれた。二十四、召されたる者には……神の能力、また神の智慧たる基督なり。神の『能力』は神の『智慧』を證明する。福音に普遍的効力あることは其の内部の眞理を事實に證明し、信仰は遂に理性に由つて其の正鵠なことが悟られる。『召されたる』即ち信仰を有するユダヤ人は遂

に十字架に最大の奇蹟を發見し、信仰を有するギリシヤ人は深玄至極な智慧を十字架に發見する。其の準備の時代に暗黙の間に活動してゐた『神の智慧』は遂に基督に由つて人間の認識に上つて來た。日本元譯には逆に『基督は神の大能また神の智慧なり』と譯されてゐるが、改譯が原文に忠實で又強調する力がある。二十五、神の愚は人よりも智く、神の弱は人よりも強ければなり。ギリシヤ人の眼には愚かにユダヤ人の眼には弱しと見えたるものが、彼らの思想概念以上に賢明で、強硬であつた。人間なる耶穌基督に在る神の默示は神の智慧の完成で、神の死に由つて罪の十字架に釘けられることは、他の方法を以ては亡ぼし得ざるものを碎く神の靈能の至高の顯現であつた。

愚者弱者に對する神の手段

二六—三十一

二六 兄弟よ、召を蒙れる汝らを見よ、肉によれる智き者おほからず、能力ある者おほからず、貴きもの多からず。二七 されど神は智き者を辱かしめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱かしめんとて弱き者を選び、二八 有る者を亡さんとて世の卑しきもの、輕んぜらるる者、すなはち無きが如き者を選び給へり。二九 これ神の前に人の誇る事なからん爲なり。三十 汝らは神に頼りてキリスト・イエスに在り、彼は神に立てられて汝らの智慧と義と聖と救贖とに爲り給へり。三一 これ『誇る者は主に頼りて誇るべし』と録されたる如くな

らん爲なり。

人間を贖ひ給ふ方法として現れてゐる神の愚と弱きを見よ。神は最下層を以て最高層に向はしめ、高きに與せず、低きに與せられる。其の福音の勝利は此所に在る。肉の能力に由らず基督に由つて人間は救はれ、新たにせられる。而して神は虚偽の榮光を顔色なからしめんがために此の眞理を明白にして自己を顯現せられたと。

二十六、召を蒙れる汝らを見よ。二十五節の逆説を事實に訴へて證明する。其の眞理の實例は現に基督教會に示されてゐると。肉によれる智き者……能力ある者……貴きもの多からず。人間の見る意義から又其の推賞する所から言へば知識階級は少く、政治的有力者は少く、自由市民中の上流に屬する者（すら）少いと。二十七、されど神は智き者を辱かしめんとて世の愚なる者を選び、強き者を辱かしめんとて弱き者を選び。神の計畫、神の權能を強調せんがために前叙の三つの階級に對して別に『神は……選び』と繰返す。本節は其のうちの二階級、即ち愚者と認められる者、弱者と認められる者を選定せられたと。二十八、有る者を亡さんとて世の卑しき者、輕んぜらるる者、即ち無きが如き者を選び給へり。

『此の世は我らの請ひ求むる福音を嘲笑すると共に我らの請ひ求むる自我を嘲笑する』。然し神の選定に由つて其の地位は轉倒した。人間の眼に貴く見られたものが基督者には全く無に等しきものに見える。異教徒の素養と支配階級の驕慢は基督教が其らから除外された者共に與へた能力に由つて狼狽せしめられてゐる。例令へば印度のバラモン教徒（上流知識階級）が基督者の下層民が有する道徳及び智力の優越に辱かしめられてゐる如き。基督教が動かす階級は哲學者や政治家には其の存在を認められない人々である。二十九、これ神の前に人の誇る事なからん爲なり。卑しめ辱かしめることは神の直接目的ではないが、然し神の行動の結果が彼らの耻辱となる。而して神の直接目的は人間をして人間の當然の地位を意識せしめるにあると。『肉なる者は神の前に貴きものではない』三十、汝らは神に頼りて基督耶穌に在り。『汝らの新たな生命は基督に築かれてゐる』。『世が無きが如くに取扱ふ汝らは、其の前には人間の凡ての榮光が消散する神のものである、基督にあつて神から來る地位は汝らのものである』と。彼は神に立てられて、汝らの智慧と義と聖と救贖とに爲り給へり。基督の受肉のため、人間の研究に由らず、神の默示に由つて智慧となり、律法に服従するに由つてではなく基督に由つて、靈魂に義の御靈を瀉されるに由つて義が完うせられ、人間の功績に由つてではなく其のうちに成育する神の律法たる基督に由つて聖（即ち聖の原則が活動するのは別の方法で）となり、自己が失はれて、我らの罪のため基督が行ひ給ふ贖罪に由り（即ち我らが罪のために縛せられてゐる俘囚から我らを救ひ出すために其の價を償はれて）贖はれる。三十一、これ『誇る者は主に

頼りて誇るべし』と録されたる如く。エレミヤ九の二十三以下と列王紀上二の十を簡單に要約して引用したものと思はれる。斯くの如きことは聖書に記されたもので、其の通りにならねばならない筈のものだと言ふのである。神は御前に人間が智慧や能力や貴族（エレミヤでは虚偽の光榮の目的とせられてゐる）なるが故に之を尊び給ふのでなく、光榮の主に在るが故にのみ人間を尊び給ふ。かかればこそ神は其の『智慧』又其の『救の能力』たる主を遣はし給ふたのである。コリント教會の争闘は基督の御名と其の御事業を外にして人間の名を重んずるのが彼らの致命傷であるとしてパウロは働いたのである。

第貳章

宣教師たるパウロの弱さと愚かさ 一一五

一兄弟よ、われ曩に汝らに到りしとき、神の證を傳ふるに言と智慧との優れたるを用ひざりき。ニイエス・キリスト及びその十字架に釘けられ給ひし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定められたればなり。三我なんぢらと偕に居りし時に弱く、かつ懼れ、甚く戦けり。四わが談話も、宣教も、智慧の美しき言

によらずして、御靈と能力との證明によりたり。五これ汝らの信仰の、人の智慧によらず、神の能力に頼らん爲なり。

パウロはコリントに現れたとき既に其の愚者であることと弱者であることを示してゐる。彼は哲學を語らず、唯だ十字架の主を説いた。彼は貧弱にして戦々競々とした不安の人間であつて、僅かに御靈の能力に支へられたに過ぎない。コリント教會員の信仰は人間の智慧の産物ではなく、神の能力の産物である。

一、我曩に汝らに到りしとき。本章の始めに原書には前章を受けた『斯くて我は』と言ふ文字がある。前に言つた通りに諸君も弱く愚かであるが自分も堂々偉いものとして諸君の中に入り込んだのではなかつたと言ふのである。神の證を傳ふるに言と智慧との優れたるを用ひざりき。パウロの神に就いての證明、神の愛と義とを織り成すパウロの證言は耶穌基督の生活と死に由つて世に顯現せられた事實の宣教にあつた。二、耶穌基督及びその十字架……のほかは……何をも知るまじと心を定め。哲學に非ずして一人の人格、其の人格は十字架上に殺された一人格である。其れ以外には何を知つてゐるか認められやうと認められまいと議論をしたり、勝を争つたり、そんなことは一切頓着しなかつたと。三、我汝らと偕に居りし時に弱く且つ懼れ、甚く戦けり。アテネの哲學者との應對では成功とは言へな

つた。其の直ぐ後でコリント人と其の哲學的な頑迷に對抗するには如何にも自分の不似合なことを意識したであらう。且つ其の成功は彼の個人としての缺點と其の福音が承認を受けるやうに相手に傳へる困難とでとても覺束ないと考へられた。『自分に聊かの有効な點もなく、深い確信の外に辯舌を有せず、卑下する外に何もなく、大きな惱であつた肉體の虚弱に加へて深刻な意味で聊かも自負すべきものもない意氣鎖沈』(リイアス)。四、我が談話も宣教も智慧の美しき言によらずして。福音の宣傳に於て行つた談話にも、神の御意と御意に由る召に就いての説明にも、推論して納得せしめるやうな辯舌を用ひなかつた。ソクラテスは『何も教養の役にも立たない推論の巧妙な技術である修辭上の訓練』を否定してゐるがそれでもコリントでは非常な喝采を博してゐるのを皮肉に言つたものとエドワードは言ふ。御靈と能力との證明によりたり。『コリントに於ける福音の證明は體驗的で倫理的で、其の宣傳に當つた新たな意識と變化した生活のうちに發見せられる』(フキンド)。神の靈が人間の靈に産出せしめる罪、義、審判の自覺と、福音の特質たる心と生活との變化を産む能力の自覺とを指してゐるものと思はれる。五、これ汝らの信仰の人の智慧によらず、神の能力に頼らん爲なり。パウロは唯だ福音を宣布する神の口となつただけで、神のこののみを求めた。神のみが其の聽衆の信仰に由つて崇められることを求めた。パウロが若し巧妙な論理でコリント人を説伏し彼のギリシ

ヤ哲學の上に基督教を築いてゐたならば其の時代の智慧と共に彼の事業も夙くの昔に消滅してゐたであらう。

基督を傳へる純正の智慧

六一十六

六然れど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。これ此の世の智慧にあらず、又この世の廢らんとする司たちの智慧にあらず、七我らは奥義を解きて神の智慧を語る、即ち隠れたる智慧にして神われらの光榮のため世の創の先より預じめ定め給ひしものなり。八この世の司には之を知る者なかりき、もし知らば榮光の主を十字架に釘けざりしならん。九録して、『神のおのれを愛する者のために備へ給ひし事は、眼いまだ見ず、耳いまだ聞かず、人の心いまだ思はざりし所なり』と有るが如し。十然れど我らには神これを御靈によりて顯し給へり。御靈は、すべての事を究め、神の深き所まで究むればなり。十一それ人のことは己が中にある靈のほか誰か知る人あらん、斯のごとく神のことは神の御靈のほか知る者なし。十二我らの受けし靈は世の靈にあらず、神より出づる靈なり、是われらに神の賜ひしものを知らんためなり。十三又われら之を語るに人の智慧の教ふる言を用ひず、御靈の教ふる言を用ふ、即ち靈の事に靈の言を當つるなり。十四性來のままなる人は神の御靈のこを受けず、彼には愚なる者と見ゆればなり。また之を悟ること能はず、御

靈のことは靈によりて辨ふべき者なるが故なり。十五されど靈に屬する者は、すべての事をわきまふ、而して己は人に辨へらるる事なし。十六誰か主の心を知りて主を教ふる者あらんや。然れど我らはキリストの心を有てり。

前項の通りに振舞ふことが彼の常套の方法であつて、彼の人氣の揚らないのは福音の中には子供だましのやうな此の世の知識に勝れた高遠な智慧があるからで、それが久しく神が目的とし給ふた恩寵の默示である。これこそ新時代の先驅で、虚勢を振る過去の哲學を時勢後れとした。それが單に知識を求める人には隠されてゐるけれども、靈的の人間には認められるのである。それは福音は聖靈の默示であつて、聖靈の導に由つてのみ明かに悟られ、聖靈が啓示する言語でのみ告白が出来るからである。

六、然れど我らは成人したる者の中にて智慧を語る。三の一の『幼兒』と對照としての成人基督者、即ち充分に發達した基督者である。コリント教會の大多數は地上の問題、推論や、爭論や、自由研究と言ふことを出でない幼兒であつた。故に彼らは福音の眞の智慧が何處に宿るか知らず、福音の役者を此の世の標準で値踏みしてゐる。これ此の世の智慧に非ず、又この世の廢らんとする司たちの智慧に非ず。『司たち』の智慧と言ふに就いて種々な議論が行はれる。前に哲學の意義に解して略説した

が政治上の支配權も含んでゐるであらう。此の世の司は自分の手段には如何にも賢明であるが、神の途には全く暗く遂に空しきに歸せられると言ふにあらう。七、我らは奧義を解き。パウロの使命は神の靈が示す神の秘義であつて、此の世は唯だ世の靈を有するに過ぎない。故に此の世に對しては神の智慧は『神秘的』に示され、隠れた智慧として放任せられる外はない。即ち隠れたる智慧にして神の智慧は『神秘的』に示され、隠れたる智慧として放任せられる外はない。奧義は全く人智に超越した教義を指すの我らの光榮のために世の創の先より預じめ定め給ひしものなり。奧義は全く人智に超越した教義を指すのではない。神の思召に由つて隠されてゐたが今は僅かな人たちにばかりではなく凡ての人に啓示せられる眞理を指す。其の眞理、即ち其の贖罪の賢明な計畫は此の世が創まる前から廻ぐらされてゐた所である。而して其の贖罪の中に靈的の性質、靈的の體を示して我らの人間の性質を完全に顯現する榮光が示されると。基督こそ人間の隠れた榮光の顯現したものである。八、此の世の司には之を知る者なかりき。此の世を支配する者、其の指導者たちは彼らの支配する世を取扱ひ給ふ神の計畫と手段とには憐れにも全く無智なことを示した。政治にせよ、思想にせよ、其の指導者は同様である。若し知らば榮光の主を十字架に釘けざりしならん。『榮光の主』は其の地上の生活に於て、更に又天上にあつて、我らの榮光を宿される主である。パウロを救はんがために顯現し給ふたダマスコ途上の主は彼の暫くも忘れることの出来ない所であつたらう。彼らは其の基督を知らなかつたからして十字

架に釘けた。カヤバもサンヒドリムもピラトもロマ法廷も彼らの前に立ち給ふ主耶穌の榮光輝く御姿を聊かも知らなかつた。それを知ることが出来たら十字架に懸ける筈がなかつた。九、神の己を愛する者の爲に備へ給ひし事は、眼未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心未だ思はざりし所なり。此の引用が若し舊約から出てゐるとすれば甚だ自由之を取扱つたものでイザヤ六十四の四と六十五の十六、十七の綜合であると言ふ人もある。ジェロウムは『イザヤの昇天』及び『エリヤの黙示録』にあると言ふけれども其の年代が確定してゐないので臆測に過ぎまい。要するに現在未來兩様の祝福で、基督者が基督に在り、基督に由りて受ける又將來受くべき凡ての祝福を指す。單に天上の祝福のみではないと。十、然れど我らには神これを御靈によりて顯し給へり。基督教の出現を指す。即ち世界の歴史に新時代が始まつた出來事としての基督者に與へられた默示である。御靈は凡ての事を究め、神の深き所まで究むればなり。御靈は人間と神との間の相互の理解を與ふる機關である。『神の深き所』は神が之を人間に示し給はねば究めることを得ない。『その途は尋ね難い』(ロマ十一の三十三)がそれに由つて神は人間の性質を超越して己に之を召される。斯くの如きは人間が靈的になつたとき、即ち信するに由つて神の御靈に觸れるに至つたときに啓示せられる事柄である。十一、それ人の事は己が中にある靈のほかには誰か知る人あらん、斯くの如く神のことは神の御靈のほかには知る者なし。人間の中では其

の人の問題は其の人のうちにある靈の外に誰が知らうか。神の事も亦神の靈の外に知り得るものはない。親密至極の人、其の隣にゐる人でも何故に我らが笑ふか哀しむか其の原因を半分も知り得ない。神の内的意識も此れと全く同様の領分にある。斯く神の御靈が神の思想を知らしめ給はねばならない。然らずば我らは到底神に就いて知り得べくもない。十二、我らの受けし靈は世の靈に非ず、神より出づる靈なり。我らが始めて信仰を以て神に信賴するに至つたときに受けた靈は、此の世が神を發見し得ないで自ら満足してゐる智慧から出る靈や傾向ではない。基督者ならざる此の世の司の靈ではない。神から出づる靈は、自然のまゝ、明かにし得るものとは異つたものに對する知識を與へんがために、他の方面から我らを訪れる。是我らに神の賜ひしものを知らしめん爲なり。理性の作用はたさに由つて知ると言ふよりも直ぐ思ひ當らしめる意味。御靈が我らに示すものは、見るべきものが目の官能に明かなやうに我らの靈に明快に示されると。十三、御靈の教ふる言を用ふ、即ち靈の事に靈の言を當つるなり。『パウロは其の思想と同様彼の言は御靈に由つて彼に教へられたと斷言し、彼は或る意味に於て 逐語ヴァベルインスベレエン神授を主張する』(フキンド)。人間の哲學は神の途を知り得なかつたやうに、哲學から出た推論は調和しない。靈的事實は靈的推論を以て始めて之を明かにし得る。哲學は哲學で、十字架には別の用語があると。十四、性來のまゝなる人は神の御靈のことを受けず、彼には愚なる者と見

ゆればなり。其の知覺作用が動物の創造と共通な性狀の一部たる知識の領分以上に出ない人は御靈のことに到達することは出来ない。此所で『動物』と言ふのは禽獸の意味ではなく、ユダ十九の『情慾に屬し』と言つてゐる人間の部分を指す。また之を悟ること能はず、御靈のことは靈によりて。此れと前句對照は日本語に譯して『靈魂』と『靈性』と言ふ區別になるのであるが、ヘブル語の『靈魂』と『靈性』とは心理的に異つたものではないが、『靈魂』は主として造られた人間との關係、『靈性』は創造の神との關係を指す。更に精神的と靈的とも區別せらるべきで、精神的と言へば知識や研究や推論の結果を指し、靈的の能力は克己、謙遜、神との交際、神と人との愛から生ずる。斯くて御靈の事を辨ずるのは其の靈性の方面である。十五、されど靈に屬する者は凡ての事を辨ふ。『福音は其の本質に於て理論でも抽象でも自省でも想像でもない。歴史的である。然し其の歴史は神の歴史である。福音の宣傳は神の行動である。信仰が明かに生じたとき、そのときにだけ神の行動は教會の會員の間に理論や研究の題目となり得る。そのときに至つてのみ全體の研究が信仰から出發する。斯くの如き研究では信仰は決して其の研究の結果として起るのではない』(オルシヤウゼン)。而して己は人に辨へらるることなし。アテネの哲學者のやうに始めにそれを聴いても彼らは之を鑑定する機關を有してゐない。靈的でない者は宗教の批評には全く門外漢である。『スクテヤの野蠻人に數

學、駱駝に音樂である』(テエラア)。十六、誰か主の心を知りて主を教ふる者あらんや。此所では『心』と『靈』との間に區別が設けられない。以上の論旨をイザヤ四十の十三を引用して強調するのである。曰く『誰かエホバの靈(心)を導きてその議士となりて教へしや』と。即ち信仰なきイスラエルや偶像禮拜者に對して皮肉に彼らの尺度でエホバの智慧や攝理を計量する態度を中止せよと警告した句である。然れど我らは基督の心を有てり。信者の外に誰も主の心を有してゐるものなく、何人も主を凌ぐほどの知的優越性を有すると思ひ上がり得る者はないからして前句の主張が明快となる。『靈的』の人たる我らは主の心を有するが故に其の心を有しない人から批評を受けることの出來ない領分にゐると言ふ。尙ほパウロは舊約の『エホバ』を巧妙に『基督』と置き替へて其の間に聊かも區別をしてゐない。我らが神を知るは基督に由つてであつて『神の靈』も『基督の靈』も同一である。

第三章

コリント人の肉の品性と黨派心 一一九

一兄弟よ、われ靈に屬する者に對する如く汝らに語ること能はず、反つて肉に屬するもの、即ちキリストに在る幼兒に對する如く語れり。二われ汝らに乳のみ飲ませて堅き食物を與へざりき。汝等そのとき食ふこと能はざりし故なり。三今もなほ食ふこと能はず、今もなほ肉に屬する者なればなり。汝らの中に嫉妬と紛争とあるは、これ肉に屬する者にして世の人の如くに歩むならずや。四或者は『われパウロに屬す』といひ、或者は『われアポロに屬す』と言ふ。これ世の人の如くなるにあらずや。五アポロは何者ぞ、パウロは何者ぞ、彼等はおのおの主の賜ふところに隨ひ、汝らをして信ぜしめたる役者に過ぎざるなり。六我は種を、アポロは水灌げり、されど育てたるは神なり。七されば種うる者も、水灌ぐ者も數ふるに足らず、ただ尊きは育てたまふ神なり。八種うる者も、水灌ぐ者も歸する所は一つなれど、各自おのが勞に隨ひて其の値を得べし。九我らは神と共に働く者なり。汝らは神の畠なり、また神の建築物なり。

パウロは進んでコリント教會の弱點の急所に刀を加へた。彼に對してコリントの教會では其の説教が單純であると嘲けるものがあつたので、彼は彼らに其の資格がなかつたからであると言ひ、彼らが如何にも頓馬で、靈的だと考へられなかつた。彼らは全く肉慾の動物であつた。基督にあつては乳兒、乳の外は飲ませられなかつた。それは其の不純な争が何よりの證據である。パウロもアポロも教義を實せば同じもので使用人に過ぎない。兩者の働は神の事業に僅かに貢獻するにあつた。

故に讚美は悉く神に歸すべきであると言ふ。

一、我靈に屬する者に對する如く汝らに語ること能はず。パウロは始めて二の一—五の問題に歸る。尙ほ前項に於てパウロは靈的の啓導を受けたもの、智慧は優越してゐることを繰返して陳べた。然るにコリントの教會の大多數はその態度では教へられない。彼らは畢竟基督教生活の戸口にうろつく者に過ぎないと。基督に在る幼兒。靈的に言ふと宛然幼兒で、基督者としての彼らの新しい性狀は其の古い性狀のために壓服せられてゐると。二、我汝らに乳のみ飲ませて堅き食物を與へざりき。教義中の單純なものと進歩しなければ理解出来ないものとの對照である。『テサロニケ前書はロマ書やコロサイ書の營養食に比べれば乳である。第四福音書の固形食に比べれば共觀福音者は乳である』（フキンド）。三、今も尙ほ食ふこと能はず。今日までの彼らの經驗を以てしては基督教の眞理の深い所は理解が出来ないと。今も尙ほ肉に屬する者なればなり。肉は『生來のま、』よりも強い意味で、肉慾に囚はれてゐると言ふのである。即ち肉情から出る感覺にのみ熱中してゐるのが彼らであつた。四、我パウロに……我アポロに。前に掲げた黨派を擧げず、何故二つだけを掲げたか、それは其の一例として二つの黨派を描けば足りると、此の兩派が騷擾の中心であつたのと、自分の弟子で友人として親しいアポロの名は自由に掲げられるが、ケパの名は此の争論の際遠慮したものであらう。

これ世の人の如くなるにあらずや。聊かも信仰の特別な權能である再生の生活は見えず、神に屬するものを有しない純然たる人間的ではないか。五、各主の賜ふ所に隨ひ……役者に過ぎざるなり。彼らは各特別の賜物を神から與へられた僕に過ぎない。其の賜物の問題は第十二章に細論する。使徒たる傳道者は何れも役者、即ち『基督の役者』である。此の原語には『賤しい者』との意味が含まつてゐる。六、されど言てたるは神なり。兩者は播種と灌水に當つたとは如何にも美しい關係である。餘事ながら前者が種ゑた苗を引き抜いて惡口を言ふ傳道者が少くない。兎も角どれだけ人の能力の限りを盡しても、其の育つには神の能力が加はらねばならない。近頃隱退して農業に日を送る講者の知人である前大學教授某老博士は基督者ではないが、一日つくづく嘆息して曰く『百姓の何んと言つて人間の努力は十分の一に當りません。勿體ないと思ひます。作物の出来るのは九割、いや、それ以上も全く神様の御力です』と。傳道は勿論の事である。七、唯だ奪きは育てたまふ神なり。背後にそれを育て給ふ神なくば種うる者も水灌ぐ者も何の功ぞである。老博士の述懐の通りである。八、歸する所は一つなれど各自各が勞に隨ひて其の値を得べし。基督の役者は基督の前には何の價値もなきも、其の教會に對しては『一つ』で虚榮や行違ひがあるべき道理がないと。唯だ異なる所は其の責任と褒賞とである。此の世に於ける勞働の分量の割合は異つてゐて、其の褒賞も異なる。其の才能を極力行使

すればよいのである。マタイ二十五の十四—二十、ルカ十九の十一—二十八の主の譬に言ふ『タラント』や『ミナ』の例に見える。九、我らは神と共に働く者なり、汝らは神の島なり、また神の建築物なり。今度は見方を換へて言ふ、人間の側から見れば福音の宣傳者は神の御手にある單なる機械である。然し神の側からはさうは取扱はれない。神は其の行動に従つて神に對する責任を負ふべき者に取扱はれる。然し其の結果は依然神に屬し、神のみのものである。基督の役者は神との共同者となれるけれども、其の島も其の建築物も神のもので、彼らのものではないと。

礎石と其の上の建築の責任

十一—十五

十我は神の賜ひたる恩恵に隨ひて熟練なる建築師のごとく基を据ゑたり、而して他の人その上に建つるなり。然れど如何にして建つべきか、おのおの心して爲すべし。十一既に置きたる基のほかは誰も据うることを能はず、この基は即ちイエス・キリストなり。十二人もし此の基の上に金・銀・寶石・木・草・藁をもつて建てなば、十三各人の工は顯るべし、かの日これを明かにせん。かの日は火をもつて顯れ、その火おのおのの工の如何を驗すべければなり。十四その建つる所の工、もし保たば値を得、もし其の工、焼けなば損すべし。十五然れど己は火より脱れ出づる如くして救はれん。

パウロは農業の比喩から建築に移る。彼は既に神の聖殿の建築に使役せられて其の分を盡した。其の基礎を据ゑるのが、彼の職分であつたが、それを彼は忠實に行つた。この基礎の上に如何なる建築をするかゞ問題である。耐火の材料を以て造り、最後の審判の試験にも無事であることを得るか、或は木草藁を以て建築して猛火に襲はれつゝ、亡びるか、コリント人は既に基礎を與へられながら飛んでもない材料で其の上層を建築しやうとしてゐる。彼らにして『火より脱れ出づる材料』で建築しなかつたら其の生命は危険であると。而して唯一の材料はパウロの築いた耶穌基督の上に彼らの救を確保すべき信仰を築くべきであると。

十、我は神の賜ひたる恩恵に隨ひて熟練なる建築師のごとく基を据ゑたり。凡ての事は神に屬するとの思想。其の恩恵はパウロをして教會の創立者、使徒たらしめた恩恵である。彼は十字架に釘けられ給ひし基督なる基礎工事の上にコリント教會を創立した（二の二）。ルカ六の四十九に譬へて『基なくして』建てた人と異り、其の基礎工事に用意周到な點で熟練の建築師のやうに忠實精巧に働いた。他の人其の上に建つるなり。アポロや其の他彼の繼承者は其の上に建てるのである。然れど如何にして建つべきか、各心して爲すべし。基礎は唯だ一つであるが、其の基礎の上には色々建築法があり、又材料がある。十一、既に置たる基のほか誰も据ゑること能はず。使徒としての創立者の事業は既に遂げ

られた。それは一度であつて永遠に行はれたもので、教會が續く限り人は其の基礎の上に建築せねばならない。この基は即ち耶穌基督なり。其の基となるものは基督に就いての教義でもなく、推論でもない。『耶穌』が啓示せられ、『基督』として承認せられた歴史上の一人格である。勿論耶穌基督と言ふ人格のうちにはその生涯、その死が含まれてゐる。十二、人若し此の基の上に金、銀、寶石、木、草、藁をもつて建てなば。『金、銀、寶石』は堅牢で且つ貴く、宮殿の材料であるが、『木、草、藁』は朽つべきもので『むさ苦しい小屋』の材料である。十三、各人の工は顯るべし、かの日これを明かにせん。大麥と毒麥は蒔かれた始めには其の區別が出来ない（マタイ十三の二十四以下）。一人の事業は他の人の事業と混同してゐるが、然し基督の審判の日にそれが示されるであらう。暗にこそ隠れてゐられるが、太陽と共に日中が到來しては隠されぬ。かの日は火をもつて顯れ、その火各の工の如何を驗すべければなり。其の日は火を以て顯されると言ふ。審判の日は火がそれを示す。火は即ち燃ゆる棘の中や、シナイ山上に示された通り主のいまし給ふ象徴であると同時に、各人がどんな工事（行爲）をしてゐるかを驗すのに用ひられる。十四、その建つる所の工、若し保たば値を得、もし其の工、癩けなば損すべし。兩様の『工』の性質を擧げてないけれども、其の工の如何に由つては、それが褒賞を與へられ、或はそれが損はれると言ふ。十五、然れど己は火より脱れ出づる如くし

て救はれん。『パウロ自身の経歴が、神の御前から失はれても、まだ充分な啓發を受けない良心により最高の奉公と信じて行動する人を神は罰し給はないであらう。其の事業は損する、然し實際は何の事業も行つてゐない場合でも、自らは神に事へてゐると信じてゐるものは外の暗きに投げ出されないのであらう』(リイアス)。『眞摯な者は教義を離れることはない。人を救ふ。其の事業は亡びても、其の人は承け容れられる』(ロバアトソン)。

神の宮を傷ふ禍

十六、十七

十六 汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御靈なんぢらの中に住み給ふを。十七 人もし神の宮を毀たば神かれを毀ち給はん。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。

神の建築と言つたが、基督者は更にそれ以上のものである。即ち神の宮で、御靈として神は其の聖所に住み給ふ。其の宮を傷ふことは神を傷ふことに當ると。

十六、汝ら知らずや、汝らは神の宮にして神の御靈汝らの中に住み給ふを。此の句でパウロは教會の建築の思想から、個人が神殿であるとの聯想を浮べて直ぐそれに移つて言ふ。幕屋の至聖所の中には神の住み給ふことを象徴する輝ける雲がたなびくとせられ、後年のユダヤ人はそれをシエキナアと稱

た。基督教會のシエキナアは聖靈であつた。而して聖靈は基督者各個人のうちに住み給ふ(ロマ八の九、十)。従つてその集合的の團體のうちにあつては、其の原則に於て、又漸次に罪を離れて神へと彼らを伴ふのである。十七、人もし神の宮を毀たば神彼を毀ち給はん。原語は日本の歌のやうに韻を踏んだもので、其の罪惡に對して等しい刑罰が與へられると言ふ。それ神の宮は聖なり、汝らも亦かくの如し。幕屋と神殿に用ひられた『聖』なる語を用ひる(ヘブル九の一—三)。其の神殿同様に汝らも聖であると。『汝らは神の宮なり』と言つても『汝らは聖なり』と言つても其の結論は同様となる。故に汝らは『毀たれてはならない』と言ふ。神には其の宮を保護される責任があると。

争闘者に對する警告

十八—二十三

十八 誰も自ら欺くな、汝等のうち此の世にて自ら智しと思ふ者は、智くならんために愚なる者となれ。十九 是は此の世の智慧は神の前に愚なればなり。録して『彼は智者をその惡巧によりて捕へ給ふ』二十 また『主は智者の念の虚しきを知り給ふ』とあるが如し。二一 さらば誰も人を誇とすな、萬の物は汝らの有なればなり。二二 或はパウロ、或はアポロ、或はケバ、或は世界、あるひは生、あるひは死、あるひは現在のもの、或は未來のもの、皆なんぢらのものなり。二三 汝等はキリストの有、キリストは神のものなり。

知識を誇張する人々は審判の日の悲惨な立場へ行かうと其の準備に懸命となつてゐる。而して尙ほ現在でも損失を免れない。智慧に自惚れるほど愚かなことはない。神は必ず之に耻を與へられる、黨派の精神も其所から生じ、彼らの宗教を偏頗なものとする。コリントの教會員が特殊の教師にのみ随従したとき、其の教師が傳へる利益だけより受けられなかつた。然しどの教師も畢竟は主の註解者に過ぎない。而して其の註解は最善の場合でも、其の一部分である。パウロに屬する者は、彼の與へるものだけを授けられ、アポロに屬する者は、彼のものだけを與へられ、ケバに屬するものも同様である。唯だ基督に屬すれば其の全體を受け、更に其の賜物は無限である。

十八、誰も自ら欺くな。汝等のうち此の世にて自ら智しと思ふ者は智くならんために愚なる者となれ。教會の間にあつて自ら『世の智者』であると妄想し、其の批評眼の鋭いことを自惚れつゝ、教師を選定してその黨派を以て任じた、斯くの如き妄想した智慧を棄てよと。十九、そは此の世の智慧は神の前に愚なればなり。基督教の智慧に富まんと欲するものは其の時代々々の哲學を棄てねばならない。此の世の智慧は神に取つては愚だからである。従つて教會の中に於ては智慧にあらず、愚と認められねばならない。彼は智者をその惡巧によりて捕へ給ふ。『慧き者をその自分の詭計によりて執へ、邪なる者の謀計をして敗れしむ』(ヨブ記五の十三)からの自由の引用である。二十、主は智者の念の虚しき

を知り給ふ。『エホバは人の思念のむなしきを知りたまふ』(詩篇九十四の十一)の引用。以上の兩句は、此の世の詭計を廻ぐらす者が自ら此の上もなく巧妙だと考へてゐると攝理は彼ら自身の手を借りて彼らを捕へられると言ふにある。二十一、さらば誰も人を誇とすな、萬の物は汝らの有なればなり。例令ば一の十二の如く『我はパウロに屬す』と言ふやうに人を崇拜するな。神が其の存在を許し給ふ萬物と同様、皆神の目的を成就する機關に過ぎないと。二十二、或はパウロ、或はアポロ、或はケバ、或は世界、或は生、或は死、或は現在のもの、或は未來のもの皆汝らの有なり。前節の『萬の物』のうちには勿論教師たちも含んでゐる。汝らは彼らのものではない。彼らは皆悉く汝らのもので、更に進んでは物質界の全體も、汝らが生きても死んでもそれは汝らのために益であつて、時間も亦汝らの僕として汝らに事ふべきものである。汝らは基督の有、基督は神のものなり。汝らは基督のほか者にも屬せず、基督は神の外何者にも屬し給はない。即ち萬物の所有者は基督者であるが、然し基督者は又基督を通じて神に屬すべきものであると言ふ。

第四章

主のみ其の僕の唯一の審判者 一一五

一人、宜しく我らをキリストの役者また神の奥義を掌どる家司のごとく思ふべし。二さて家司に求むべきは忠實ならん事なり。三我は汝らに審かれ、或は人の審判によりて審かるゝことを最小き事とし、また自らも己を審かず。四我みづから責むべき所あるを覚えねど、之に由りて義とせらるる事なければなり。我を審きたまふ者は主なり。五然れば主の來り給ふまでは時に先だちて審判すな。主は暗にある隠れたる事を明かにし、心の謀計をあらはし給はん。その時おのおの神より其の譽を得べし。

教師は『神の奥義を掌どる家司』である。従つて其の執行する職分に責任のあることは申すまでもない。然し其の責任は天に在ます彼の主人に對して負ふのであつて、その主人にのみ事へる。人間の審判には大した價值はない。パウロの求める所は自己の豫測によらず、唯だ耶穌基督の審判を待つのみである。

一、人宜しく我らを基督の役者、また神の奥義を掌どる家司の如く思ふべし。三の五の『役者』は奉仕の意味であるが、此所の『役者』は從屬する意味である。『神の奥義』は今神から啓示せられる秘義。

『家司』は他の僕同様の奴隷ではあるけれども、他の僕に食物を分配する役を勤める信任の厚い地位である。此所では教會を家族に譬へたものである。二、さて家司に求むべきは忠實ならん事なり。『主人が時に及びて僕どもに定の糧を與へさする爲に、その僕どもの上に立つる忠實にして慧き支配人は誰なるか』(ルカ十二の四十二)と相應する。『さて』は『たゞそのみではなく』と原語にはある。

單に家司であるだけでは充分ではない、第一に忠實な人物でなければならぬ。三、我は汝らに審かれ、或は人の審判によりて審かるゝことを最小き事とし、また自らも己を審かず。パウロはコリント教會のために或は其の才能を推賞せられ、其の動機を臆測せられ、其の行政は色々に不当な自惚で攪亂せられてゐる。恰かも裁判を受けてゐるやうなものである。パウロの恐れるのは主から受ける審判で、コリント人の判断や推定や、自分の良心の判断さへも重きを置かないと言ふ。四、我自ら責むべき所あるを覚えねど之に由りて義とせらるることなければなり。汝らに對する基督の僕として自ら何の弱點があるものとも意識しない——即ち汝らの側から裁判されるやうなこともない筈で、自分の方も自ら咎めることはないが——然しそれを基礎にして自分は正しいとは聊かも認めてはゐない。我を審き給ふ者は主なり。汝らでもなく自分の良心でもない自分は更に純潔にして更に高い眼で検査をされてゐると。五、然れば主の來り給ふまでは時に先だちて審判すな。『汝ら人を審くな、審かれざらん爲なり』(マタイ七の一)。「審く考をするな、我らは他の心の奥を知らないからである。我ら

は其の天稟や、自分の特質に合ふか、否かに由つて人を審判する。然し神は誠實如何に由つて審判し給ふ』（ロバートソン）。主は暗にある隠れたる事を明かにし、心の謀計をあらはし給はん。教會は神の畑で又神の神殿である。その中の事業は皆基督の承認を経べきもので、基督の賞讃のみが價值がある。そのとき各神より其の譽を得べし。パウロは心に基督の日に彼と事業を共にした人々、又自分の勞働が承認を受けることを信じ、一時の批評に堪えつ、斯う考へてゐたであらう。

彼らの自負とパウロ及び其の伴侶の謙讓

六一三

六兄弟よ、われ汝等のために此等のことを我とアポロとの上に當てて言へり。これ汝らが『録されたる所を諭ゆまじき』を我らの事によりて學び、この人をあげ、かの人を貶して誇らざらん爲なり。七汝をして人と異らしむる者は誰ぞ、なんぢの有てる物に何か受けぬ物あるか。もし受けしならば、何ぞ受けぬごとく誇るか。八なんぢら既に飽き、既に富めり、我らを差措きて王となれり。われ實に汝らが王たらんことを願ふ、われらも共に王たることを得んが爲なり。九我おもふ、神は使徒たる我らを死に定められし者のごとく、後の者として見せ給へり。實に我らは宇宙のもの、即ち御使にも、衆人にも、觀物にせられたるなり。十我等

はキリストのために愚なる者となり、汝等はキリストに在りて慧き者となれり。我らは弱く汝らは強し、汝らは尊く我らは卑し。十一今の時にいたるまで我らは飢え、渴き、また裸となり、また打たれ、定まれる住家なく、十二手づから働きて勞し、罵らるるときは祝し、責めらるゝときは忍び、十三譏らるるときは勸をなせり。我らは今に至るまで世の塵芥のごとく、萬の物の垢のごとく爲られたり。

若しパウロが人間の審判を氣にしないと云ふならば、何故彼とアポロの關係を明かにして、彼らの批評に答辯するのかとコリント教會員から嘲られるかも知れない。故にアポロと己とを引合に出すのは、其の間にコリント人の批評を前にして彼らの虚榮を戒め、健全な靈的の立場に伴ひ返さうとするのであつて、彼らが自惚れてゐる、其の天の賜物は神から授けられたもので、決して誇るべきものでなく、感謝の心を起すべき筈のものであると言ひ、抉ぐるやうな皮肉な諷刺を以て基督のために使徒たちが如何に迫害せられ、困苦辛慘の境遇にあるかを彼らの自惚と對照して戒めるのである。

六、我汝らのために此等のことを我とアポロとの上に當てて言へり。『例令ば我とアポロの間の問題を以て見ても』と言ふのであらう。アポロ黨、パウロ黨と言ふのがそれほど際どくはなくとも尙ほ存在したもので、更にユダヤ教的教師の側に立つもの、間には黨派の精神が一層強かつたであらうが、

パウロはそれを言外に含めて警告する。アポロと彼との教理の間に、實質的な相違は何もなかつたことが悟られる。この人をあげ、かの人を貶して誇らざらん爲なり。一方の人を貶するために、一方の人を喝采し、一方を褒めんがために一方を貶するやうなことをするなど。それをアポロとパウロの間の關係で學んで注意しろと言ふ。七、汝らの有る物に何か受けぬ物あるか。此の句を以て神からの賜物と解するのは前後關係で不可能であると言ひ彼らの有するものは皆彼らの爲に努力した人々の賜物であると解すべしとマツシイは言ふ。然しフキンドレイ始め皆斯く解し、デビッド・スミスも斯く解してゐる。之を受けたものはさながら、自分のものであるやうに誇つてはならない。之は神の授けた賜物ではないかと。八、我らを差措きて王となれり。彼らを其の地位に置いた神を忘れ、彼らが傳へられた其の恩人を差措いてコリントの知識階級は自惚で一杯となり、富且つ王の權威を有してゐると皮肉に言ふのである。我實に汝らが王たらんことを願ふ、我らも共に王たることを得んが爲なり。

『若し汝らを基督教化して汝らを高めた我らが、それほど下劣なものならば、それ以上汝らが進む餘地なく、人間の極を究めて王者として自ら任ずる、汝らはどうして其の高さに登れたかと言ふ』(マツシイ)。『汝らは確かに神の國に入つたに相違はない、其の實を得たに相違はない。若しそれ以上に家司が汝らに授けるものがないとすれば、その通りであらう。私もさうであれかしと念ずる

……然し私も、其の御國に汝らと共に入らんことを冀つてゐる』(フキンド)。九、我おもふ。私にはさう言ふやうに受取れると。神は使徒たる我らを死に定められし者の如く後の者として見せ給へり。パウロは遁れんとして遁れることの出来ない苦境に神から導かれたものと考へると言ふ。神は其の祭禮の日に闘技場に入場する行列の一番後ろに罪人が當日の觀世物として罰せられるため曳かれて行くやうに、死刑囚としてパウロたちを其の闘技場へ引き出され、天使や衆人が其の悲痛な状態を眺めてゐると言ふのである。此れはコリントに程近き『地峽競技』から思ひ付いた譬であらう。コリントの此の競技は有名なものでネロ皇帝も臨場したことがある。十、我らは基督のために愚なる者となり、汝らは基督に在りて慧き者となれり。基督の教を傳へんがために愚かなものとなつたと言ふ。世の眼から見れば愚劣極まるものとなつた。然るに汝ら云々。『此所の「基督に在つて慧きもの」とはよい意味で言ふのではない。それはパウロが基督と肉の智慧を混同し、全く反對のものを契合せしめやうと努力してゐることを嘲つてゐるので知れる』(カルヅキン)。我らは弱く汝らは強し、汝らは強く我らは卑し。彼らは自惚れてゐるやうに言ひ回はす、偶像に献けたものを食はないと用心する弱い兄弟を顧みない強さを彼らは有した。汝らは強く我らは卑し。『汝ら』と『我ら』の順序を變へたのは『卑し』の下が尙ほ續くからである。コリント教會は此の世と交歡する危険があつた。『強

く、尊い』のが當てにはならない。『尊い』とする彼らの父は決して世の中に重んぜられる境遇の人々ではなかつたものが尊ばれる願望に驅られる。十一、今の時に至るまで我らは飢ゑ云々。貧乏、困窮の極、即ち赤貧洗ふが如く、飢ゑ、渴き、また裸であつた。『打たれ、定まれる住家なく』はパウロの傳道の如何にも艱難辛苦に満ちたものであつたかを示す。即ち彼の生涯は他の尊敬を得るに足らず、侮辱と輕蔑とに満ちたもので、ギリシヤ紳士とは似ても似着かぬものであつた。十二、手づから働きて勞し、罵られるときは祝し、責めるときは忍び。支那や日本と同様、ギリシヤやロマに於ては手足の勞働は輕蔑せられた。パウロは晝間傳道の餘暇を得んがために夜間に勞働した。(テサロニケ前書二の九)。侮蔑に對しては世の人々の如く更に復讐もせず、意地の悪い取扱ひや言ひ回はしに對しても憤んで相手の幸福を冀つた。十三、護られるときは勸をなせり。惡口、雜言に對しては忍ぶのみならず、更に進んで其の相手の幸福となるやうな忠言を與へた。我らは今に至るまで世の塵芥の如く、萬の物の垢の如く爲られたり。世が迫害するのみならず、凡ての人に嫌はれ、凡ての人に侮蔑せられ、木の端か、汚れ物かのやうに取扱はれたと。

信仰の父としての訓誨

十四—二十一

十四 わが斯く書すは汝らを辱かしめんとにあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。十五 汝等にはキリストに於ける守役一萬ありとも、父は多くあることなし。そはキリスト・イエスに在りて福音により汝らを生みたるは、我なればなり。十六 この故に汝らに勸む、我に效ふ者とならんことを。十七 之がために主にありて忠實なる我が愛子テモテを汝らに遣せり。彼は我がキリストにありて行ふところ、即ち常に各地の教會に教ふる所を汝らに思ひ出さしむべし。十八 わが汝らに到ること無しとして誇る者あり。十九 されど主の御意ならば速かに汝等にいたり、誇る者の言にはあらで、その能力を知らんとす。二十 神の國は言にあらざ能力にあればなり。二一 汝ら何を欲するか、われ答をもて到らんか、愛と柔和の心をもて到らんか。

筆の進むまゝ、に一氣にコリント教會員の自負心に切開の手術刀を加へるや否や、彼は愛子を懲す父の憐憫の情が忍びないまでに胸に込み上げて來たであらう。彼は彼らの父であつた。従つて彼の後に彼らの間に幾人忠實な傳道者があつても彼の關係と競争は出來なかつた。彼の嚴格な訓誨も畢竟は父であればこそであつた。故にその教訓を彼らが思ひ起さんがために他の愛子、彼らにも舊知のテモテを遣はすと。自分が親しく行けないのは遺憾であるが、それは反對者の流布してゐるやうに氣遅れがしてゐるためではない。自分は神の能力に溢れてゐる。然し友情を以て親しい穩やかな態度で互に相會したいのが希望であると。

十四、我が斯く書すは汝らを辱めんとにあらず、我が愛する子として訓戒せんためなり。前項の目的が誤られる虞がある。故に彼とコリント教會との間の相互関係を言ふのである。彼の目的は彼らを非難するためではない。其の生活の改革を爲さしめるためである。十五、汝等には基督に於ける守役一萬ありとも、父は多くあることなし。リイアスは耶穌の御言が其の精神にあると言ふ最も適當な例であると言ふ。それは『地にある者を父と呼ぶな、汝らの父は一人、即ち天に在ます者なり』（マタイ十三の八）。然るに此所ではパウロは自ら『父』を以て任じてゐる。蓋し耶穌の御言は萬の物の源たる『神』を忘れる精神からは『父』と稱してはならないと仰せられたのである。此所でパウロは、そは基督耶穌に在りて福音により汝らを生みたるは我なればなり。耶穌基督が彼のうちに住み給ひ、彼の事業は神の事業であると言ふ。ラビの論文『サンヒドリム』に曰く『その友の子に律法を教ふる者は、之を産みたるに等し』と。十六、この故に汝らに勸む、我に效ふ者とならんことを。彼は似而非謙遜ではない。眞の福音に就いては自覺があつた。彼の良心は彼が其の主の召命指令に對して正直に努力した點で疚しくなかつた。その例に倣へと言ふ。十七、之が爲に主にありて忠實なる我が愛子テモテを汝らに遣はせり。即ち其の父に倣ふ子として彼らに示すべきテモテを送ると言ふ。パウロは各地を巡回して陸路コリントに行かうとしてゐるので、海路を直航して彼よりも先に着く計畫で

テモテを送つたのであらう。彼は我が基督にありて行ふ所、即ち常に各地の教會に教ふる所を汝らに思ひ出さしむべし、パウロが行ふ所がどんなものかは書翰よりも、テモテの人格に於てそれが示されるであらう。パウロやテモテが各地の教會で行ふ所でコリントの教會が思ひ起さねばならないことは、異邦人の傳道に示さるべき共通のものがあつたであらう。十八、我が汝らに到ることなしとして誇る者ありパウロが來ずにテモテが來ると言ふ噂を聞いてか、或は長くパウロが訪れて來ないのを楯に取つて他の教師たちの名を以て自稱する徒黨のものか或は知識に誇つて自ら指導者を以て任じてゐる連中が、『それ見ろ、パウロに來る勇氣があるものか』と言ふので、傍若無人の態度を取つたものと思はれる。十九、されど主の御意ならば速かに汝らに至り、誇る者の言にはあらで、その能力を知らんとす。半面に御意でないと信じて其の訪問を見合せてゐる意味がある。彼らが如何に哲學的な教理であると外觀に得意となつてゐても、神の國の發展にどれほどの能力があるかを一つ實地に其の價值を調査してやらう、其の馬脚は直ぐに露せるとの意味を含んでゐるやう。二十、神の國は言にあらず、能力にあればなり。神の國は如何なる教義で之を築くかと言ふ議論ではない。其の形の據つて來る靈的の能力の如何である。二十一、答……か……愛と柔和……か。パウロは頑迷なコリント教會員に對して止むなく斯う言ふのである。彼が訪ねて行つたとき尙ほ其の改革が行はれてゐなければ、答と同様な嚴

重の懸合をしなければならぬこと、ならう。若し忠告の通りに改革されてゐたらば隔意なく愛と柔和とで相應待することが出来るであらうと。それは全く其の子に對する父の態度で、惡を懲しそれが改まれば抱き上げて慰めると言ひ情熱が漲つてゐる。

自第五章一節

教會員の訓練

至同章十三節

第五章

不倫な教會員の處置

一一八

一 現に聞く所によれば、汝らの中に淫行ありと、而してその淫行は異邦人の中にもなき程にして、或人その父の妻を有てりと云ふ。二 斯てもなほ汝ら誇ることをなし、斯る行爲をなしし者の除かれんことを願ひて悲しまざるか。三 われ身は汝らを離れ居れども、心は偕に在りて其處に居ることく、斯ることを行ひし者を既に審きたり。四 即ち汝ら及び我が靈の、我らの主イエスの能力をもて偕に集らんとき、主イエスの名により

て、五 斯のごとき者をサタンに付さんとす、是の肉は亡されて、其の靈は主イエスの日に救はれん爲なり。六 汝らの誇は善からず、少しのパン種の、粉の團塊をみな膨れしむるを知らぬか。七 なんぢら新しき團塊とならんために舊きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。夫われらの過越の羔羊、即ちキリスト既に居られ給へり、八 されば我らは舊きパン種を用ひず、また惡と邪曲とのパン種を用ひず、眞實と眞との種なしパンを用ひて祭を行ふべし。

先頃の報告によればコリント教會には異邦人の中にも其の類を見ないほどの驚く可き不倫なものが存在するのに彼らは例の自己満足から、それを等閑に附してゐる。然し其の害の及ぶ處はバクテヤの繁殖するよりも甚だしきものがあると彼は言ふ。

一、現に聞く所によれば、汝らの中に淫行ありと。確聞する所によればと言ふ。汝らの中に公然の不倫の行爲があると言ふがと。「淫行」の原語は事件が公然示されてゐる意味がある。その淫行は異邦人の中にもなき程にして。シセロの言ふ所に由るとサツタイアは其の繼子に當るアウリウス・メリヌスと結婚したとある。エージアン海沿岸地方の結婚はロマ法典の下に於けるよりも不仕墮落であつたやうであるけれども、前叙のやうな行爲はギリシヤでも所謂前代未聞である。日本には斯くの如き誘惑と闘ふ女性を中心にした劇がある位で不倫の極と認められてゐた。所謂「犬畜生のあさましさ」

と人間の數に入れなかつた。或人その父の妻を有てりと言ふ。父がまだ生きてゐる間であつたとして後書七の十二を引照する人々があるけれども、そんなことはあり得ない。此れは繼母であつたか、或は父の妾であつたか、何れにしても父は既に世に亡き人であつたであらう。或は又其の關係の出來る前に父が離婚した女であるとの説もあるけれども、「父の妻」とある所からそれは妻（或は妾）の名目のまゝであるものに相違はないから、此れは採用出來ない説である。相手の女が基督者でなかつたことはパウロが一言も挿まないで明かである。二、斯くても尙ほ汝ら誇ることなし、斯かる行爲をなしし者の除かれんことを願ひて悲しまさるか。恐らくコリントの教會中の知識階級は基督者が如何に道德に超越してゐるか、因習に囚はれてゐないかの實例として此の不倫極まる犯罪さへも誇としてゐたものと思はれる。彼らは除名するか、彼の悔改せんことを悲しみ祈る心さへない。三、我身は汝らを離れ居れども、心は偕に在りて其處に居る如く、斯くことを行ひし者を既に審きたり。パウロの體が其所にないからと言つて、其の正邪曲直の眞の判決を誤るものではない。其の洞觀力は肉體が其所になくとも居るときと何の異なる所もない。而してその精神に於ては之を知覺し、且つ道德的の意識が明瞭であると。故に基督敎團體に屬しながら斯くの如き犯罪を爲す者を自分は既に審いてゐると。四、即ち汝ら及び我が靈の我らの主耶穌の能力をもて集まらんとき、我らの主耶穌の名に由りて。此れは三節

の意識と言ふ以上に深い意義がある。彼らが其の犯罪の審判のために集合するときには耶穌基督の靈も偕に在し給ふことは當然で、其の判決には耶穌の靈の感化が及ぶべきである。パウロも亦神が承認し給ふ父親の靈として其の精神は彼らと偕にあり、其の判決に能力を添へると言ふ。彼らが集るのは耶穌基督の名に由つてであるから、マタイ十八の十八の約束の如く「凡て彼らが地にて縛く所は天にも縛ぎ、地にて解く所は天にても解く」を得る所以である。五、斯くの如き者をサタンに付さんとす。是その肉は亡されて、其の靈は主耶穌の日に救はれん爲なり。本節の意義は色々に解せられる。「サタンに付すとは除名を意味する表規で、教會を統治するものは基督である如く、教會の外を統治するものはサタンである。それはアウガスチンの言ふ通りである。我らが教會の交際の中に承け入られたことは基督の保護と防衛の下にある譯で、教會から放逐せられることは其の實サタンの權下に交附せられることで、彼はそれに由つて基督の御國の敵となり追放せられること、なる。「これ肉は」云々とは（其の判決を）柔ける意味から言はれるのであつて、パウロは其の懲らされる人が全く滅亡するためにサタンに付される、或は永久の束縛へと惡魔に付されるためと言ふのでなく一時的の宣告で、又其の戒飭のためであつたらう。救とは靈に對する宣告同様永遠の問題であるが、肉に對する宣告は一時的だからである」（カルヴン）。「人間の刑罰は三つの基礎がある。そ

れは神の怒の表現たること、次は犯罪者の改化還善のためである事、惡の傳染性の爲なる事、即ち少しのパン種の粉は團塊をみな膨れしむる故にである』(ロバアトソン)。「耶穌基督の日云々」は三の十三、四の五、ロマ二の五、十六參照。六、汝らの誇は善からず、少しのパン種の粉の團塊をみな膨れしむるを知らぬか。刑法上で犯罪者の庇護者が共犯同様に取扱はれるのと同じく、道徳上に於ても斯くの如き犯罪者を有しながらそれを自惚の標本にしてゐることは彼らが同じ犯罪の共謀者であると同義である。故に『善からず』である。基督教會内に存在する極めて少量の惡でも之が全體の一つの品位を造ることは後年の教會史に照しても明かである。教會に其の罪惡が潜入してゐるために世人は教會が神の創立し給ふたものであることに反對するに至つた。七、汝ら新しき團塊とならんために舊きパン種を取り除け、汝らはパン種なき者なればなり。過越祭にはパン種のないパンを食つたが、此れがために過越祭には其の家庭から一切パン種を運び出すこと、なつてゐた。由來ユダヤではパン種を悪い意味に譬へる場合が多い。(マルコ八の十四以下、マタイ十六の五以下其の他參照)。パウロは其の習慣を思ひ浮べて斯く言つたのであらう。夫我らの過越の羔羊、即ち基督既に屠られ給へり。基督が其の過越の犠牲となり給ふて後に、其の教會が腐敗すると言ふことは時代錯誤である。基督は過越である。即ち世の基の置かれる前から屠られ給ひし羔は其の型で、基督の血が靈

魂に灑がれるために破壊の天使の厄を免れ、其の肉と血とに養はれて、奴隸の地たるエジプトから脱れ出ることを得るからである。八、されば我らは舊きパン種を用ひず、また惡と邪曲のパン種を用ひず、眞實と眞との種なしパンを用ひて祭を行ふべし。此れも文字のまゝではなく『基督者生活の全行爲を象徴的の品質で示したもの』(マイヤア)。惡徳罪惡の混入しない純潔な行爲で、其の品性は眞實に、其の目的は『眞』の正眞を以て、主の肉と血とを以て教會の永久の祭を行へと言ふのである。

罪ある會員との絶交

九一十三

九われ前の書にて淫行の者と交るなと書き贈りしは、十此の世の淫行の者、または貪欲のもの、奪ふ者、または偶像を拜む者と更に交るなと言ふにあらざ(もし然せば世を離れざるを得ず) 十一ただ兄弟と稱ふる者の中に或は淫行のもの或は貪欲のもの或は偶像を拜む者、あるひは罵るもの或は酒に酔ふもの或は奪ふ者あらば、斯る人と交ることなく、共に食する事だにすなどの意なり。十二外の者を齋くことは我の干る所ならんや、我らの齋くは、ただ内の者ならずや。十三外にある者は神これを齋き給ふ、かの惡しき者を我らの中より退けよ。

パウロの前の書翰が一方禁慾派の人々には異教徒と全く交際するなと言ふやうに解せられ、一方

自由派の人々には斯くの如くせば全く隠遁生活を送るの外なしとの攻撃を受けたものと思はれる。パウロはそれを訂正して唯だ其の訓練と道徳上保健のために會員中の罪あるものと交るなど言ふ意味に過ぎないと言ふ。

七、我の前書にて。前書以前に贈つた書翰で、後書六の十四—七の一に残存する断片であらうと察する註解者がある。此所に掲げたやうな罪惡を有する者どもと食を共にして交際することを避けよと言ふ。十、此の世の云々。教會外の罪ある人々と交歓するなど言ふのではないとパウロは言ふ。改心しない放蕩者との交際を勧めてゐるやうでさへある！此の商業都市には『貪欲者』や『掠奪者』が出るのも自然であつたらう。『偶像を拜む者』此の中には淫行の罪が加へられてゐたことはコリントの宗教を思へば明かである。十一、たゞ兄弟と稱ふる者の中に。兄弟として其の勢力が教會員の一例となるほどに認められた者の中にである。其のうちには十節にあるやうな、或は其の類似の行動のあるものには接近するなど言ふ。『偶像を拜む者』が此の中に數へられてゐるのは妙であるが、當時哲學的で汎神的傾向の人々の中に異教と基督教とを綜合しやうとの企てがあつたものと察せられる。日本に於ても其の類を今も見るのである、昔基督教の大立者として仰がれた先輩の中に儒佛をつき交ぜたか、ゾロアスタアの昔に歸つたかと思はれるやうな宗教を傳へてゐる人を見る。

斯かる例が當時のコリント人の間に存在したものであらう。共に食することだにすな。此れは聖餐を共に食ふなど言ふのではあるまい。食事を共にするなど言ふ意味であらう。十二、外の者を審くことは我の干る所ならんや、汝らの審くはたゞ内の者ならずや。汝らは自分が罪人とは一切交際するなど言つたものと考へてゐるやうであるが、それは全く誤解である。汝らの團體中の會員を言つたのである。汝らの實行してゐる通りそれは基督教會内だけの話で、外部に對しては私には何らの權能もないとパウロは言ふ。十三、外にある者は神これを審き給ふ、然し外部にある者と雖も神の審判は免れることは出来ない。『外にある者』は元來ユダヤ人が會堂外の者と言ふ意味で異教徒を指しての表現であるがパウロはそれをそのまま、未信徒に用ひた。かの惡しき者を汝のうちより退けよ。神の審判は別の問題である。即ち汝の職能はその惡者を教會から除却するにある。自治の精神は斯くして前節と本節とに明かである。教會の外に出しての後の審判は神の御手にある。

第六章

異教徒の裁判に訴ふる不法

一一十一

一、汝等のうち互に事あるとき、之を聖徒の前に訴へずして正しからぬ者の前に訴ふることを敢てする者あらんや。二、汝ら知らぬか、聖徒は世を審くべき者なるを。世もし汝らに審かれんには、汝ら最小き事を審くに足らぬ者ならんや。三、なんぢら知らぬか、我らは御使を審くべき者なるを、況てこの世の事をや。四、然るに汝ら審くべき此の世の事あるとき、教會にて輕しむる所の者を審判の座に坐らしむるか。五、わが斯く言ふは汝らを辱しめんとてなり。六、汝等のうちに兄弟の間のことを審き得る智きもの一人だになく、兄弟は兄弟を、而も不信者の前に訴ふるか。七、互に相訴ふるは既に當しく汝らの失態なり。何ゆゑ寧ろ不義を受けぬかを、何ゆゑ寧ろ欺かれぬか。八、然るに汝ら不義をなし、詐欺をなし、兄弟にも之を爲す。九、汝ら知らぬか、正しからぬ者の神の國を誦ぐことなきを。自ら欺くな、淫行のもの、偶像を拜むもの、姦淫をなすもの、男娼となるもの、男色を行ふ者、十、盜するもの、食欲のもの、酒に酔ふもの、罵るもの、奪ふ者などは、みな神の國を誦ぐことなきなり。十一、汝等のうち曩には斯のごとき者ありしかど、主イエス・キリストの名により、我らの神の御靈によりて、己を洗ひ、かつ潔められ、かつ義とせらるることを得たり。

コリント教會には、更に悲しむべき不道德な事件から怨恨がつのつて遂に爭論を異教徒の地方官に提出した。此れは教會の耻辱の暴露であつた。パウロが此れを憤慨するのは當然である。基督者にあつては互に相折衝する道德の標準が異り、靈性を基礎とすることが其の法律である。不信

の徒を審判者として、兄弟相互の間に其の法を以て相手に勝つことは決して神の前の利益ではないと。

一、汝らのうち互に事あるとき、之を聖徒の前に訴へずして。教會に於ては教會の思想、道德標準で、此れを審理する『聖徒』即ち仲裁者がある筈である。彼らがそれを用ひないのは其の思想、道德標準が基督者として低級なために不満だからであらう。正しからぬ者の前に訴ふることを敢てする者あらんや。然らば何故パウロがロマの國法に訴へたかと言ふ疑問が生ずるであらう。然しそれは彼の私利私慾の爲ではなかつた。彼の傳道事業を防衛するためと、更に他の重大な使命を遂行せんとする希望さへあつた場合だからであつた。此れは『互に事ある』場合ではなかつた。『正しからぬ者』は逆説で皮肉に表現したものである。神の義を知らないものに對して最も正しい問題を審かせる道理はないと。二、聖徒は世を審くべき者なるを。ダニエル七の二十二にあるメシヤの王國の概念から出た句と思はれる（マタイ二十の二十一）。基督と共に眞のイスラエルは各國民を支配する。従つて審判の權もある譯である。汝ら最小き事を審くに足らぬ者ならんや。此の世の資産問題は最小の問題に相違はない。其の各國民を審判する權能あるものが、此の世の問題で、眞の義を知らないものから審判を受けることは不合理ではないかと言ふ。三、汝ら知らぬか、我らは御使を審くべき者なるを、況して

此の世の事をや。『パウロは此の天使、彼の天使（或る人々が此れは善の天使で、悪の天使ではないと言ふので）を區別する考はなかつた。唯だ教會が此の自然界最高の存在者も遂に其の權能の下に管轄せらるべきものであることを思ひ及んで、其の權威と威嚴とを自覺するやうにと斯く言ふのである』（ゴオデエ）。四、然るに汝ら審くべき此の世の事あるとき教會にて輕しむる所者を審判の座に坐らしむるか。色々の説があるが然し、此の世の問題で、平素教會では深く重んじてゐない人物に其の審問を受けるかと言ふにあらう。教會の中には自ら高しとして誇つてゐた連中が早速此んな矛盾の行動があつたものと察せられる。五、斯く言ふは汝らを辱しめんとてなり。パウロは此れを重要なこととして言つてゐるのではない。唯だ此の世の事を不覺に重んじてゐる人々を辱しめんがために言ふと辯明する。斯くの如き問題を審判するに至當な人物は教會の中にもあるべき筈であるが、彼らは道徳上の標準が低いためにそれに満足せず異教徒の法廷に訴へてゐる。畢竟彼らはそれより遙かに高い生活に定住すべきものであることを忘れてゐるからである。六、兄弟は兄弟を、しかも不信者の前に訴ふるか。『教會の審判と世の審判との間の問題ではない。律法と公平との間の問題で、又訴訟と仲裁との間の問題である。又更に細かな法律に由るか、もつと安價な律法に由るか、或は更に法律の偉大な効力に訴へて其の調停を遂げるかと言ふのではない。一層深く基督教的に協調しろと言ふ』

（ロバアトソン）。斯くの如き訴訟の提出されるのは斯の如き問題を協定する人物が教會の中にないことを示すか、或は其の人物を間に入ることを避けるに由る。七、互に相訴ふるは既に當しく汝らの失態なり。斯くの如き訴訟事件が起ると言ふことが、既に基督者としてあるまじき失態のあつた證據である。何故寧ろ不義を受けぬか。パウロはマタイ五の三十八―四十二の耶穌の教訓を繰返す。基督者から見れば不義を被つた人間よりも不義を行つた人間の方が恐ろしい運命に陥ることは明かに認められて居るべき筈である。八、然るに汝ら不義をなし云々。被告たると原告たるとを論ぜず、基督に於ける兄弟を害し、或は之を訴へることは惡を忍ぶにあらすして、之に害を加へることゝなる。『惡に對する服従の義務を生ぜしめる靈的同胞主義が其の責任を重からしめる』（フキンド）。九、正しからぬ者の神の國を嗣ぐことなきを。前章及び本章までに言つて來たことを締めく、つて斯く言ふ。『自ら欺き』其の日々に祈る所と全く反對な行動を爲すものは神の國に入るを得ない。肉慾に耽るもの、其の利慾に熱中するものは基督を信する信仰に由つて入るを得べき神の國からは排斥せらるべきものであると。十一、主耶穌基督の名により我らの神の御靈によりて、己を洗ひ、且つ潔められ、且つ義とせらるることを得たり。主基督に由る祝福の凡てを含む基督との一致契合により生じた其の功績に準じて、神の御靈と其の靈性が溶合混一した其の功績に由り、『己を洗ひ』はバプテスマの意

味であるが、それは形式上のことではなく、『信じて、その徴を受け、又其の潔めの徴を受けた』意味である。『且つ潔められ』は神に對して罪から離れるやうにせられたとの意味。『義とせられ』は實際に義となつたと言ふ意味ではない。罪の重荷から解き放されて、其の刑罪を免れ義と認められるに至つた意味である。

基督者の自由と放縱

十二—二十

十二一切のもの我に可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの我に可からざるなし、然れど我は何物にも支配せられず。十三食物は腹のため、腹は食物のためなり。然れど神は之をも彼をも亡し給はん。身は淫行をなさん爲にあらず、主の爲なり、主はまた身の爲なり。十四神は既に主を甦へらせ給へり、又その能力をもて我等をも甦へらせ給はん。十五汝らの身はキリストの肢體なるを知らぬか、然らばキリストの肢體をとりて遊女の肢體となすべきか、決して然すべからず。十六遊女につく者は彼と一つ體となることを知らぬか『二人のもの一體となるべし』と言ひ給へり。十七主につく者は之と一つ靈となるなり。十八淫行を避けよ、人のをかす罪はみな身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。十九汝らの身はその内にある、神より受けたる聖靈の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。二十汝らは價を

もて買はれたる者なり、然らばその身をもて神の榮光を顯せ。

コリント教會の道徳的廢頽は基督者の自由なる原則に由つて辯護せられ、或は半ば認容せられた姿で、彼らはパウロの口を藉りて『一切のもの我に可からざるなし』と主張した。パウロは其の語を否定しなかつた。然し此れを濫用し、悪用する者に對して嚴かに之を戒めるのである。基督者は神に事へんがために基督に由つて買はれた者である。故に其の奉仕に至當な生活を營まねばならぬといふ。

十二、一切のもの我に可からざるなし、然れど我は何物にも支配せられず。此所にパウロは一句のうちに二回も『一切のもの』云々を繰返してゐるし、十の二十三にも尙ほ同様二回繰返してゐる所を見ると此れはコリント教會のパウロ派、アポロ派が何れも主張した句と思はれる。凡ての物は益となるに相違ないが、それがために自由を束縛せられ、棄てやうとしても棄てられないやうに支配を受けるやうになつては、それは既に『可からざるなし』と言へない。それは其の自由を束縛せられるからである。『肉の支配下に再び陥るを懼れる靈的自由の人の細心の斷言である』(フキンド)。十三、食物は腹のため、腹は食物のためなり。此所では食物のことを言ふのであるが、パウロはユダヤ人の感情との異教徒基督者の良心と兩方から考へた所を指して言つてゐると思はれる。斯くの如き儀式的な禁

慾は意義を爲さないと同時に誤に陥る。殊に偶像に献けた食物かどうかを論斷して、其の食物に氣を配るが如きは愚の骨頂である。身は淫行をなさん爲にあらざ、主の爲なり、主はまた身の爲なり。パウロは此の肉體を（肉と言はず『身』と言ふ）以て現在及び來世に繼續する本質的のものと考へてゐる。而してその身が慾情の燃えるまゝに其の満足を求めてゐるものは亡びると。其の肉體は主と關聯を有し、現在の肉體は基督の謙遜の肉體に、未來の體は其の榮光の體に似るべきである。十四、神は既に主を甦へらせ給へり、又その能力をもて我らをも甦へらせ給はん。十三節と相對するもので『神は之をも（腹）彼をも（食物）亡し給はん……されど神は主を甦へらせ給へり』となるとフキンドレイは言ふ。即ち我らの肉體が主と相似たるものとなれば、主が甦り給ふたやうに我らも神に由りて甦ると言ふ。『復活は神の能力の特殊の顯現（ローマの四）として認められる』（マツシイ）。十五、汝らの身は基督の肢體なるを知らぬか。エペソに言ふ基督を首として各が肢體たる教會を指した教訓と此所の意味は異なる。基督が内に住み給ふ點から基督者の四肢五體は基督の體であると言ふ。『最早我生くるにあらず、基督我が内に在りて生くるなり』（ガラテヤ二の二十）。然らば遊女の肢體となすべきか。基督とは反對の遊女を其の肢體の首としては基督者の生活は成立たない。『取りて』は『盗み去つて』の意味で、其の肢體の所有主である基督から奪ひ去つての意味である。十六、遊

女につく者は彼と一つ體となることを知らぬか。此の結婚に於て生ずる關係を、低級な者に結ぶことは其の品性の相共通なものとなつたことを示す點で、結婚と異なる所はない。故にパウロは創世記二の二十四『二人のもの一體となるべし』との神の命令を引用する。此れは決してパウロが結婚を以て不品行と同一に考へたものではない。結婚は神の命令である。而して遊女と共同の關係を結ぶことは同質となつた意味である。即ち貞操を賣春婦と同等の道德的準備に置いたものでなければ其の相手とはなれない。十七、主につく者は之と一つ體となるなり。其の首に肢體が結ばるやうに、信仰に由つて基督に固着することは、其の肉體の一致すると同様現實に密接に靈が契合することである。十八淫行を避けよ、人のをかす罪は皆身の外にあり、されど淫行をなす者は己が身を犯すなり。他の罪惡は格闘すべきものであるが、此の罪惡には警戒して逃けることが必要である。恰かもポテパルの妻に捕へられたヨセフの場合のやうに之を避けると言ふ。『君子は危に近かず』である。他の罪は外部から來つて其の肉體の特殊の部分に傷害を與へるに過ぎないが、不身持は其の全體を罪に陥れると。妻以外に結ぶべからざる關係を他の婦人に結んで、其の極端に人格を辱しめることは自ら辱しめを受けると同様であると。十九、汝らの身はその内にある、神より受けたる聖靈の宮にして汝らは己の者にあらざるを知らぬか。己が身と言つたが實は己の身ではない。それは聖靈の神殿であると。支那の道德では

「身體髮膚、之を父母に承く敢て毀傷せざるは孝の始めなり」と言ふ。パウロによれば肉體は復活の教理が其の背後に存在する人間の本質である。其の不品行に對する基督者の評價は異教徒の評價とは全く反對である。アプロダイトの神殿では、賣春婦が祭司であつて、其の祭司との肉的交易は神々に身を献けること、せられた。驚くべき不埒である。神の眞の神殿は人間自身で斯くの如き行為を行ふ故に絶対に墮落せしめる事になる。二十、汝らは價をもて買はれたる者なり。神の所有となつたのは、其の始め神が御子の血を以て買ひ給ふたからである。即ち舊き罪の奴隸の中から之を買ひ戻し給ふて、其の代價として愛し給ふ御子の苦難を以て拂はしめられた。「己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給ひし者はなどか之にそへて萬物を我らに賜はざらんや」(ロマ八の三十二)。「買ふ」は即ち「購ひ」の意味で、昔奴隸を自由に解放するには其の賠償金を要した。然らばその身をもて神の榮光を顯せ。「肉體が靈魂と等しく神に服従すべきもので、従つて兩方を以て神の榮光のために事へると言ふことは當然である……」(信者の精神は純潔でなければならぬのが至當であるやうに兩者の能力は兩者を贖はれた神の御手にあるが故に人の前にも亦それを外部に示さねばならぬ)既に言つてゐるやうに其の靈魂と等しく肉體も亦聖靈の宮だからである」(カルヴケン)。

自第七章第一節 道德上の諸問題
至第七章終

第七章

獨身生活と結婚生活

一七

一 汝らが我に書きおくりし事に就きては、男の女に觸れぬを善しとす。二 然れど淫行を免れんために、男はおのおの其の妻をもち、女はおのおの其の夫を有つべし。三 夫はその分を妻に盡し、妻もまた夫に然すべし。四 妻は己が身を支配する權をもたず、之をもつ者は夫なり。斯のごとく夫も己が身を支配する權を有たず、之を有つ者は妻なり。五 相共に拒むな、たゞ祈に身を委ぬるため合意にて暫く相別れ、後また偕になるは善し。これ汝らが情の禁じがたきに乗じてサタンの誘ふことなからん爲なり。六 されど我が斯くいふは命ずるにあらず、許すなり。七 わが欲する所は、すべての人の我が如くならん事なり。然れど神より各自おのが賜物を受く、此は此のごとく、彼は彼のごとし。

デビッド・スミス博士は此の所に至つて、テトスが吉報を携へてコリントから歸つて來たので書

翰の調子が一變すると言つた。それは兎も角として、不品行を戒飭した所から、結婚或は獨身生活の聯想が伴ふのは當然であつた。而して既にコリント教會から禁慾と結婚に就いてのパウロの意見を求めて來てゐるのに對して此所にそれを答へるのである。即ち彼は答へて結婚は合法なるのみならず、便宜であると言ひ、能ふべくば獨身のまゝに暮すを可とするけれども自製の恩恵は凡ての人に與へられる譯ではない。故に自由意志に任せ、婚姻するは胸に燃ゆるよりも勝ると言つた。

一、汝らが我に書き贈りし事に就きては、教會に於ては第五、六兩章に準備した點を基礎として結婚に就いての問題が討論せられ、それをパウロに質して來たものと思はれる。男の女に觸れぬを善しとす。此れはパウロが獨身生活を以て尊敬すべき事と認めて之を推賞したものと受取れない。「善しとす」は靈的の利益である、故に結婚の義務に就いて或る人々には其の祈禱を妨げられ、奉仕を爲すに困難と思はれる場合を言つたものであらう。「パウロは「女に觸れないのを善しとす」と言つて結婚を否定してゐるのではない。獨身生活を以て非人道的であると考へる人々に對して之れを辯護するのである」(フキンド)。二、然れど淫行を免れんために男は……妻を……女は……夫を。然し其の弊害を忍んで自然にして必要なことを避けるのは宜しくない。禁慾主義は事實を無視する點に於て狂氣的である。熱情的な精神主義は結婚を避ける以上の危険を宿してゐる。それは淫行に陥る虞れが

あるからである。コリントの教會の如き事情の下にあつては斯くの如き實例が屢々見られた。勿論基督教の信仰を有するものと比較して同日には並べられないけれども編者は佛教の都に住居してゐる關係上佛教寺院の獨身者、殊に婦人の多くの實例を見聞してゐるのであるが其の間には言ふに忍びざる不自然の行爲や不仕墮落が行はれ、從つて性的關係を基として幾多の恐るべき犯罪さへも屢々實現してゐる。勿論此所でパウロの言ふのは一般的に言つたもので、何人も斯くせねばならないと言ふのではない。それは次の句で明かとなるであらう。三、夫はその分を妻に盡し、妻もまた夫に然すべし。結婚は何れの點に於ても其の一致契合である。「その分」とは夫は妻が誘惑に陥らないやうに、妻は夫が同じく誘惑に克ち得るやうに至當な考慮を用ひて互に盡さねばならない。殊にコリントの如く男女の間の道徳が頽廢して、貞操の徳を茶番事のやうに心得てゐるもの、夥しい現代の社會事情の下では一層相手のために心を配つて相盡す必要があらう。四、妻は己が身を支配する權をもたず之をもつ者は夫なり。夫も己が身を云々。夫婦一體である以上は自己の欲す所に從つて夫は自由の行動は取れないし、妻も亦同様である。自己の信仰の故に相手誘惑に陥るやうな境遇に置く不心得があつてはならないと言ふ。自分は自分のものであつて自分のものではない。相手に屬するものである。五、相共に拒むな。唯だ祈に身を委ぬるため合意にて暫く相別れ、後また偕になるは善し。即ち前節に

言ふ夫が妻に、妻が夫に對して有する夫婦關係の權利を拒んではならないと言ふ。然し兩者合意の上で暫く特別な期間に祈禱修養のために別居してもよいと。情の禁じ難きに乗じてサタンの誘ふこと。不節制に陥る誘惑に掛らないやうに長く別居を續けないやうにと注意する。六、されど我が斯く言ふは命ずるにあらず、許すなり。『此の「命ずる」と言ふ語は元來義から生ずる義務に關するもの、其の事自身が神を喜ばすものに適用せられる。故にパウロは其の意味から命ずるのではないと言ふのである』(カルヅキン)。至當な事情の下にあるものに對しては斯くの如き行動即ち結婚生活が至當であると言ふ。七、我が欲する所は凡ての人の我が如くならん事なり。パウロは結婚の經驗があるかないかと言ふやうな議論が此所から生ずる。デビッド・スミス博士はパウロを以てサンヒドリムの議員であつたことから立論して妻帯の經驗があつたと論斷せられるけれども、其のサンヒドリムの議員であつたと推定する基礎が既に薄弱であつてそれは想像に過ぎない。よしんば結婚したことがあつたとしてもそれは回心前の事で、何らかの理由でパウロは傳道當時は獨身であつた。然し此所の『我が如くならん事』とは必ずしも結婚をしないと云ふ意味ではあるまい。自ら制して結婚の必要な状態にあることが願はしいと言ふのであらう。神に對する奉仕が他の義務や考慮に煩はされずに行はれる境遇とならんことを望むと言ふ。然れど神より各自おのが賜物を受く、此は此の如く、彼は彼の如

し。然し斯くの如き自制力は神がパウロに授けられたもので、或は此の天稟を具へないものもあらう。パウロも他の人の有する賜物を有してゐない方面もあると。即ちバルナバの温厚篤實の性狀の如きは全くパウロと反對であつた。

結婚生活の心得

八一二十四

八我は婚姻せぬ者および寡婦に言ふ。もし我が如くにして居らば、彼等のために善し。九もし自ら制すること能はずば、婚姻すべし、婚姻するは胸の燃ゆるよりも勝ればなり。十われ婚姻したる者に命ず(命ずる者は我にあらず主なり) 妻は夫と別るべからず。十一もし別るゝ事あらば、嫁がずして居るか、又は夫と和げ。夫もまた妻を去るべからず。十二その外の人に我いふ(主の言ひ給ふにあらず)もし或る兄弟に不信者なる妻ありて偕に居ることを可しとせば、之を去るな。十三また女に不信者なる夫ありて偕に居ることを可しとせば、夫を去るな。十四そは不信者なる夫は妻によりて潔くなり。不信者なる妻は夫によりて潔くなりたればなり。然なくば汝らの子供は潔からず、然れど今は潔き者なり。十五不信者みづから離れ去らば、その離るゝに任せよ。斯のごとき事あらば、兄弟または姉妹、もはや繋がるゝ所なし。神の汝らを召し給へるは平和を得させん爲なり。十六妻よ、汝いかで夫を救ひ得るや否やを知らん。夫よ汝いかで妻を救ひ得るや否

やを知らん。十七唯おのおの主の分ち賜ふところ、神の召し給ふところに循ひて歩むべし。凡ての教會に我が命ずるは斯のごとし。十八割禮ありて召されし者あらんか。その人、割禮を廢つべからず。割禮なくして召されし者あらんか、その人、割禮を受くべからず。十九割禮を受くるも受けぬも數ふるに足らず、たゞ貴きは神の誠命を守ることなり。二十各人その召されし時の狀に止まるべし。二一なんぢ奴隸にて召されたるか、之を思ひ煩ふな（もし釋さるゝことを得ばゆるされよ） 二三召されて主にある奴隸は、主につける自主の人なり。斯のごとく自主にして召されたる者は、キリストの奴隸なり。二四汝らは價をもて買はれたる者なり。人の奴隸となるな。二四兄弟よ、おのおの召されし時の狀に止まりて神と偕に居るべし。

獨身を以て奉仕することが最も好ましいとすれば家庭を解散すべきであらうか。所謂『出家』すべきであらうか。パウロは其の各種各様の境遇を擧げて助言した。結婚せざるもの、寡婦、基督者同志の夫婦、一方が異教徒である場合等を指示してゐる。何れにしても基督者となつたときの境遇に應じてその基督者の道德を守れと。

八、我は婚姻せぬ者及び寡婦に言ふ。『婚姻』せぬものは年齢に達し、或はそれ以上に及んで獨身である凡ての男女に適用される語であるが、此所では主として男の獨身生活者に對して言ふものと思はれる。それは處女や寡婦に別な助言を與へてゐるからである。若し我が如くにして居らば彼らのために善し。婚姻か或は再婚しないでパウロのやうな境遇にゐることが利益があると言ふ。『或る人々が頻りに抗論するやうにパウロは男裸であつたと認むべき餘地が此所にある』（マツシイ）。九、若し自ら制すること能はずば婚姻すべし。パウロのやうに自制することが出来なければである。獨身生活を送りながら絶えず結婚に憧れて其の充たされない慾望に訶まれるよりも結婚して其の罪を免れる方がよいと言ふ。十、我婚姻したる者に命ず（命ずる者は……主なり）妻は夫と別るべからず。既に結婚してゐる基督者に對してある。婦人を命令の中心としたのは、コリントに於ける婦人基督者の間に禁慾の氣風が盛んに起つたからであらう。離別は婦人の解放となることは昔も今も變りはない。十一、若し別るゝ事あらば嫁がずして居るか、又は夫と和げ。基督の命令を敷衍して斯く言ふのではない。萬一斯くの如き不心得で離別することがあつても、基督の教訓に従つて獨居せよ（マタイの五の三十二、十九の九）と言ふ。夫もまた妻を去るべからず。日本の七去の例、墮落した歐米諸國の例に見ても異教徒が如何に離婚を輕々しく取扱つてゐるか明かである。パウロはコリントに於ける此の弊に對して夫にも妻にも其の徳の重大なことを示す。十二、その外の人に我いふ（主の言ひ給ふにあらず）若し或る兄弟に不信者なる妻ありて偕に居ることを可しとせば之を去るな。以上の外の場合を指す。其は基督自ら授け給ふた教訓中にはない事でパウロは自分の意見であると言ふ。それは信者の方で満足

し、其の離婚を信者の側から提出してはならないと。十三、また女に不信者なる夫ありて。夫が信者で妻が不信者の前節の場合と同様、信者の側は之を忍ばねばならないと。十四、不信者なる夫は妻によりて潔くなり、不信者なる妻は夫によりて云々。此れは勿論聖徒となつたと言ふ意味ではない。異教徒の夫なり妻なりは異教徒としての闇黒のうちに既に居るものではなく、基督者たる配偶者から輝き出る光明の雰圍氣に置かれるに至つたと言ふのである。其の夫なり妻なりは離婚をせねばならないほど異つた境涯には置かれてはゐない、一方が基督者ならば其の共同責任は基督者としての共同責任となつてゐると。然らば汝らの子供は潔からず、然れど今は潔き者なり。夫婦の基督者たる共同責任を子供の方面から推論するのである。即ち両親中の一方が基督者である子供は基督者の領域内に在る。子供は両親の一致契合の化身であり證據であると。彼らが『聖』であると言ふのは互に相愛する両親の密接な合體より來る感化から生ずる。此の句で小兒のバプテスマを論ずるのは不當であるが、一方が福音を信じ、其の一方が其の福音に由つて小兒の成育を欲する場合はバプテスマは當然となる。要するに此れは離婚は其の子供を中心として考へても不合理であることを言はうとするのであつて、日本でも子供は夫婦の楔であると言ふ。一層高い意義から見てもそれが事實である。十五、不信者自ら離れ去らば、その離るゝに任せよ。不信者である側からの申出に對して基督者たる配偶者

は之を拒むなと。斯くの如き事あらば兄弟又は姉妹、もはや繋がるゝ所なし。基督者になつたと言ふ理由で一方の奴隷となる必要はない。基督者たる配偶者は離婚が出来ないと言ふ規定に束縛せられる必要はない。相手方からの要求ならば良心の苛責を受けなくともよいと。神の汝らを召し給へるは平和を得させん爲なり。神が基督者として召し給ふたのは束縛を與へるためではなく、平和を與へるためである。故に相互の不安を招くやうな結合を維持する義務はないと。十六、妻よ、汝いかで夫を救ひ得るや否やを知らん、夫よ、汝いかで妻を云々。色々な註譯が試みられるけれどもカルヱキンを始めフキンドレイ其の他の説くやうに此れは前節の場合に易々と離婚をしてはならないことを誡めるものと解せられる。神は石をもアブラハムの裔となし給ふ。故に基督者の夫なり妻なりは不信の夫なり妻なりが、自分の出來得る限り神の援助の下に努力して、基督者として回心することがないと言ふ。十七、唯だ各主の分ち賜ふところ、神の召し給ふところに循ひて歩むべし。異教の夫なり妻なりと別居して判斷が出来るかと言ふにあらう。故に輕々しく離婚しない用意を有しなればならないと言ふ。十八、唯だ各主の分ち賜ふところ、神の召し給ふところに循ひて歩むべし。異教の夫なり妻なりと別居することを認めるのは、其の異教者たる相手が自ら離婚を要求した特別の場合に限るのであつて、一般的には『各人その召されし時の狀に止まる』のが定法である。凡ての教會に命ずるは斯くの如し。パウロの赴く所何處の教會にも同様の誠命を與へてゐると。パウロは決して社會改良家ではなかつ

た。其の回心と同時に外部の條件を變更するのではない。其の靈性に自由が與へられたからと言つて、其の境遇の上に人爲的に自由を要求することは神の御意ではない。勿論其の行つてゐる所が罪惡であつた場合は別である。十八、割禮ありて召されし者あらんか。その人割禮を廢つべからず。當時の最も顯著の問題即ちユダヤ人と異邦人との區別に就いて先づ比較説明するのである。ユダヤ人でありながら異邦の兄弟たちと偕ならんがためにユダヤ人であることを隠さうと冀ふ必要はない。日本人でありながら日本を呪ふもの其の歴史を欲しないものは決して少くない。基督者なるが故に日本人としては眞の日本人であらねばならない。割禮なくして召されし者あらんか、その人割禮を受くべからず。さればと言つて、神が召し給ふ條件でもないことをわざ／＼背負ひ込む必要はない。異邦人であるものが救に必要もないユダヤの儀典を守るには當らないと。十九、割禮を受くるも受けぬも數ふるに足らず、唯だ貴きは神の誠命を守ることなり。ユダヤ人であらうとなからうとそんなことは問題ではない。神に柔順に服従するかどうかが問題である。而してそれにのみ意義がある。二十、各人その召されし時の狀に止まるべし。『召されし』は職業の意味にもなり、救はれた意味にもなるが、此所では神が召して救ひ給ふたとき其のときの四圍の状態のまゝに止まれと言ふ。此の世の職業に従事してゐる方々は基督の主義精神を貫くには容易でないとの理由から、信仰を完うしやうとすれば其の

職を棄て、専ら傳道に従事したいなどと志される。然し傳道は神の召命の確信から起らねばならぬのであつて、職業上に信仰が貫き悪いとの失望からならば傳道にはより以上の困難と志の遂げられない苦悶とが伴ふ。同時に此の世に有するまゝの信仰で職業に止まられることが基督教に取つてはどれだけ意義の重大なことを客觀的に考へられねばならない。パウロは其の回心のときの生活状態のまゝで其の意義が進化するやうに努めよと言ふ。二十一、汝奴隸にて召されたるか、之を思ひ煩ふな（若し釋さるゝことを得ば釋されよ）。異邦人がユダヤ人となることを望まないやうに自主の人間も奴隸となることを望まないが、然し當時の教會員中に夥しく存在した奴隸は自由を希望し、回心は彼らに一層の熱望を起さしめた。それは人間としての價値が明かとなり、差別のないものであることが意識せられるに従つて解放を熱望するに至るのは當然である。然しそれは教會に不必要な混亂を招き、奴隸自身の不幸を醸す外に當時にあつては何らの意義もない絶望的な結果を産むに過ぎなかつた。然らばパウロが奴隸を認容した理由の下に其の地方的の條件に關係なく基督教の兄弟主義と奴隸制との矛盾に無關心であると言ふことは基督者の爲すべき道ではあるまい。それは時代錯誤で社會進化を無視するものである。彼は基督者の兄弟たるピレモンに書を贈つて、其の奴隸オネシモを『最早奴隸の如くせず、兄弟の如くせん』ことを暗に要求してゐる。然し神に自由に事へるた

めに若し奴隷から解放せられ得るとならば、其の機會を用ひねばならないと。基督者は自己の放縱や慾望から境遇を觀察してはならない。神に事へる方面から萬事を判斷すべきである。二十二、召されて主にある奴隷は主につける自主の人なり。『思ひ煩ふな』と言つた通り、罪から釋き放された靈的には自主の者である。其の奉仕は保護者に對して任意に行ふものであつて、懼れや不承不承に行ふものではない。自己の良心から目的を有して爲す行爲である。斯くの如く自主にして召されたる者は基督の奴隷なり。同時に自主の者も其の主人たる罪から基督が買戻し給ふた基督の奴隷である。『罪より解放されて義の僕（奴隷）となりたり』（ロマ六の十八）。二十三、汝らは價を以て買はれたる者なり、人の奴隷となるな。基督は其の贖に由つて罪の奴隷を解放して基督者として召し給ふた。唯一の主たる基督に歸すべき奉仕の外人間の感化や勢力の下に其の道德を支配されてはならないと。二十四、兄弟よ、各召されし時の狀に止まりて神と偕に居るべし。兄弟よと愛情を籠めて言ふ。兎も角も世の法律や習慣の支配を受けず、信仰と聖徒たる其の使命に従つて地位を活用しつゝ、神に事へるにある。主の暴虐を懼れるとか諂ふとか、身の安全を期するとかのために事へるのではなく神の榮光のため神に奉仕せんがために事へよと。人の前に爲すに非ず、神のために行ふ信仰から勞作はたらけと言ふ。

處女と寡婦並に一般基督者へ

二十五—四十

二五 處女のことには就きては主の命を受けず、然れど主の憐憫によりて忠實の者となりたれば、我が意見を告ぐべし。二六 われ思ふに、目前の患難のためには、人その在るが儘にて止るぞ善き。二七 なんぢ妻に繋がる者なるか、釋くことを求むな。妻に繋ぐれぬ者なるか、妻を求むな。二八 たとひ妻を娶るとも罪を犯すにはあらず。處女もし嫁ぐとも罪を犯すにあらず。然れど斯る者はその身、苦難に遭はん、我なんぢらを苦難に遭はずに忍びず。二九 兄弟よ、われ之を言はん、時は縮れり。されば此よりのち妻を有てる者は有たぬが如く、三十 泣く者は泣かぬが如く、喜ぶ者は喜ばぬが如く、買ふ者は有たぬが如く、三世を用ふる者は用ひ盡さぬが如くすべし。此の世の状態は過行くべければなり。三一 わが欲する所は汝らが思ひ煩はざらん事なり。婚姻せぬ者は如何して主を喜ばせんと主のことを慮ばかり、三二 婚姻せし者は如何して妻を喜ばせんと世のことを慮ばかりて心を分つなり。三三 婚姻せぬ女と處女とは身も靈も潔くならんために主のことを慮ばかり、婚姻せし者は如何してその夫を喜ばせんと世のことを慮ばかりなり。三五 わが之を言ふは汝らを益せん爲にして汝らに絆を置かんとするにあらず、寧ろ汝らを宜しきに適はせ、餘念なく只管、主に事へしめんとなり。三六 人もし處女たる己が娘に對すること宜しきに適はずと思ひ、年の頃もまた過ぎんとし、かつ然せざ

るを得ずば、心のまゝに行ふべし。これ罪を犯すにあらず婚姻せさすべし。三七されど人もし其の心を堅くし、止むを得ざる事もなく、又おのが心の隨になすを得て、その娘を留め置かんと心のうちに定めたらば、然するは善きなり。三八されば其の娘を嫁がする者の行爲は善し。されど之を嫁がせぬ者の行爲は更に善し。三九妻は夫の生ける間は繋がるゝなり。然れど夫もし死なば、欲するまゝに嫁ぐ自由を得べし、たゞ主にある者にのみ適くべし。四十然れど我が意見にては、その儘に止らば殊に幸福なり。我もまた神の御靈に感じたりと思ふ。

パウロはコリント教會の特殊の質問に對して童貞には卓越した點なきを認めると同時に専念神に事へんと欲する者にとつては未婚を便宜とする。而して當時の事情の下にあつて主の日は切迫したものと認められ、其の恐るべき序幕は既に開かれてゐると考へられた際、此の世の煩累から遠ざかることを基督者は至當と推斷した。而して彼はそれが彼自身の判定に外ならないことを正直に告白した。半ばは楠正行の『とても世に永らうべくもあらぬ身の假の契りを如何で結ばん』と言つた境地からである。一身を奉じて神に事へつゝ、迫害に由つて後に遣すべきものの艱難を慮るからである。故に當時にあつては獨身こそ最も思慮深き状態であるとパウロには考へられた。恐らくパウロは婚約を破る不信を敢てすべきか、結婚すべきかに惑ふ實際の場合に立つものからの問を受けたものと察せられる。彼は斯くの如き場合結婚其のものの罪に非ざるを明かにしたのであらう。

二十五、處女のこと就きては主の命を受けず、然れど主の憐憫によりて忠實の者となりたれば我が意見を告ぐべし。これに就いて基督から何らの啓示をも受けてゐない、自分一個の一家言ではあるが、然し既に忠信基督に奉仕して其の御旨を授けられる身分であるから自分の意見を述べると言ふ。二十六、我思ふに目前の患難のためには人その在るがまゝにて止るぞ善き。當に押寄せて來やうとしてゐる迫害のために慮つて其の苦惱を複雑にしない方がよいと言ふのである。此れは再臨に就いての苦難を言つたのではない。現在エペソで彼が其の前兆を味つてゐる迫害から將來を推斷して言つてゐるのである。二十七、汝妻に繋がるゝ者なるか、釋く事を求むな、妻に繋がれぬ者なるか妻を求むな。二十節、二十四節參照。二十八、たとひ妻を娶るとも罪を犯すにはあらず。處女若し嫁ぐとも罪を犯すにあらず。二十七節後段を強調し過ぎてはならない用意から斯く言明するのであらう。然れど斯る者はその身、苦難に遭はん、我なんぢらを苦難に遭はすに忍びず。結婚すれば此の世の様、即ち人間としての關係と肉體上の境界から種々の艱難が湧き起る。俗に「子は首械」と言ふ。其の子のために兩親は甚だしく苦しむそれが迫害の時代に於は一層甚だしきものがあらう。維新の志士が「妻は病床に臥し、子は饑に泣く、單身起つて洋夷を攘はんと欲す」と（其の目的や言ふ所は兎も角）邦家の爲に自ら起たうとす

るに當つての苦悶を訴へてゐる。其の妻子が迫害に苦しむことを見るのは自分自身が如何なる艱難に遭ふよりも深刻な悶えでなければならぬ。二十九、兄弟よ、我之を言はん、時は縮まれり。されば此より後妻を有てるものは有たぬが如く。更に重要なことを注意したのであるが、妻があるものと雖も、それが永久のものであるかのやうな熱情を以て此の世の關係を考へてはならない。それは劫久不變の状態ではない。故に變轉するもので、然かも其の時期の遠くないことを心に留めよと言ふ。三十、泣く者は泣かぬが如く、喜ぶ者は喜ばぬが如く、買ふ者は有たぬが如く。「恰かも幸福が犯罪でもあつたやうに不自然に嚴肅な態度で青年の幸福な心を壓服してはならない」(ロバートソン)と註してゐるやうに『紅顔の少年』に無理矢理『白骨となる』運命を描かせて、成育し、青春躍る胸中を攪亂するのは不當であらう。耶穌は新郎新婦と其の歡喜を偕にせられた。然し『泣くと喜ぶとは貧困と富貴を意味する。それは其の影響を受ける原因と常に認められるからである。然し、此の使徒は基督者に彼らの資産を棄てよと言つてゐるのではない、唯だ其の資産に全心を注ぐなど言つてゐるのである』(カルヅキン)。三十一、用ひ盡さぬが如くすべし。『腹八分目』と言ふ諺がある。其の絶頂の樂しみまでを極めず、常に自ら己を牽制せよと言ふ。此の世の状態は過行く。此れはどれほど全心全靈を打ち込んでも永續する状態にはないものである。トマス・ア・ケンピスは物質に執着すれ

ばそれと偕に消盡すると繰返して警告してゐる。時は近い。故に天に財寶を積むことを忘れてはならない。三十二、我欲する所は汝らが思ひ煩はざらん事なり。結婚を勧めない理由の本源を明かにする。即ち斯くの如き係累を避けることが靈性上には大いなる利益があると。如何にして主を喜ばせんと言ふことを慮ばかり。二心を抱くに至るために大いなる損失となると。當時にあつては専心主を思ふには他を顧みられなかつた。主のことを慮るものは其の思想が統一せられて一つの目的に向ふけれども世のことを慮る基督者は世と神との間に思ひ亂れる。三十三、婚姻せし者は如何して妻を喜ばせんと言ふことを慮ばかりて心を分つなり。結婚した基督者は専心基督に事へることを得ず、必ず其の心の幾分を妻のために用ひなければならぬ。而してもつと高く行きたいと考へても低い所に低迷してゐなければならぬ場合が多い。勿論人は妻子のために大膽となり、堅忍となる。然し當時の事情の下では單獨の方が更に大膽堅實に基督の證者となり得たであらう。事の如何は別として四十七士以外にも義士はあつたが途を過つて武士道に背いたものは妻や許嫁が原因であつた。(これを女子の罪と爲す如きは途方もない見當違ひである)。三十四、婚姻せぬ女と處女とは身も靈も潔くならんために主の事を慮ばかり云々。其の全心全靈を主に打ち込んで全く聖別せられんがためにである。『結合が不潔なものと認めるやうな結婚の否定の跡は聊かもない』(マツシイ)。前譯には『妻となれる者と

處女たる者との別あり嫁せざる者は云々』とあるが原語の研究上から無理と見て改譯は之を採用しないもの。三十五、我が之を言ふは汝らを益せん爲……絆を置かんとするに非ず……餘念なく只管主に事へしめんとてなり。マルタは思ひ煩ひて心勞し、マリヤは主の御側で御旨を聞いた。即ちマルタのやうな心勞から解放して、マリヤのやうに専念基督に事へしめんがためであると言ふ。(ルカ十の三十九—四十一の物語参照)。三十六、人若し處女たる己が娘に對すること云々。此れはパウロに實際問題を提出して回答を求めたものであらう。『人』と言つたのは父や、其の保護者を指す。此れは日本人にはよく解る表現である。年頃になつた娘のために心を碎く父なり保護者なりは、どうしても結婚させねばならない危険の状態にあるならば、それを取結んでも決して罪惡を犯させると言ふ意味にはならない。それは基督教的に合法の處置である。三十七、その娘を留め置かんと心のうちに定めたらば然するは善きなり。其の娘が結婚を欲しないか、まだ適當な求婚者がないか、求婚されても娘が應じないかならば、神が其の保護の下に置き給ふ娘の境遇が、自分の思ふ所と一致することが出来たときはそれを處女のままに家に留め置く方が娘が主に事へるためによいと言ふ。三十八、されば其の娘を嫁がする者の行爲は善し、されど之を嫁がせぬ者の行爲は更に善し。パウロは更に進んで其の兩方の處置はどちらもよいが、未婚のままに置く方が更に一層よいと言ふ。此所でも當時の事情を考へ

ての事である。三十九、妻は夫の生ける間は繋がる、なり。禁慾主義者の間には斯くの如き再婚を不都合だと考へたものと思はれる。基督者としての地位と義務と注意せねばならない點を擧げて寡婦の自由を説くのである。たゞ主にある者にのみ適くべし。『此の「主に在る」は直接夫が主に在るものでなければならぬ』(マツシイ)と言つてゐるが日本改譯本文はそれに反對の意見で意譯されてゐる。『異教徒との結合を禁じ、又基督の承認の下に行ふ以外、不信者の動機から生ずる結合を禁じてゐる』(フキンド)。四十、然れど我が意見にてはその儘に止らば殊に幸福なり。然し再婚に伴ふ種々の面倒から解放せられて獨身で暮すことが出来たならば、基督者としての奉仕が充分に出来て、當時の混亂、不安の時代には更に仕合せであると言ふ。而してパウロが掲げた以上の助言は最高の神から授けられたもので、人間の慎重な思慮や個人的傾向から述べたものでないことを確實に意識してゐると。即ち、我も亦神の御靈に感じたりと思ふ。六の十九のやうに他の基督者同様に聖靈を受けてゐる。他の意見を陳べるものが聖靈を受けて言ふと主張するが、自分は此れが神の靈の啓示と信ずると。

自第八章第壹節
至第十一章第壹節

偶像に献けに肉の問題

第八章

偶像の供物について

一一三

一偶像の供物に就きては我等みな知識あることを知る。知識は人を誇らしめ、愛は徳を建つ。二もし人みづから知れりと思はゞ、知るべき程の事をも知らぬなり。三然れど人もし神を愛せば、その人、神に知られたるなり。四偶像の供物を食ふことに就きては、我ら偶像の世になき者なるを知り、また唯一の神の外には神なきを知る。五神と稱ふるもの、或は天に或は地にありて、多くの神、おほくの主あるが如くなれど、六我らには父なる唯一の神あるのみ、萬物これより出で、我らも亦これに歸す。また唯一の主イエス・キリストあるのみ、萬物これに由り、我らも亦これに由れり。七然れど人みな此の知識あるにあらず、或人は今もなほ偶像に慣れ、偶像の獻物として食する故に、その良心、弱くして汚さるゝなり。八我らを神の前に立たしむるものは食物にあらず。されば食するも益なく、食せざるも損なし。九然れど心して汝らの有てる此の自由を弱き者の躓物とすな。十人もし知識ある汝が偶像の宮にて食事するを見んに、その人弱きときは良心そゝのかされて偶像の獻物を食せざらんや。十一然らばキリストの代りて死に給ひし弱き兄弟は、汝の知識に

よりて亡ぶべし。十二斯のごとく汝ら兄弟に對して罪を犯し、その弱き良心を傷めしむるは、キリストに對して罪を犯すなり。十三この故に、もし食物わが兄弟を躓かせんには、兄弟を躓かせぬ爲に、我は何時まで肉を食はじ。

異教徒との交際を自由に行ふとすれば自然に生ずる問題がある。それは偶像に献けたものを食ふのがよいか悪いかとの議論である。即ち彼らとの交際は其の偶像の祭典にも招待せられることとなつて、遂には『偶像の宮』に於て飲食しなければならぬ結果も生ずべきであつた。更に偶像に供物として献けられた獸の肉が普通の商店へ卸されて市民に販賣せられたため、それを買つた家庭の食物にも警戒しなければ『偶像に献けたる物』を冒すこととなる虞れがあつて問題が紛糾したのである。パウロはそれに就いて元來偶像の如きは其の存在を意中に置く必要のないもので、これに献けた物に何の變化もないからして之を食ふ如きは問題ではないが、誰もが其に徹底してゐるものとは考へられない。故に之を懼れながら信仰を裏切つて止むなく之を食ふものには良心の中に大いなる障碍を與へると同時に、斯くの如き人々から見れば其の徹底した人々の行爲は大いなる躓となる。故に斯くの如き弱き人々を懸念してその慎むべきものを慎めと言ふ。

一、偶像の供物に就きては我ら皆知識あることを知る。知識は人を誇らしめ、愛は徳を建つ。偶像の供物の

中にはユダヤの酬恩祭のやうに火で焼かない供物があつた。而してその供物は前に言ふやうに密かに屠殺者に賣り拂はれて普通の肉と同様に市民に賣られた。コリントの教會員は其の基督者の知識から迷信や臆病に囚へられず、合理的に行動し得るものであることは言ふまでもないが、基督者としては更に他の方面を顧慮せねばならない。即ち無智として嘲られるやうな人々への靈的感化を願ふべき義務が生ずる。それは愛から起る。而して知識には誇つても愛に缺けることは徳の害はれることとなる。二、若し人自ら知れりと思はゞ、知るべき程の事も知らぬなり。知識階級であるとして誇つてゐても常識で知れる程度の事も知らないと言ふ。所謂學者、知識階級ほど世の中に迂遠な傾向がある。今日までは知識偏重の結果それを誠に貴いもののやうに心得て却つて得意となつてゐたものさへ見受けられた。三、然れど人若し神を愛せば、その人、神に知られたるなり。本當の知識は神の承認を受くるに足るものとなつたことである。而して神を愛することは利己主義、己を愛するの愛があつては出来ない。神を愛すれば神に承認して頂いてゐることを經驗が物語るであらう。四、偶像の供物を食ふことに就きては我ら偶像の世になき者なるを知り、また唯一の神の外には神なきを知る。佛教では佛像を以て『月を差し示す指だ』と抗辯する。然し『指』は往々にして『月』の代表者となつて月自身を知るものは稀れである。況や其の他の偶像禮拜者は見えない神性の見える代表として土偶

を拜する。斯くの如きものは全く世に無きものであることを知つてゐると。五、神と稱するもの、或は天に或は地にありて、多くの神、多くの主あるが如くなれど。ユダヤ人は神の支配權内に多くの見えない存在があることを信じ、それを神々、又は主と稱した。パウロは神と同格の存在者は斷じて此の世にないと言ふ。六、我らには父なる唯一の神あるのみ、萬物これより出て、我らも亦これに歸す。『神は中心たる泉で中心たる決勝點である。萬物は前者から生じ、信者のみ後者に向つて意識的に行動する』(ロバートソン)。即ち神々は虚偽の存在者である。また唯一の主耶穌基督あるのみ、萬物これに由り、我らも亦これに由れり。『萬物これに由り』とは創造に於ける基督の事業を指し「我らも亦」とは人類の新たな創造を指す(ロバートソン)。七、然れど人皆此の知識あるにあらず……其の良心弱くして汚さるゝなり。然し皆が皆偶像に献けた物を食つた所で別に存在しない虚偽の意味のないものに献けたのであるから何らの害をも受けない理智的人間だと言ふ譯には行かない。異教から回心した人々は今尚ほ偶像を認めて父なる神の以外の神と感じ、それに献けたものとして此らの肉を食ふが故に良心を欺くこととなる。日本人などには最も適切な實例の見られる事實である。例令へば佛壇の供物を、佛の存在も何も認めないものが食つても品性の上は何らの影響もない。神の外に事へないと決心し、佛に供へたものにはそれだけの功德が籠つてゐると感じながら、友人の手前か何かでそれを

已むなく食つたとすれば其の人に取つては良心を欺くこととなつて品性に影響する。八、我らを神の前に立たしむるものは食物に非ず。食物は神との關係を善くも悪くもするものではない。神が我らに對する估價にも、我らに加へられる審判にも何らの影響もない。九、然れど心して汝の有てる此の自由を弱き者の贖物とすな。そんな知識のあるものには良心に對しても合法であつて、それを食つても何らの損害をも受けない。けれども他の人には贖となるのであつて、其の弱い顧みられない人々のことを顧慮すれば神の前に責任が生ずると。十、人若し知識ある汝が偶像の宮にて食事するを見んに、その人弱きときは良心唆かされて偶像の獻物を食せざらんや。偶像は存在しないものであることを承知の上で、他人の座敷で飲食すると同様の考から偶像の神殿で斯くの如き知識のある人々が偶像教徒と偶像の供物を共に食してゐるのを見て、萬一偶像を基督教と同程度に考へ、辛じて基督教を奉ずる弱い人々が、異教徒への氣がねから、良心に背いて供物を食するに至らば、其の知識ある者の行爲は弱き者を贖かせることとなつて神の前に責任を生ずると。十一、然らば基督の代りて死に給ひし弱き兄弟は汝の知識によりて亡ぶべし。汝らは知識を有してゐると言ふが、其の弱き兄弟のために少しの顧慮さへも有しないけれども、基督は其の兄弟のために生命を棄て給ふたことを知らねばならぬ。而してそれを滅亡に誘ふことは基督とは全く反對の行動である。十二、斯くの如く汝ら兄弟に對して罪を犯

し、その弱き良心を傷めしむるは基督に對して罪を犯すなり。彼らに唆かされて良心を傷けしめた所から起る罪は、基督に對して犯す罪となると言ふ。十三、この故に若し食物我が兄弟を贖かせんには、兄弟を贖かせぬ爲に我は何時までも肉を食はじ。此れは勿論偏狹な人々が頑迷な議論をするのを氣にして其の行動を掣肘されねばならない意味ではない。若しパウロの肉を食ふことが他の人に良心に服従することに弛みを與へるならば、其の危険が現實に存在する間は肉を食はないと。勿論此の危険のない限りどんな肉でも食ふことを躊躇しない意味であらう。

第九章

パウロ自身の實例

一一二七七

一我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主イエスを見しにあらずや、汝らは主に在りて我が業ならずや。二われ他の人には使徒ならずとも汝らには使徒なり。汝らは主にありて我が使徒たる職の印なればなり。三われを齎く者に對する我が辯明は斯のごとし。四我らは飲食する權なきか。五我らは他の使徒たち、主の兄弟たち及びケバのごとく姉妹たる妻を携ふる權なきか。六たゞ我とバルナバとのみ工を止むる權なき

か。七誰か己の財にて兵卒を務むる者あらんや。誰か葡萄畑を作りてその果を食はぬ者あらんや。誰か群を牧ひてその乳を飲まぬ者あらんや。八我たゞ人の思にのみ由りて此等のことを言はんや、律法も亦かく言ふにあらずや。九モーセの律法に「穀物を碾す牛には口籠を繋ぐべからず」と録したり。神は牛のために慮ばかり給へるか、十また専ら我等のために之を言ひ給ひしか、然り我らのために録されたり。それ耕す者は望をもて耕し、穀物をこなす者は之に與る望をもて碾すべきなり。十一もし我ら靈の物を汝らに蒔きしならば、汝らの肉の物を刈り取るは過分ならんや。十二もし他の人なんぢらに對してこの權あらんには、況て我らをや。然れど我等はこの權を用ひざりき。唯キリストの福音に障礙なきやうに一切のことを忍ぶなり。十三なんぢら知らぬか、聖なる事を務むる者は宮のものを食し、祭壇に事ふる者は祭壇のものに與るを。十四斯のごとく主もまた福音を宣傳ふる者の福音によりて生活すべきことを定め給へり。十五されど我は此等のことを一つだに用ひし事なし、また自ら斯く爲られんために之を書き贈るにあらず、斯くせられんよりは寧ろ死ぬるを善しとすればなり。誰もわが誇を空しく爲ざるべし。十六われ福音を宣傳ふとも誇るべき所なし、已むを得ざるなり。もし福音を宣傳へずば、我は禍害なるかな。十七若し、われ心より之をなさば報を得ん、たとひ心ならずとも我はその務を委ねられたり。十八然らば我が報は何ぞ、福音を宣傳ふるに、人をして費なく福音を得しめ、而も福音によりて我が有てる權を用ひ盡さぬこと是なり。十九われ凡ての人に對して自

主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隸となれり。二十我ユダヤ人にはユダヤ人の如くなれり、これユダヤ人を得んが爲なり。律法の下にある者には——律法の下に我はあらねど——律法の下にある者の如くなれり。これ律法の下にある者を得んが爲なり。二二律法なき者には——われ神に向ひて律法なきにあらず、反つてキリストの律法の下にあれど——律法なき者の如くなれり、これ律法なき者を得んがためなり。二三弱き者には弱き者となれり、これ弱き者を得んためなり。我すべての人には凡ての人の狀に従へり、これ如何もして幾許かの人を救はんためなり。二四われ福音のために凡ての事をなす、これ我も共に福音に與らん爲なり。二五なんぢら知らぬか、馳場を走る者はみな走れども、褒美を得る者の、たゞ一人なるを。汝らも得んために斯く走れ。二六すべて勝を争ふ者は何事をも節し慎む、彼らは朽つる冠冕を得んが爲なれど、我らは朽ちぬ冠冕を得んがために之をなすなり。二七斯く我が走るは目標なきが如きにあらず、我が拳闘するは空を撃つが如きにあらず。二七わが體を打擲きて之を服従せしむ。恐らくは他人に宣傳へて自ら棄てらるゝ事あらん。

パウロは現に弱き兄弟を傷けるよりも肉食を制するを喜ぶと言つた。それは基督者としての自由からか、或は使徒の權能からか。其の使徒權に就いてはコリント教會員には聊かも辯明の必要はないと敏捷に先手を打つ。彼らの回心が既にパウロの賜物で、其の事實こそ神の召命の試金石だから

である。即ち彼は使徒であつた。然るに他の使徒たちは傳道に當つても妻を携へた。且つ其の滯在中は教會に由つて支へられた。斯くの如き特權は彼も亦有する筈であるが、彼は曾て之を行使しなかつた。彼は傳道の便宜を慮つて今尚ほ獨身である。パウロは彼らの間に傳道中、天幕製造の職に従事して、其の日の糧を得てゐたことは彼らのよく知る所であつた。彼は其の報酬を得る權利がなかつたか。人が其の奉仕に對して支拂を受け、其の勞働の成果に由つて生活を支へることは公平な原則で聖書は之を認めてゐる。若し普通事務に此の規定ありとすれば靈的奉仕に任ずるものは一層其の規定に準すべき筈である。然かも彼は其の權利を棄てた。其の理由は福音の傳播を慮る彼の懸念からであつた。然るにマケドニアの教會は他の地方に活動しつゝあるパウロを支へるために金銭を贈つて、それに由つてパウロは遺憾なく傳道するを得た。然し彼は其の奉仕を爲すことは止むを得ざる行動であつた。コリント教會が之を支へても支へなくとも彼は福音を傳へねばならなかつた。其の勝利こそ彼の唯一の報酬であつた。恰かもコリント郊外に行はれるイズミアン競技と同様で、準備に充分の練習がなければ不朽の冠は戴けなかつた。彼は自制を以て其の不朽の冠を得るに努力すると言ふ。

一、我は自主の者ならずや、使徒にあらずや、我らの主耶穌を見しに非ずや、汝らは主に在りて我が業ならず

や。パウロは最早モーセの律法に束縛せられる身分ではなく、全く自由の基督者である。彼は幻にもあらず、靈的恍惚境に於てにも非ず、ダマスコの途上に於て人間としての榮光輝く贖主を目撃した。而して彼の信仰も彼の事業も其の日から生じた。『耶穌』とパウロが特別に言ふ場合には歴史上の人格を指してゐる。而して其の經驗の顯現としてコリントを始め全世界のパウロの事業は行はれてゐる。二、我他の人には使徒ならずとも汝らには使徒なり、汝らは主にありて我が使徒たる職の印なればなり。コリント教會に於て『我はケバに屬す』と叫んだ連中以外にも尚ほ何れの所に於てもユダヤ教的黨派がパウロの使徒權に反對した。それは後書第十章以下に抗辯されてゐる。これは他の人には使徒でないと言ふのではない、他の人には使徒と目せられないでも、汝らが回心して聖靈を受けて恩寵に成長してゐることは使徒たるの實證であると言ふ。三、我を審く者に對する我が辯明は斯くの如し。如何にパウロの使徒權に抗辯しても次の事實に由つて事明白であると言ふ。四、我らは飲食する權なきか。マルコ六の十、ルカ十の七、二十二の三十に耶穌が命ぜられてゐる所であるが、パウロの反對者は主の選定せられた十二使徒のみに限ると論じた。五、我らは他の使徒たち、主の兄弟たち及びケバの如く姉妹たる妻を携ふる權なきか。『主の兄弟』に就いては諸説が行はれる。『彼らは基督降誕後、ヨセフとマリヤの間に生れた子供たちであつたとの自然の註解を否定する何ものも聖書のう

ちに存在しない』(ロバートソン)。「グウナイカ」と言ふ原語が『女』とも讀めるので議論が生ずるが、日本譯は其の確實の註解に準じて『妻』と譯してあるので註解上の議論は不必要となる。確實な根據から言へば妻帯した使徒はペテロとピリポのみが明白になつてゐるが、此の句からすると大抵の使徒は皆既婚者であつたものと思はれる。且つ使徒の家族も教會が此れを支へてゐたことが明かとなる。六、唯だ我とバルナバとのみ工を止むる權なきか。パウロとバルナバが教會からの補助を要求する權能を保留したこと、十二使徒の中になかつたこと、其の傳道を異邦人の間にのみ限つたことが、彼らが基督の眞の使徒でないとの反對を産んだ。此れが主眼でパウロは決して使徒として妻帯の權利あることを主張してゐるのではない。教會は使徒を支へ、其の妻を有するものには妻の分をも教會に支拂はしめる權利あることを主張しやうとするのである。七、誰か己の財にて兵卒を務むる者あらんや。誰か葡萄酒を作りてその果を食はぬ者あらんや。誰か群を牧ひてその乳を飲まぬ者あらんや。必ずしもパウロが企て、譬へたものとは言へないけれども偶然に傳道者の事業が三つの累積で力を加へるやうに描かれてゐる。即ち惡に對する戰を挑む兵士、教會を植ゑ付ける農夫、植ゑ付けられた教會を養ふ牧者として譬へられる。而して何れも其の職分に應じた支拂を受ける。八、我唯だ人の思にのみ由りて此等のことを言はんや、律法も亦斯く言ふにあらずや。人間の意見で言ふのではない。ロマ

三の五、ガラテヤ三の十五參照。それはモーセの律法にも明かであつて、ユダヤ教的反對者も亦之には異存のない所であらう。九、『穀物を碾す牛には口籠を繋ぐべからず』。ユダヤの習慣で牛に穀物を碾こなさせる。日本でも砂糖黍の壓搾に牛を使用するけれども、一體に穀物には使用しないやうである。潔癖のためであらう。エリコの近くでロビンソンは基督者が牛を用ひてゐるのを見たが回教徒はなかつたと言ふ。此の誠は人道主義から來てゐる。出エジプト記二十の十、二十三の十二、箴言十二の十參照。十、また専ら我らのために之を言ひ給ひしか、然り我らのために錄されたり。ユダヤ人は舊約の意義を註解するに往々其の文字通りの意味を全く顧みずに比喩的にのみ取扱つた。此所でパウロは此の誠も牛に關するものであるかと言ふとそれは更に高い意味があると言ふ。勿論牛に對しても此の誠が實行されねば高い意義も失はれることとなるのである。耕作に従事するもの、穀物を碾す者を福音のために活動する基督教々師や使徒に譬へて斯く言ふのである。而して神は彼らを支へねばならないことを誠めて居られると言ふ。十一、若し我ら靈の物を汝らに蒔きしならば汝らの肉の物を刈り取るは過分ならんや。基督者の常識からして低い肉的な物を高い靈的な物を受けた報酬に供提するのは決して過分とは言へないと。十二、若し他の人汝らに對して此の權あらんには況て我らをや。第二節參照。後書(十一の二十、十二の十四以下)には更に強い語句を用ひて他の厚かましい教

師たちが自分の回心者たちに對して行ふ無遠慮な行動を描いてゐる。パウロは此所で『我ら』と言つてゐるけれど其の掲げる所は彼のコリント教會に對する行動と關係とであつて、彼は常に彼らの『父』であると言つてゐる。彼は他の教師以上權能を有しながら曾て之を行使しなかつた。唯だ基督の福音に障礙なきやう。其の職業的傳道者であるとの攻撃を避けることに注意したと。十三、聖なることを務むる者は宮のものを食し云々。祭司やレビ族は祭壇や神殿關係のもので生活することを承認せられてゐると。十四、主も亦福音を宣傳する者の福音によりて生活すべきを。第四節註參照。ルカ十の七、マタイ十の十に主耶穌は斯く命ぜられてゐる。十五、されど我は此等のことを一つだに用ひし事なし。此の機能を楯に取つた行ひは聊かも爲さなかつたと。誰も我が誇を空しく爲さるべし。その權利を要するのではない。若しそんなことをする位ならば死んだ方がよいと言ふ。而して此の最後の句に就いては色々な議論があるが、誰も自分の矜持してゐる所を無視してくれるなど言ふにあらう。十六、我福音を宣傳ふとも誇るべき所なし、已むを得ざるなり。それでは福音を傳へることが彼の大きな誇、即ち他に對して自分の優越を誇るためかと言ふと、それを誇だと誤解してくれては困ると言ふ。見よ、報酬を受けないで傳道してゐると主張する或る人々の如何にも下卑た誇を臆面もなく講壇上から放散する様を。パウロが福音を傳へるのはそんな下品な心事からではなかつた。已むに已まれな

いからであつた。福音を傳へなければ神の罰を免れないと覺悟してゐるからである。それは恩寵の感激から生ずる彼の神に對する義務の觀念から外ならなかつた。已むを得ざる行動であると彼は言ふ。従つてそれを誇る餘地はなかつた。十七、若し我心より之をなさば報を得ん、たとひ心ならずとも我はその務を委ねられたり。若し自分が選定した職業として福音を傳へてゐるのならば、其の報酬を求めやう。然しそれが自分自身の選定ではないならばそれは自分に委託せられた職分であると。十八、然らば我が報は何ぞ、福音を宣傳するに人をして費なく福音を得しめ、而も福音によりて我が有てる權を用ひ盡さぬこと是なり。金を受取らないとすれば彼に對する至當の報酬は何であらうか。それは人に費用を掛けずに福音を傳へるにある。而して自己を棄てた服從に由つて神に事へる満足がそれである。福音の傳はるのに障礙を置かないやうに心掛けるのがそれであると。『福音によりて』は『福音の宣教によりて』の意味でコリント教會から其の費用の支辨を受ける權利があるけれども、それを保留して其の全權能を用ひないのが彼の得べき報酬であると言ふ。十九、我凡ての人に對して自主の者なれども更に多くの人を得んために自ら凡ての人の奴隷となれり。パウロは給料を受けた傳道者のやうに特別の義務に束縛せられてゐるものではないけれども尚ほ自分が他の方法で人を得てゐる以上に福音に人を導かんがために全く義務に束縛せられてゐるもの、やうに奉仕すると。二十、我ユダヤ人に

はユダヤ人の如くなれり云々。彼は基督の奴隸となつて他の人々を基督のために得んとして其の人々の奴隸となつた。即ち忠實な家司の如く、基督のために人を得んがためであつた。彼は其の母系がユダヤ人であるテモテに割禮を受けた如きは其の一例である。それはユダヤ人に道を説かんがためには自ら律法の下にゐるものではなく、自由であるけれども律法を守つたからである。二十一、律法なき者には——我神に向ひて律法なきにあらず、反つて基督の律法の下にあれど——。異邦人に對してはユダヤの律法に煩はされることなく基督に由つて律法の完うせられることを教へてゐる。彼は自ら異邦人と偕に食事したのみならず、尙ほ彼らと共に食することを拒んだペテロを面責した。而してユダヤ人からは權威あるものと認められてゐる律法を更に顧みなかつた。然し異邦人と雖も其の良心の律法には従はねばならないし、ユダヤ人にしろ、異邦人にしろ基督者は耶穌の生命の靈が示す（ロマ八の二）律法、其の愛の律法、互に勞を負ふて之を充たすべき基督の律法には服従しなければならぬ。二十二、弱き者には弱き者となれり。自分の良心では更に顧みないでよいと思ふことでも幼稚の者の良心に弛みを與へることを慮つて弱き者と同様な行動を取つたと。凡ての人には凡ての人の狀に従へり。言ふまでもなく道徳上に關係のない限りであつて、彼らが誤と認め、疑問としてゐる所を避けた『タルソは彼に多方面たるべき教育を授けた』（ラムゼイに據る）。二十三、我福音のた

めに凡ての事をなす。他を救ふためにもあらゆる努力と周到な注意を怠らないのであるが、自分の靈魂の救はれんがためには如何なる事でも辭しないと云ふ。是れ我も共に福音に與らん爲なり。即ち他人々を之に導かうと努力してゐる其の救を自分も取り失はないためであると。福音は即ち凡ての人に備へられてゐるが、彼も之に漏れないために努めると云ふ。二十四、褒美を得る者の唯だ一人なるを。此れはコリントの近郊で催されたイズミア競技から採つた譬に相違はない。而して走る者は澤山あるが褒美を得るものは其のうちの一である。基督教のうち一人より眞に救はれるものがないと言ふ意味ではあるまい。『基督者は悉く勝利者である、故に勝利者の如く競走せよ』（マツシイ）。『六〇六、四分の三呎の延長のコース』（フキンド）。『單に公衆娛樂のためではなかつた。イオニヤ種族の守護者たる神々への奉納の競技であつた』（リアス）。二十五、凡て勝を争ふ者は何事も節し慎む。今もマツチやレエス前に各學校の選手は嚴重な合宿所に隔離せられて萬事素行を慎んで練習するが、コリントのイズミア競技の出場者も飲食、素行を慎んだと思はれる。彼は朽つる冠冕……我らは朽ちぬ冠冕。パセリイの葉を綴つた冠が勝利者に被らされたのであるが、其の名譽は全ギリシヤ世界に喧傳せられた。それでもそれは一時的のものに過ぎない。其の冠を得んためにさへそれほどの準備をするのならば、まして色褪せない永遠の褒賞を授けられる事業は一層の謹嚴な準備

が必要であると。二十六、我が走るは目標なきが如きに非ず、我が拳闘するは空を撃つが如きに非ず。彼の競走には決勝點が明かで、彼の撃つ拳には對手の急所が規はれてゐると。二十七、我が體を打ち擲きて云々。拳闘の相手は誰か言ふと自分の肉體で、それを罪に占領せられないやうに、神に服従せしめるには苦闘を要する。其の競技の番組が讀み上げられるやうに他の人が競技場に呼び入れられて自分が除かれては大變だからと言ふ。

第拾章

昔のイスラエルを鑑として

一一十三

一兄弟よ、我なんぢらが之を知らぬを好まず。即ち我らの先祖はみな雲の下にあり、みな海をとほり。二みな雲と海とにてバプテスマを受けてモーセにつけり。三而して皆おなじく、靈なる食物を食し、四みな同じく靈なる飲物を飲めり。これ彼らに隨ひし靈なる岩より飲みたるなり、その岩は即ちキリストなりき。五然れど彼らのうち多くは神の御意に適はず、荒野にて亡されたり。六此等のことは我らの鑑にして彼らが貪りし如く惡を食らざらん爲なり。七彼らの中の或者に效ひて偶像を拜する者となるな、即ち『民は坐して飲食

し立ちて戯る』と録されたり。八又かれらの中の或者に效ひて我ら姦淫すべからず、姦淫を行ひしもの一日に二萬三千人、死にたり。九また彼等のうちの或者に效ひて我ら主を試むべからず、主を試みしもの、蛇に亡されたり。十又かれらの中の或物に效ひて眩くな、眩きしもの、亡す者に亡されたり。十一彼らが遭へる此等のことは鑑となれり、かつ末の世に遭へる我らの訓戒のために録されたり。十二然らば自ら立てりと思ふ者は倒れぬやうに心せよ。十三汝らが遭ひし試煉は人の常ならぬはなし。神は眞實なれば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試煉に遭はせ給はず。汝らが試煉を耐へ忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん。

此所に描く所はパウロがラビの註解法を用ひたもので、基督者の秩序の前兆と禮典の安全に就いての象徴であるとして之を靈的に説明してゐる。即ち雲と海とはバプテスマを示し、天からのパンと岩から湧いた水とは聖餐を象徴する。『岩は即ち基督なり』。基督は現在其の聖禮典に示される恩寵を彼らに供へつゝ、知られないイスラエルと偕に在し給ふた。然かもそれは彼らのためには無効に終つた。彼らは偶像禮拜や姦淫や謀叛や不満に心を奪はれてゐた。彼らの經驗こそ誠に不動の訓誨となる。禮典は其の儀式には少しも保證はないのであつて、誘惑は決して消滅はしない。其の唯一の保護は儀式に含まれる恩寵で、謙遜つて之を信する靈魂は常に之を受けることが出来ること。

一、兄弟よ、我汝らが之を知らぬを好まず、即ち我らの先祖は皆雲の下にあり、皆海をとり。コリントの教會には多くのユダヤ人があつた點で舊約の民族は彼らの『先祖』であつたに相違ないが、其の宗教的經驗から言ふと彼らは信仰の後繼者たる異邦人には『先祖』であつた。故にパウロは基督教會を常に『神のイスラエル』と稱した。『雲』は上から彼らを導き紅海は開けて彼らを通せしめた。(出エジプト十三の二十一、二十二、十四の十九、二十四、十一の三十八等)。二、皆雲と海にてバプテスマを受けてモーセにつけり。彼らは此の不思議の事實に接してからモーセを信頼し、其の指揮に服するに至つた。即ちモーセの導きに由つて神との交際を認めるに至つた。『雲』は聖靈を象徴し『海』は水を象徴してゐる。故にバプテスマに相當し、昔のイスラエルがモーセのバプテスマに入れられたやうに今のコリント教會員は基督のバプテスマに入られた。三、皆同じく靈なる食物を食し。聖餐を象徴するマナは超自然な源から來たもので、生命のパンを示す『靈的』意義を有した。食物は又『彼らの肉體の需用の直接の救護と不斷の供給が彼らの靈性即ち彼らの信仰を強からしめる効力あるやうに企てられた』(マツシイ)。四、皆同じく靈なる飲食を飲み。これ彼らに随ひし靈なる岩より飲みたるなり。その岩は即ち基督なりき。マナと同時に奇蹟的に岩から迸り出た水を飲んだ。此れも其の本源は神にあり、信仰を強めんがために靈的の意義を有したと言ふのであるが其の物語

の出所に就いて色々な議論がある。恐らくイスラエルが荒野に彷徨してゐる間其の後に岩が何時も隨従し、水を供給したと言ふラビの傳説を基礎として描いたものと思はれる。それは先在の基督を指すもので、イスラエルが渴のために死ぬるのを救はれたものは基督であつたと言ふ。即ち彼らの肉體を復活せしめ、其の信仰に力を與へた因は基督の現在し給ふためであると言ふにあらう。(民數紀二十一の十六以下、又同二十の一以下参照)。五、然れど彼らのうち多くは神の御意に違はず、荒野にて亡されたり。ヨシユアとカレブのみが約束の地に入るを得たに過ぎない。彼らは皆其の雲や海のパプテスマ、天來の飲食で大いなる祝福を受けてゐるに拘らず、神の恩寵深き目的に到達し得たものは甚だ僅かであつた。恰かもバプテスマと聖餐との特殊な恩恵に浴してゐるコリント教會員と同様で、若し彼らが其の靈的の意義を取り逃がせば彼らを救はんとの神の思召は成就しないこととなる。六、此等のことは我らの鑑にして彼らが貪りし如く惡を貪らざらん爲なり。以上のものは我らの先例となるもので、其の覆つたのを見ては自分たちの戒とし、其の救はれたものを見ては之に倣はんことを求めねばならぬ。原語は前轍を履む危険を指す意義がある。七、彼らの中の或者に效ひて偶像を拜する者となるな。即ち『民は坐して飲食し立ちて戯る』と錄されたり。『惡を貪る』ものは偶像禮拜と淫行の者の類であるが、更に偶像を拜する者と特別の例を設けてゐる。それはコリント教會で最も重要

な問題の一つであつたからであらう。パウロはコリント教會の或る知識階級が基督者の自由と稱し、其の外形に拘泥しないことを口實にして偶像の祭典の際、其の宴席に列して飲食することを意に介しない態度をするが、それは彼らが自ら容してゐるほど弊害のないものではない、偶像禮拜者特有の不仕墮落に自ら感化せられることを認めて之を戒飭するものと思はれる。「立ちて戯る」は出エジプト記三十二の六に見える句で、ダビテが神の契約の櫃の前で舞踊したやうにイスラエルが金の犢牛の偶像の前で亂舞した様を言ふのである。故に此れは偶像禮拜に伴ふ其の祭典の宴會を指したものである。八、又彼らの中の或者に效ひ我ら姦淫すべからず、姦淫を行ひしもの一日に二萬三千人、死にたり。偶像禮拜と姦淫とは密接な關係のあるのが不思議である。宗教に非ざるものを偶像的に取扱つて禮拜する有名な日本の神社の存在地を見よ。他の側からは聖都などと言ふが品行方面から見れば最も醜惡な淫亂の都であることは一つの例外もない。故に神に對する不徳の次には此の汚行が掲げられる。荒野に於てイスラエルの民はモアブの女から偶像の祭に招かれて其の罪に陥つた。尙ほ此所でパウロは俄かに『我ら』と言つてゐる。讀者の立場に自分を置いて戒めるのである。民數紀二十五の九には其の數を二萬四千と言ふ。パウロはそれを重大事實と認めず、唯だ記憶から之を記し誤つたものと思はれる。然し註解者中には千人は士師たちが殺したもので、疫病のために死ん

だものは二萬三千であつたと論ずる。然し本文には明かに疫病で死んだものは二萬四千と記してある。數に千の誤があつてもパウロの言はうとする戒の權威には何の關係もない。九、また彼らのうちの或者に效ひて我ら主を試むべからず、主を試みしもの、蛇に亡されたり。イスラエルが神は罪を罰し給ふや否やを試験した意味であらう。前に論じたのは肉慾の罪で、此れは不信の罪である。神が果して刑罰を與へ給ふ御意があるか無いかを試みると言ふにある。其の試みた結果は毎日蛇に亡されて行つたと。コリント人が恰かも昔のイスラエルのやうに（民數紀二十一の四―六）靈の食物、飲料を無視し、水を蔑して、舊來の異教徒の生活に歸つたことを指して言ふ。十、又彼らの中の或者に效ひて眩くな、眩きし者、亡す者に亡されたり。不遜を抱く相手や事柄は舉げてない、モーセやアロンに對して眩いたコラ及び其の仲間（民數紀十六の四十一以下）の刑罰を指したもので、コリント教會員が其の指導者たるパウロに眩くのも亦同様であらう。『亡す者』は惡魔ではない刑罰のために差向けられる破壊の天使であらう。十一、末の世に遭へる我らの訓戒のために錄されたり。以上のやうな實例は後の人に其の轍の跡を示すもので、『末の世』即ちメシヤの降臨せられた時代の人々に教訓を與へるためにと書き遺されてゐると。『基督教會は人類の靈的訓練の世嗣である』（フキンド）初代教會の人々には基督の降臨が末の世で其の直ぐにも來り給ふべき再臨を以て世の終であると考へた。

十二、自ら立てりと思ふものは倒れぬやうに心せよ。神の恩恵の経験に由つて如何なる誘惑に對しても搖がないと考へてゐるものはイスラエルの先祖が其の信仰を強められる方法を神から授かつてゐながら失敗したやうに失敗しない事に心掛けよ。十三、汝らが遭ひし試煉は人の常ならぬはなし。神は眞實なれば、汝らを耐へ忍ぶこと能はぬほどの試煉に遣はせ給はず。彼らが其の過去を顧みれば忍耐の出来ないやうな試煉には遣はなかつたであらう。特別に除外例の人間の力に及ばないやうなものに出遣はなかつた経験からすれば將來も亦同様であらう。神は忠實な父であるから、其の程度を超えるやうな誘惑に陥る人を見過しにはし給はない。汝らが試煉を耐へ忍ぶことを得んために之と共に遁るべき道を備へ給はん。神は我らに賦與した能力の程度を御承知である。凡て神が配劑せられる。従つて其の事情や境遇の犠牲となるやうに我らを放任せられない。其の忍耐力の限度に由つて試煉を與へられると。

偶像の宴席に列なる危険

十四—二十二

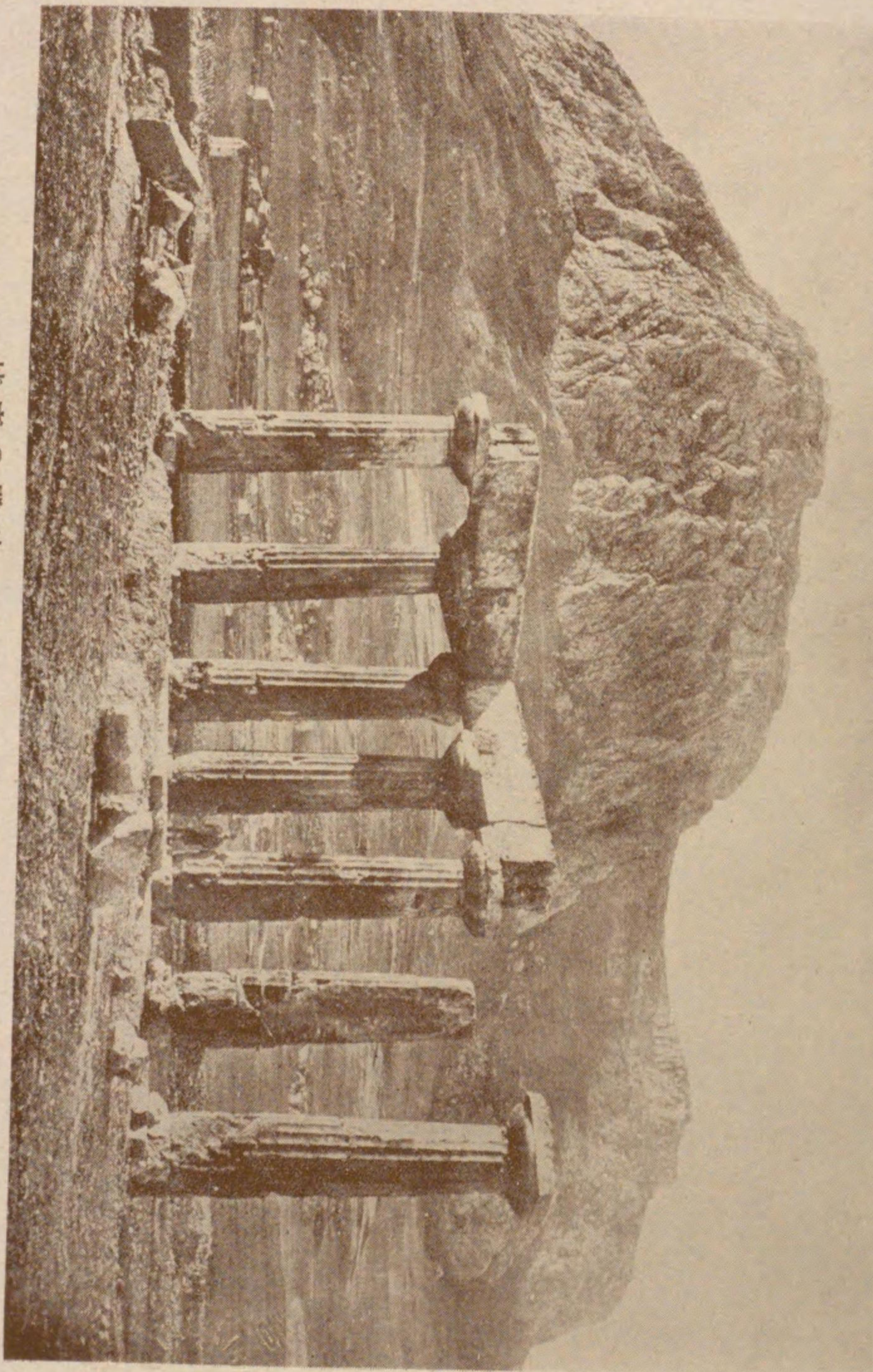
十四さらば我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。十五われ慧き者に言ふごとく言はん、我が言ふところを判断せよ。十六我らが祝ふところの祝の酒杯は、これキリストの血に與るにあらずや、我らが擘く所の

パンは、これキリストの體に與るにあらずや。十七パンは一つなれば、多くの我らも一體なり 皆ともに一つのパンに與るに因る。十八肉によるイスラエルを視よ、供物を食ふ者は祭壇に與るにあらずや。十九然らば我が言ふところは何ぞ、偶像の供物はあるものと言ふか、また偶像はあるものと言ふか。二十否われは言ふ、異邦人の供ふる物は神に供ふるにあらず、悪鬼に供ふるなりと。我なんぢらが悪鬼と交るを欲せず。二二なんぢら主の酒杯と悪鬼の酒杯とを兼飲むこと能はず。主の食卓と悪鬼の食卓とに兼與ること能はず。二三われら主の妬を惹起さんとするか、我らは主よりも強き者ならんや。

パウロは進んで言ふ、偶像を離れよ、これと協同する勿れと。偏狹な人たちの議論にも道理があつた。知識階級はギリシヤ神秘説の犠牲の宴會が神を受ける信念の食物で、聖餐に基督の血と肉とを受けるものが其の生命を受けるのと同様であると言つた。斯くの如き解釋からすれば偶像の生命に一致すべき筈である。勿論偶像は無いものであらう。然し情慾や泥酔は恐るべき實在で、異教は其らの禮拜である。偶像禮拜は不潔の儀式で、それに穢されないうで其の宴會に與ることを得ない。斷乎として之を棄てよ。而して大能の神の正しき憤を招かないやうに努めよと。

十四、然らば我が愛する者よ、偶像を拜することを避けよ。自ら誘惑に近づきながら、それから救はれることを期待してはならないと前句を受けて言ふから『さらば』である。彼らの心掛ける所はどう

して彼らに近づくかではなく、どうして彼らを避けるかでなければならぬ。それは世間を避けるなど言ひながら其の自由を束縛することは少しく苛酷に過ぎるやうに思はれる。故に『愛する者よ』と調子を弛めるのである。厳格な忠告も愛すればこそであると。十五、我慧き者に言ふ如く言はん。汝らは充分の知識を有するものであるから、知識ある人に言ふやうに言ふがと。『恐らく靜かに誠める調子があらう』(ロバートソン)。十六、我らが祝ふ所の祝の酒杯は、是れ基督の血に與かるにあらずや。『祝ふ』は『祝謝』即ち『感謝』の意味である。此れは過越祭のときに於ける感謝の際の酒杯に當る。『我らが祝ふ』と言ふので其の教會が共同の神に對して團體としての感謝を示す。我らが擧ぐ所のパンはこれ基督の體に與かるにあらずや。此の前後の關係から言つても又其の他の所に見る所から言つても、パウロは酒杯とパンとが基督の實質的な血と肉とを指すものとは認めてゐない。其の獻けられたものに何の意味もないと偶像の供物に對して言つてゐる通り、八の八に『我らを神の前に立たしむるものは食物に非ず、されば食するも益なく、食せざるも損なし』と言ふ。故にパウロは其の祝謝して之を受けるに拘らずパンと葡萄酒とは何の意義なく、更に基督の血と肉すら何らの利益もない。然らば聖餐の効果は何處にあるかと言へば、その靈的の雰圍氣にあり、基督と我ら全體が一體である意義が明かとなり、且つ基督の現在し給ふこと、其の權能とを意識する點にある。



墟廢の殿神ロポアるけ於にトソリコ

『其所には基督の體なる一つ體、其の教會たる體、各基督者が四肢五體たる體があるのみである。それが「我が體なり」の意味である。……パウロが其の讀者を指導しやうとする中心點は、犠牲として献けた物を儀式的に受けることは其の犠牲的行動及びそれに含まれる全體の行動の負擔者となるとの意味だと言ふにある』（ロバートソン）。十七、パンは一つなれば、多くの我らも一體なり、皆とも一つのパンに與るに因る。基督との交際を強調するために斯く言ふ。教會の一致は、會員が一つのパンを擘く事實からも推論せられ、其の一致は彼らが基督と一體であることを推論してゐる。基督と一體であるものは道德上偶像の禮拜との交際一致は出來ないと更に言はうとする。十八、肉によるイスラエルを視よ、供物を食ふ者は祭壇に與かるにあらずや。祭司とイスラエルの民は祭壇で焼かれなかつた犠牲の供物の一部を食つて祭壇との一致を示す、即ち祭壇が設けられた意義（神の現在と恩顧とを代表する）、其の眼に見える象徴たる祭壇が、献けた民のために宗教上、道德の効力を示すこと、なる。偶像禮拜に關係ある宴席に喜んで列なるものも偶像に對して同様の意義を生ずる。十九、然らば我が言ふところは何ぞ、偶像の供物はあるものと言ふか、また偶像はあるものと言ふか。段々論じて來た所、又論じやうとする所が八の四に言ふ所と矛盾して來るのを慮つて偶像も、其の供物も實は何の意味も効果もないものであるがと先づ警戒をしてから次を論ずるのである。二十、否、我は

言ふ、異邦人の供ふる物は神に供ふるに非ず、悪鬼に供ふるなりと。偶像自身は何らの存在を有せず、意義もないものであるが、偶像禮拜には然し悪鬼、即ち惡の靈が伴ふと。パウロがユダヤ人の思想に従つて之を言つてゐると否とに拘らず、此の言明は眞理である。偶像禮拜其のものは意義のない祭事であつても、神ならぬものを神として祭つた結果、其の宴會は惡靈が支配する所となる。幾多の淫靡不徳が之に伴つて生ずる。地方の青年男女が狂喜して樂しむ偶像の祭典が風儀にどんな結果を生ずるかは事實が之を示してゐる。今日の實例を以て之を言へば、曾て京都の天満宮の『宗教的に宮司が之を利用した結果であらう』祭禮には京都市内の八遊廓の藝妓が交代で出場して手踊を演じて祭典を援けた。而して男女中等學校の生徒が同時に參拜せしめられてゐる。祭典は惡鬼の活躍する舞臺となつた。其の祭典の宴席が何處でどうして行はれるかは想像するまでもあるまい。昔も同様であつたらう。アプロダイトの祭典の如き前の例を以て見れば思ひ半ばに過ぎやう。我々が惡鬼と交るを欲せず。即ち惡鬼の社會に加はるを望まない。之を欲しないものは基督者のみではあるまい。今日ならば眞の教育家、眞の愛國者でも之を欲しないであらう。二十一、汝ら主の酒杯と惡鬼の酒杯とを兼飲むこと能はず云々。實際に不可能だと言ふのではない、精神上、道徳上不可能だと言ふのである。兩方の空氣の中に呼吸は不可能である。従つて事實上にも出來ないことになる。『惡鬼の

酒杯』は偶像に献けた葡萄酒を指す。聖餐の酒杯と偶像の御神酒とは同時に飲めないと言ふ。二十二、我ら主の妬を惹起さん。申命記三十二の二十一の引用。惡鬼と神とを同位に置くを得やうか。『主』は舊約ではエホバを指す。然し前節から解して來るとパウロは是れを基督に引き當てゝゐる。我ら主より強きものならんや。斯くの如き二股の行動を鋭敏で謹嚴な人物が恐るべき禍であると同時に不合理千萬の行爲と認めることは言ふまでもあるまい。如何に大膽な人間でも神を等閑に、神に不虔な行動は採ることを得まい。偶像の勢力に己を委ねる基督者は斯くの如き地位に自らを置くと。

基督者の自由と其の限界

二十三—十一の一、

二一 一切のもの可からざるなし、然れど一切のもの益あるにあらず。一切のもの可からざるなし、然れど一切のもの徳を建つるにあらず。二四 各人のが益を求むることなく、人の益を求めよ。二五 すべて市場にて賣る物は良心のために何を問はずして、食せよ。二六 是は地と之に滿つる物とは主の物なればなり。二七もし不信者に招かれて往かんとせば、凡て汝らの前に置く物を良心のために何を問はずして食せよ。二八人もし此は犠牲にせし肉なりと言はゞ告げし者のため、また良心のために食すな。二九 良心とは汝の良心にあらず、かの人の良心を言ふなり。何ぞ、わが自由を他の人の良心によりて審かるゝ事をせん。三十もし感謝し